



ユーザーガイド

HP Remote Graphics ソフトウェア 7.6

概要

このガイドには、HP Remote Graphics ソフトウェア (RGS) のインストール、設定、および使用を行ううえで必要な情報が記載されています。このガイドには、Linux、VDI、および HP 製品以外での Sender システムの使用についても記述されておりますが、**日本ではそれらの環境での使用はサポートしておりません**のでご了承ください。

© Copyright 2019 HP Development Company, L.P.

Linux は、Linus Torvalds の米国およびその他の国における商標または登録商標です。Microsoft および Windows は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。NVIDIA および TwinView は、NVIDIA Corporation の米国およびその他の国における商標または登録商標です。Red Hat および Red Hat Enterprise Linux は、Red Hat, Inc. の米国およびその他の国における商標です。VMware および VMware vSphere は VMware, Inc. の米国またはその他の地域における商標または登録商標です。

ここで取り扱っているコンピューターソフトウェアは秘密情報であり、その保有、使用、または複製には、HP から使用許諾を得る必要があります。FAR12.211 および 12.212 に合致して、商用コンピューターソフトウェア、コンピューターソフトウェア文書類、および商用品の技術データは、ベンダー標準の商用使用許諾に基づき、米国政府に使用許諾されます。

本書の内容は、将来予告なしに変更されることがあります。HP 製品およびサービスに対する保証は、当該製品およびサービスに付属の保証規定に明示的に記載されているものに限られます。本書のいかなる内容も、当該保証に新たに保証を追加するものではありません。本書に記載されている製品情報は、日本国内で販売されていないものも含まれている場合があります。本書の内容につきましては万全を期しておりますが、本書の技術的あるいは校正上の誤り、省略に対して責任を負いかねますのでご了承ください。

初版：2019年1月

製品番号：L53029-291

他社製のソフトウェアについての注意事項

他社製のソースコードおよびライセンスは、必要に応じて HP Remote Graphics ソフトウェアで再配布されます。

管理者が入力する構文の例

ユーザー インターフェイスに入力する必要があるテキストは固定幅フォントで示されます。

番号	説明
括弧や波括弧のないテキスト	示されているとおりに入力する必要がある項目
<山括弧内のテキスト>	値を入力する必要があるプレースホルダー。括弧は付けないでください
[角括弧内のテキスト]	オプションの項目。括弧は付けないでください
{波括弧内のテキスト}	1つだけを選択する必要がある項目のセット。波括弧は入力しないでください
	1つだけを選択する必要がある項目の区切り文字。縦線は入力しないでください
...	繰り返しが可能または必要な項目。省略記号は入力しないでください

目次

1 RGS の概要	1
機能	2
RGS の異なるバージョン間の相互運用性	3
ソフトウェアの RGS との互換性	4
RGS Sender のライセンス登録	4
その他の情報の参照先	5
2 お使いになる前に	6
3 インストール	7
RGS Receiver のインストール (Windows)	7
インストーラー ウィザードを使用した RGS Receiver のカスタム インストールの実行	7
コマンドラインでの RGS Receiver のカスタム インストールの実行	9
RGS Sender のインストール (Windows)	10
インストーラー ウィザードによるインストール	10
コマンドラインによるインストール	11
RGS Receiver のインストール (Linux)	13
RGS Sender のインストール (Linux)	13
RGS Receiver のインストール (Mac OS)	13
インストーラー ウィザードによるインストール	14
コマンドラインによるインストール	14
4 RGS Receiver の概要	15
RGS Receiver を開く	15
RGS Receiver の GUI (Windows/Linux)	16
RGS Receiver の GUI (Mac OS)	16
RGS セッションの開始	17
RGS Receiver ウィンドウの GUI (Windows/Linux)	17
RGS Receiver ツールバーの GUI (Windows/Linux)	18
RGS Receiver ウィンドウの GUI (Mac OS)	19
Setup Mode	20
Setup Mode のホットキー シーケンスの変更	20
RGS Receiver の設定	21
接続	22
パフォーマンス	22

ジェスチャ（タッチ対応の Windows デバイスのみ）	23
オーディオ	24
ネットワーク	24
ホットキー	25
ログ	26
統計（Windows/Linux のみ）	26
RGS Receiver のコマンドライン オプション	27

5 RGS Sender の概要 28

RGS Sender の概要（Windows）	28
RGS Sender の概要（Linux）	28
RGS Sender のコマンドライン オプション（Windows）	28
RGS Sender のコマンドライン オプション（Linux）	29
RGS Sender の通知アイコン（Windows のみ）	29
RGS Sender イベント ログ（Windows のみ）	30
RGS Sender へのアクセスのフィルタリング	30

6 証明書の構成 31

送信側コンピューターの検証	31
証明書の検証失敗ポリシー	31
エンドユーザーによる送信側コンピューターの証明書の検証	32
CA によって署名された証明書の使用	32
CA によって署名された証明書を使用するための送信側コンピューターの構成	32
送信側コンピューターの Ice（Interactive Connectivity Establishment）構成 ファイルの変更	32
送信側コンピューターの構成ファイルの変更	33
CA によって署名された証明書を使用するための受信側コンピューターの構成	33
受信側コンピューターの Ice 構成ファイルの変更	33
受信側コンピューターの構成ファイルの変更	34
証明書の削除	35
Windows	35
Linux	35
macOS	35
証明書の構成のトラブルシューティング	36

7 RGS 機能の使用 37

RGS Advanced Features（Windows/Linux のみ）	37
Advanced Video Compression（Windows/Linux のみ）	38
HP Velocity（Windows/Linux のみ）	38
認証	38

認証方法	38
標準認証	39
Kerberos 認証の使用	39
Easy Login	39
シングルサインオン	39
スマートカードリダイレクトの使用	40
スマートカードリダイレクトのためのリモート USB の設定	40
制限	41
コラボレーション	41
ディスプレイ	43
ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整	43
マルチ モニターの概要	43
ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 (Windows ベースの送信側 コンピューター)	43
NVIDIA の解像度の調整 (NVIDIA グラフィックスを備えた Windows ベースの送信側コンピューターのみ)	45
EDID ファイル	45
EDID ファイルの作成および適用	45
カスタム解像度の追加	46
ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 (Linux ベースの送信側コン ピューター)	47
X サーバーの構成	48
EDID ファイルの作成	50
送信側コンピューターの画面ブランキング	50
入力	50
タッチ機能の使用 (タッチ対応の Windows デバイスのみ)	50
Wacom ペンの使用 (Linux)	52
ゲーム モード (Windows のみ)	52
サポートされているキーボードレイアウト	52
リモート オーディオ	52
リモート オーディオの使用 (Windows ベースの送信側コンピューター)	53
リモート オーディオの使用 (Linux ベースの送信側コンピューター)	53
PulseAudio	53
ALSA	54
リモート クリップボード	55
リモート USB (Windows/ThinPro のみ)	56
個々の USB デバイスのリモート接続動作の設定 (Windows のみ)	56
USB マイク	57
リモート USB のアクセス制御リスト	57
USB デバイス情報の特定 (Windows)	58
USB デバイス情報の特定 (Linux)	59

HP ThinPro でのリモート USB の有効化	59
Directory モード	59
ディレクトリ ファイルの形式	59
Directory モードでの RGS Receiver の起動 (Windows)	60
Directory モードでの RGS Receiver の起動 (Mac OS)	61
8 構成ツールおよびプロパティ	62
RGS Receiver の設定の優先順位	62
[RGS Receiver Configuration]ツールの使用	63
全般	63
イメージおよび表示	65
オーディオ	66
ネットワーク	67
HP Velocity (Windows/Linux のみ)	68
USB (Windows/Linux のみ)	68
ホットキー	69
ログ	70
アクティベーション (Windows/Linux のみ)	71
RGS Sender の設定の優先順位	71
[RGS Sender Configuration]ツールの使用	71
全般	72
認証 (Windows のみ)	72
イメージおよび表示	73
ネットワーク	74
HP Velocity	75
USB	75
コラボレーション	76
ログ	77
診断	77
証明書	77
RGS のプロパティの手動設定	78
プロパティの構文	78
プロパティの値を設定ファイルの中で設定する方法	78
コマンドラインでのプロパティ値の設定	78
その他のプロパティ	79
その他のグローバル プロパティ	79
セッションごとのプロパティ (RGS Receiver のみ)	81
ウィンドウの配置およびサイズ プロパティ (セッションごと)	81
クリップボード プロパティ (セッションごと)	82
自動起動プロパティ (Windows のみ)	82

9 パフォーマンスの最適化	84
全般	84
ネットワーク	85
10 トラブルシューティング	86
接続が失敗した場合	86
受信側コンピューターのチェックリスト	86
送信側コンピューターのチェックリスト	86
Kerberos	87
送信側コンピューターでのネットワーク インターフェイスのバインド	88
手動でのネットワーク インターフェイスバインドの再設定	88
[RGS Sender Configuration]ツールを使用したネットワーク インターフェイスバインドの再設定	89
ネットワーク タイムアウト	89
グラフィックスの問題 (Linux)	91
フルスクリーンの十字型カーソル	91
受信側コンピューター上でのガンマ補正	91
黒またはブランクの RGS Receiver ウィンドウ	91
リモート オーディオの問題	91
リモート USB の問題	92
スマートカードリダイレクトの問題	93
サーバー/ブレードでのマウスカーソルの問題 (Windows の送信側コンピューター)	93
付録 A RGS とリモート デスクトップ接続の切り替え (Windows のみ)	94
付録 B リモート アプリケーション 停止用の エージェントの作成 (Windows のみ)	95
HPRemote ログの表示	95
HPRemote ログの形式	95
エージェント設計のガイドライン	99
デスクトップセッションのログアウト	99
環境を選択してシャットダウン	99
アプリケーションのラッピング	100
管理者アラート	100
ユーザーの切断および再接続の予測	100
一般的なエージェント設計のガイドライン	100
RGS Sender サービスの復旧設定	101
サンプル エージェント	101
付録 C RGS のアンインストール	107
RGS Receiver または RGS Sender のアンインストール (Windows)	107

RGS Receiver のアンインストール (Linux)	107
RGS Sender のアンインストール (Linux)	108
RGS Receiver のアンインストール (Mac OS)	108

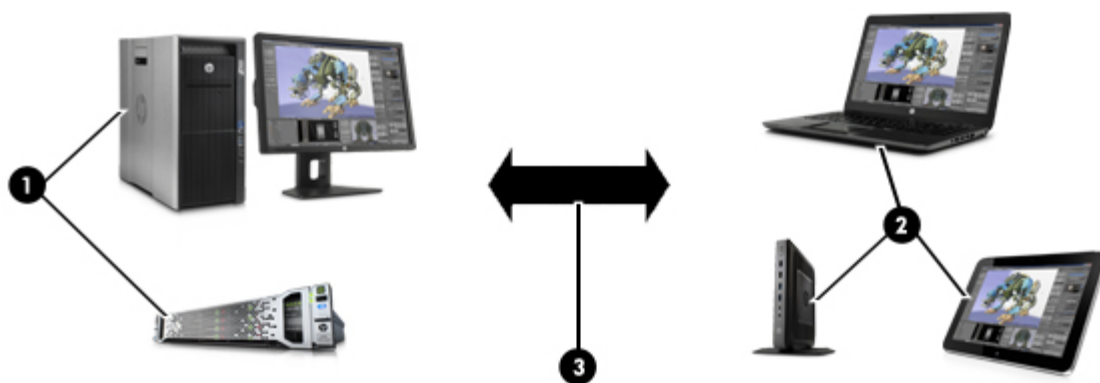
索引	109
-----------------	------------

1 RGS の概要


HP Remote Graphics ソフトウェア (RGS) は、ワークステーション導入のセキュリティ、パフォーマンス、モビリティ、およびコラボレーションを強化します。RGS により、低電力のデスクトップ、ノートブック、または Thin Client を使用して強力なワークステーションにリモート接続し、どのような場所からでもワークステーション上のハイエンドグラフィックパワーが必要なアプリケーションを使用できます。

プログラムはリモートワークステーションで実行され、そのグラフィックスリソースを最大限に活用します。リモートワークステーションのデスクトップは、デジタル画像、テキスト、およびフレームレートの高いビデオアプリケーション用に特別に設計された、先進の画像圧縮技術によって、標準のネットワーク経由でローカルコンピューターに送信されます。

以下の図および表に、RGS の一般的な導入方法を示します。



番号	説明
1	<p>送信側コンピューターは、通常はお使いのソフトウェアをホストする高性能なワークステーション、仮想ワークステーション、ブレード、またはサーバーです。送信側コンピューターにインストールされた RGS Sender が、グラフィックス、オーディオ、および USB データを受信側コンピューターに送信します。送信側コンピューターは、受信側コンピューターから入力および USB データを受信します</p> <p>注記: 必ずしも送信側コンピューターにモニターを接続する必要はありません</p>
2	<p>受信側コンピューターは、通常は RGS Receiver がインストールされているデスクトップ、ノートブック、タブレット、または Thin Client です。RGS 接続は受信側から確立します。受信側コンピューターの RGS Receiver ウィンドウ内に、送信側コンピューターのデスクトップが表示されます。RGS Receiver によって受信側コンピューターでの入力が送信側コンピューターに送信されるため、プログラムをリモートで操作できます</p>
3	<p>TCP/IP ネットワークは、送信側コンピューターと受信側コンピューターの間で、通信リンクとして機能します</p> <p>重要: 送信側コンピューターと受信側コンピューターの間で RGS 接続が確立されるには、両方が同じネットワーク上にある必要があります</p>

 **注記**：RGS のソフトウェアおよびドキュメントでは、送信側コンピューターおよび受信側コンピューターをそれぞれリモートコンピューター、ローカルコンピューターと呼ぶ場合もあります。

ハードウェアおよびオペレーティングシステムのサポートなどの RGS のシステム要件については、このガイドでは説明しません。RGS の一部の機能には、追加のシステム要件がある場合があります。システム要件は『QuickSpecs』に記載されています（[5 ページのその他の情報の参照先](#)を参照してください）。

機能

RGS には、以下のようなさまざまな機能があります。

注：特定のオペレーティングシステムでは、一部の機能はサポートされていません。

機能	説明
3D グラフィックス API のサポート	OpenGL または Direct X ベースのソフトウェアをワークステーションクラスのパフォーマンスで実行できます 注 ：RGS で使用するプログラムおよび構成の種類が推奨されているかどうかについて詳しくは、 4 ページのソフトウェアの RGS との互換性 を参照してください
Advanced Video Compression (Windows®/Linux® のみ)	高品質のビデオストリームに必要なネットワーク帯域幅を削減できます 詳しくは、 38 ページの Advanced Video Compression (Windows/Linux のみ) を参照してください
認証方法	スマートカードリダイレクトなどのさまざまな導入シナリオおよび設定をサポートします 詳しくは、 38 ページの認証 を参照してください
コラボレーション	複数の受信側コンピューターが同じ送信側コンピューターに同時に接続できるため、複数のユーザーが同じデスクトップセッションおよびプログラムを表示したり、操作したりできます 詳しくは、 41 ページのコラボレーション を参照してください
Directory モード	1 台の受信側コンピューターが複数の送信側コンピューターに同時に接続できます 詳しくは、 59 ページの Directory モード を参照してください
ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整	複数のモニターを使用している場合でも、送信側コンピューターのディスプレイの解像度および表示レイアウトを受信側コンピューターと一致するように調整します 詳しくは、 43 ページのディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 を参照してください
HP Velocity (Windows/Linux のみ)	ワイドエリアネットワーク (WAN) 内でのパフォーマンスが向上します 詳しくは、 38 ページの HP Velocity (Windows/Linux のみ) を参照してください
リモートオーディオ	送信側コンピューターから受信側コンピューターへ、高品質のオーディオを低遅延でスムーズかつ継続的に送信します 詳しくは、 52 ページのリモートオーディオ を参照してください


機能	説明
リモートクリップボード	送信側コンピューターと受信側コンピューターの間、または2台の異なる送信側コンピューターの間で、データをカット、コピー、およびペーストできます 詳しくは、 55 ページのリモートクリップボード を参照してください
リモート USB (Windows/ThinPro のみ)	RGS 接続を通じて、受信側コンピューターの USB デバイスを送信側コンピューターにマウントし、送信側コンピューターからアクセスできます 詳しくは、 56 ページのリモート USB (Windows/ThinPro のみ) を参照してください
送信側コンピューターの画面ブランキング	送信側コンピューターのモニター (接続されている場合) の画面をブランキングして、送信側コンピューターにデスクトップセッションが表示されないようにします 詳しくは、 50 ページの送信側コンピューターの画面ブランキング を参照してください
タッチ機能 (Windows のみ)	リモートデスクトップをタッチ入力で制御できます。カスタム ジェスチャを設定可能です。 詳しくは、 50 ページのタッチ機能の使用 (タッチ対応の Windows デバイスのみ) を参照してください

RGS の異なるバージョン間の相互運用性

異なるバージョンの RGS Sender と RGS Receiver の間では、同じプライマリバージョン番号を持つ場合のみ、相互運用性がサポートされます。



番号	説明
1	プライマリバージョン番号 ：プライマリリリースには通常、以前のプライマリリリースとの相互運用性が HP によって保証されないような、大幅なアップグレードおよび変更が含まれています。たとえば、プライマリリリースが異なる RGS Sender と RGS Receiver の間では、接続が許容範囲の品質で機能しない、またはまったく機能しない可能性があります
2	マイナーバージョン番号 ：この番号が 0 以外の場合はマイナーリリースです。通常は、新機能の追加や既存の機能の拡張が含まれています。また、以前のパッチリリースの変更も含まれています。マイナーリリースが異なる (ただしプライマリリリースは同じ) RGS Sender と RGS Receiver の間では、接続が許容範囲の品質で機能します
3	パッチバージョン番号 ：この番号が 0 以外の場合はパッチリリースです。通常は、重大なセキュリティ上の問題または欠陥を修正する場合にのみリリースされます。パッチリリースが異なる (ただしプライマリリリースは同じ) RGS Sender と RGS Receiver の間では、接続が許容範囲の品質で機能します

 **注記**：RGS の各リリースは、変更されたコンポーネントの種類にかかわらず、製品全体が含まれた完全リリースとなります。

ソフトウェアの RGS との互換性

RGS は、ウィンドウ モードで実行されるほとんどのソフトウェア（OpenGL および Direct X ベースのソフトウェアを含む）に対応します。一部の例外については、以下を参照してください。

- RGS Sender のインストールにより、送信側コンピューターでビデオ オーバーレイ サーフェスが無効になります。OpenGL ベースのほとんどのソフトウェアはこれに合わせて調整され、正しく動作しますが、場合によっては以下の問題が発生することがあります。
 - OpenGL ベースの一部のソフトウェアは正しく表示されない場合があります。
 - ビデオ オーバーレイ サーフェスを使用するメディアプレーヤーは正しく表示されない場合があります。


このような種類の問題が発生する場合は、無効になっているにもかかわらずビデオ オーバーレイ サーフェスをソフトウェアが引き続き使用しようとしていることが原因の可能性があります。ソフトウェアにビデオ オーバーレイ サーフェスの使用を無効にするオプションがある場合には、問題を解決できることがあります。


注：RGS Sender はフルスクリーン排他モードのプログラムをサポートしていません。つまり、RGS はほとんどのフルスクリーン モードのゲームに適していません。

RGS Sender のライセンス登録

RGS Sender は、HP Z ワークステーションおよび HP ZBook モバイルワークステーションに付属しています。これらの製品で RGS Sender を使用する場合には、個別にライセンスを購入する必要はありません。

RGS Sender をその他のコンピューターにインストールする場合には、ライセンスが必要です。詳しい情報は、『ライセンスガイド』に記載されています（[5 ページのその他の情報の参照先](#)を参照してください）。

 **注記：** RGS 接続はライセンスがなくても確立できます。ただし、ライセンスが見つからないことに関する警告メッセージが RGS Receiver ウィンドウに重ねて表示され、送信側コンピューターのデスクトップの大部分がブロックされます。

 **注記：** RGS Receiver は、すべてのデバイスに無料でダウンロードできます。

その他の情報の参照先

以下の表では、RGSの詳細情報を提供するリソースについて説明します。


リソース	内容
RGSのWebサイト http://jp.ext.hp.com/workstations/remote_graphics/	<ul style="list-style-type: none">• 以下のようなその他のRGSドキュメント：<ul style="list-style-type: none">– 『ライセンスガイド』: RGS Senderのライセンスを取得およびインストールする方法について説明します– 『Quickspecs』: RGSのシステム要件について説明します
HPサポートセンターのRGSに関するページ https://support.hp.com/jp-ja/product/HP-Remote-Graphics-Software-%28RGS%29/7275919/model/7275920/	<ul style="list-style-type: none">• RGSの以前のバージョン(一部)のユーザーガイド。[HP Remote Graphics ソフトウェア (RGS)]のページが表示されます• 世界各地のサポート<ul style="list-style-type: none">– HPのサービス担当者とのオンラインチャット– HPのサポート窓口の電話番号 <p>注記: 音声認識システムが電話に応答し、製品名を尋ねられた場合は「リモートグラフィックスソフトウェア」とお答えください</p>

2 お使いになる前に

ここでは、RGS の使用を開始する方法について概要を説明します。

1. RGS Sender および RGS Receiver をインストールします。
2. RGS Receiver を開きます。
3. 送信側コンピューターとの RGS セッションを開始します。
 - a. RGS Receiver の**[Home]** (ホーム) パネルで、送信側コンピューターのホスト名または IP アドレスを入力し、**Enter** キーを押すか、**[Connect]** (接続) ボタンを選択します。
 - b. 表示される RGS 認証ウィンドウで、送信側コンピューターに存在するユーザー アカウントの資格情報を入力し、**[OK]**を選択します。

認証が成功すると、RGS セッションが開始されます。受信側コンピューターで RGS Receiver ウィンドウが開き、そこに送信側コンピューターのデスクトップが表示されます。

 **注記** : RGS セッションの開始時に送信側コンピューターのデスクトップがロック状態にある場合は、資格情報をもう一度入力してデスクトップのロックを解除する必要があります。このときには、送信側コンピューターのログオン画面に資格情報を入力することになります。

Windows ベースの送信側コンピューターのログオン画面で **Ctrl + Alt + Del** キーを押してログオン処理を開始するよう指示された場合、送信側コンピューターで目的の処理を開始するには、代わりに **Ctrl + Alt + End** キーを押す必要があります。


3 インストール


RGS Receiver のインストール (Windows)

RGS Receiver 用のインストーラー ウィザードは、標準インストールおよびカスタムインストールの両方が可能です。標準インストールでは、リモート USB およびリモート クリップボードがインストールされます。標準インストールは、ほとんどの導入環境に適しています。

カスタムインストールタイプでは、特定の機能をインストールするかどうかを選択したり、プロキシ設定を指定したりできます。カスタムインストールは、コマンドラインでも実行できます。

 **重要** : インストールを実行するには Windows の管理者権限が必要です。

 **注記** : ソフトウェアがすでにインストールされている場合、新しいバージョンをインストールすると、更新が実行されます。同じバージョンまたは古いバージョンをインストールしようとする、インストーラーはシステムを変更しないで終了します。


 **注記** : インストール処理中、インストーラーは `rgreceiverInstaller.log` という名前のログファイルを Windows の `TEMP` 環境変数によって指定された場所に作成します。

インストーラー ウィザードを使用した RGS Receiver のカスタムインストールの実行

インストーラー ウィザードを使用して Windows で RGS Receiver のカスタムインストールを実行するには、以下の操作を行います。


1. `ReceiverSetup64.exe` を実行して画面の説明に沿って操作し、セットアップの種類を選択するよう求められたら、**[Custom]** (カスタム) → **[Next]** (次へ) の順に選択します。
2. **[Remote USB Configuration]** (リモート USB の設定) ページで、リモート USB 機能のインストール設定 (以下で説明するオプション) を選択し、**[Next]** を選択します。
 - **[USB devices are Local]** (USB デバイスはローカル) : リモート USB が受信側コンピューターにインストールされません。受信側コンピューターに接続されたすべての USB デバイスが、RGS セッション中であっても常に受信側コンピューターにのみマウントされます。
 - **[USB devices are Remote]** (USB デバイスはリモート) : リモート USB がインストールされません。受信側コンピューターに接続されたすべての USB デバイスが、常に送信側コンピューターにのみマウントされます。つまり、RGS セッション中のみ USB デバイスにアクセス可能です。RGS 接続の状態に関係なく、どのような場合でも受信側コンピューターに USB デバイスをマウントできません。
 - **[USB devices are Local/Remote]** (USB デバイスはローカルおよびリモート) : リモート USB がインストールされます。各 USB デバイスが受信側コンピューターに差し込まれるタイミングに応じて、受信側コンピューターまたは送信側コンピューターから USB デバイスにアクセスできるように、個別に設定されます。
 - RGS Receiver が切断されているときに、受信側コンピューターの USB ポートに USB デバイスが差し込まれた場合、USB デバイスは受信側コンピューターからのみアクセス可能になります。
 - RGS Receiver が接続されているときに、受信側コンピューターの USB ポートに USB デバイスが差し込まれた場合、USB デバイスは送信側コンピューターからのみアクセス可能になります。

特定の USB デバイスへのアクセスを切り替えるには、一度取り外してから、RGS Receiver が逆の接続状態にあるときに取り付け直します。

 **注記** : この設定によって、リモート USB コンポーネントがインストールされるかどうかが決まります。RGS Receiver をインストールした後にこの設定を変更するには、RGS Receiver をアンインストールして再インストールする必要があります。リモート USB コンポーネントがインストールされている場合は、RGS Receiver または[RGS Receiver Configuration]ツールを使用して後でリモート USB を無効（および再度有効）にできます。

または、インストーラーでは提供されていない高度なオプションによって（再インストールしないで）個々のデバイスについてのリモート USB のインストール設定を無効にできます（[56 ページの個々の USB デバイスのリモート接続動作の設定（Windows のみ）](#)を参照してください）。

3. **[Remote Clipboard Configuration]**（リモートクリップボードの設定）ページで、リモートクリップボード機能をインストールするかどうかを選択し、**[Next]**を選択します。

 **注記** : この設定によって、リモートクリップボードコンポーネントがインストールされるかどうかが決まります。RGS Receiver をインストールした後にこの設定を変更するには、RGS Receiver をアンインストールして再インストールする必要があります。リモートクリップボードコンポーネントがインストールされている場合は、RGS Receiver または[RGS Receiver Configuration]ツールを使用して後でリモートクリップボードを無効（および再度有効）にできます。

4. ウィザードの次のページのタイトルが**[Proxy Configuration]**（プロキシ設定）の場合は、以下の説明に沿って適切な設定を選択してから、**[Next]**を選択します。次のページでインストールを開始するよう求められた場合は、RGS によって自動的に[Internet Explorer]からプロキシ設定が検出および利用されたため、以下の手順をスキップできます。

- 受信側コンピューターがプロキシサーバー経由でインターネットにアクセスする場合は、**[Use this proxy]**（このプロキシを使用する）を選択し、プロキシアドレスおよびポートを入力します。
- 受信側コンピューターがプロキシサーバー経由でインターネットにアクセスしない場合は、**[Do not use a proxy]**（プロキシを使用しない）が選択されたままにしておきます。

 **重要** : RGS Advanced Features のアクティベーションを行うには、プロキシサーバーを正しく設定する必要があります。詳しくは、[37 ページの RGS Advanced Features（Windows/Linux のみ）](#)を参照してください

5. **[Install]**（インストール）を選択してインストール処理を開始します。
6. コンピューターを再起動するように求められたら、再起動してインストールを完了します。


コマンドラインでの RGS Receiver のカスタム インストールの実行

RGS のコマンドライン オプションは、直前に /z フラグを付け、二重引用符で囲む必要があります。ただし、左二重引用符の前後、および右二重引用符の前にスペースを含めないでください。複数のコマンドを使用している場合は、各コマンドを 1 個のスペースで区切ります。以下の例を参照してください。

```
ReceiverSetup64.exe /z"/autoinstall /agreetolicense"
```


二重引用符をパラメーターの一部として含める必要がある場合は（フォルダーのパスなど）、以下の例のように、各二重引用符の前にバック スラッシュを付ける必要があります。

```
ReceiverSetup64.exe /z"/autoinstall /agreetolicense /folder="\C:\RGS Receiver"
```

 **注記：** このコマンドは、ReceiverSetup64.exe インストール ファイルがある場所から発行する必要があります。


フォルダー パスを指定していない限り、RGS は C:\Program Files\HP\Remote Graphics Receiver フォルダーにインストールされます。

以下の表では、インストール関連のコマンドライン オプションについて説明します。

 **重要：** オプション /autoinstall および /agreetolicense は、コマンドラインでインストールを実行する場合に常に必要です。

オプション	説明
/autoinstall	インストールを開始します
/agreetolicense	使用許諾契約書に同意します
/folder="\<フォルダー パス>"	インストール先のフォルダー パスを指定します。指定しない場合、初期設定は以下のとおりです C:\Program Files\HP\Remote Graphics Receiver 注記： フォルダー パス C:\Program Files\HP\Remote Graphics Receiver は、64 ビットバージョンの Windows の場合です。32 ビットバージョンの Windows では、フォルダー パスは C:\Program Files\Hewlett-Packard\Remote Graphics Receiver です
/usb={local remote localRemote}	リモート USB のインストールオプションを設定します。指定しない場合、初期設定は localRemote です 各オプションの説明については、 7 ページのインストーラー ウィザードを使用した RGS Receiver のカスタム インストールの実行 を参照してください
/clipboard	リモートクリップボード機能をインストールします
/noreboot	インストール処理の最後にコンピューターが再起動されないようにします
/proxy=<IP アドレス>:<ポート>	RGS Advanced Features のアクティベーションを行うことができるようにプロキシを設定します 重要： プロキシが正しく設定されていない場合、RGS Advanced Features をプロキシサーバー経由で有効にできません。詳しくは、 37 ページの RGS Advanced Features (Windows/Linux のみ) を参照してください

以下の表では、インストーラーに関連するその他のコマンドライン オプションについて説明します。

 **注記：** /help または /viewlicense が使用される場合、その他のオプションはすべて無視されます。


オプション	説明
/help	有効なコマンドライン オプションを表示します
/viewlicense	使用許諾契約書（EULA：End User License Agreement）を表示します
/autoremove	アンインストールを開始します


注記： オプション /noreboot をこのオプションと組み合わせて使用できます


RGS Sender のインストール（Windows）

RGS Sender 用のインストーラー ウィザードは、標準インストールおよびカスタム インストールの両方が可能です。標準インストールでは、リモート USB およびリモート クリップボードがインストールされますが、スマートカード リダイレクトはインストールされません。標準インストールは、ほとんどの導入環境に適しています。

カスタム インストールでは、特定の機能をインストールするかどうかを選択できます。カスタム インストールは、コマンドラインでも実行できます。


 **重要：** インストールを実行するには Windows の管理者権限が必要です。

 **注記：** ソフトウェアの古いバージョンがすでにインストールされている場合、新しいバージョンをインストールすると、更新が実行されます。同じバージョンまたは古いバージョンをインストールしようとすると、インストーラーはシステムを変更しないで終了します。


 **注記：** インストール処理中、インストーラーは rgsenderInstaller.log という名前のログファイルを Windows の TEMP 環境変数によって指定された場所に作成します。

インストーラー ウィザードによるインストール


インストーラー ウィザードを使用して Windows で RGS Sender のカスタム インストールを実行するには、以下の操作を行います。


 **注記：** インストーラー ウィザードには、ここでは説明されていない、ベータ機能のインストールに関する追加のオプションが含まれている場合があります。HP から指示がない限り、これらの機能をインストールしないでください。

1. SenderSetup64.exe を実行して画面の説明に沿って操作し、セットアップの種類を選択するよう求められたら、**[Custom]**（カスタム）→**[Next]**（次へ）の順に選択します。
2. **[Remote Graphics Sender Configuration]**（Remote Graphics Sender の設定）ページで、リモート USB 機能、スマートカード リダイレクト機能、およびリモート クリップボード機能をインストールするかどうかを選択し、**[Next]**を選択します。

 **注記：** これらの設定によって、各機能がインストールされるかが決まります。RGS Sender をインストールした後にこれらの設定を変更するには、RGS Sender をアンインストールして再インストールする必要があります。リモート クリップボード コンポーネントがインストールされている場合は、[RGS Sender Configuration] ツールを使用して後でリモート クリップボードを無効（および再度有効）にできます。

3. **[Single Sign-On / Easy Login Configuration]** (シングルサインオン/Easy Login の設定) ページで、目的の認証方法を選択し、**[Next]**を選択します。


 **ヒント** : 認証方法はインストール後に変更できます。詳細および各認証方法の説明については、[38 ページの認証](#)を参照してください。

 **注記** : **[Do not enable either]** (どちらも有効にしない) を選択した場合は、標準の認証方法が使用されません。

4. ウィザードの次のページのタイトルが**[Remote Graphics Sender Licensing]** (Remote Graphics Sender のライセンス登録) の場合は、以下の手順を完了してください。次のページでインストールを開始するよう求められた場合は、RGS Sender ライセンスがすでにインストールされているか不要であるため、以下の手順をスキップできます。

[Remote Graphics Sender Licensing] ページで、インストールできる RGS Sender ライセンスファイルがあるかどうかに応じて、適切なオプションを選択し、**[Next]**を選択します。

ライセンスファイルをインストールすることを選択した場合は、次の手順に進む前に、画面に表示される指示に従ってライセンスファイルのインストールを完了します。

 **注記** : RGS Sender のライセンス要件の概要については、[4 ページの RGS Sender のライセンス登録](#)を参照してください。RGS Sender のライセンス登録の詳細情報および手順については、[5 ページのその他の情報の参照先](#)を参照して『ライセンスガイド』を確認してください。

5. RGS Sender のインストールが完了すると、コンピューターの再起動を求めるメッセージが表示されます。**[Yes]**をクリックしてシステムを再起動します。
6. **[Install]** (インストール) を選択してインストール処理を開始します。
7. コンピューターを再起動するように求められたら、再起動してインストールを完了します。

コマンドラインによるインストール


RGS のコマンドライン オプションは、直前に /z フラグを付け、二重引用符で囲む必要があります。ただし、左二重引用符の前後、および右二重引用符の前にスペースを含めないでください。複数のコマンドを使用している場合は、各コマンドを 1 個のスペースで区切ります。以下の例を参照してください。


```
SenderSetup64.exe /z"/autoinstall /agreetolicense"
```

二重引用符をパラメーターの一部として含める必要がある場合は (フォルダーのパスなど)、以下の例のように、各二重引用符の前にバック スラッシュを付ける必要があります。

```
SenderSetup64.exe /z"/autoinstall /agreetolicense /folder="C:RGS Sender"
```

以下の表では、インストール関連のコマンドライン オプションについて説明します。


 **注記** : このコマンドは、SenderSetup64.exe インストール ファイルがある場所から発行する必要があります。

 **注記** : フォルダー パスを指定していない限り、RGS は C:¥Program Files¥HP¥Remote Graphics Sender フォルダーにインストールされます。

 **重要** : オプション /autoinstall および /agreetolicense は、コマンドラインでインストールを実行する場合に常に必要です。

オプション	説明
/autoinstall	インストールを開始します
/agreetolicense	使用許諾契約書に同意します
/folder="\<フォルダー パス>"	インストール先のフォルダーパスを指定します。初期設定は以下のとおりです C: Program Files HP Remote Graphics Sender 注記: フォルダーパス C:¥Program Files¥HP¥Remote Graphics Sender は、64 ビットバージョンの Windows の場合のみです。32 ビットバージョンの Windows では、フォルダーパスは C:¥Program Files¥Hewlett-Packard¥Remote Graphics Sender です
/usb	リモート USB 機能をインストールします
/clipboard	リモートクリップボード機能をインストールします
/el	Easy Login またはシングルサインオンを有効にします
または /sso	注記: どちらのオプションも指定しない場合は、標準の認証方法が使用されます
/rgslicensserver=[<ポート>@]<ホスト>	重要: /rgslicensserver または /rgslicensefile のどちらかを使用できますが、両方を使用することはできません。どちらも使用しない場合、RGS Sender はライセンスなしでインストールされます
または /rgslicensefile="\<ファイル パス>"	/rgslicensserver: RGS Sender がインストール時にライセンスを取得するライセンスサーバーを指定します 注記: ポートを指定しない場合は、ホストの初期設定のポートが使用されます /rgslicensefile: ローカルシステムのライセンスファイルの場所を指定します
/noreboot	インストール処理の最後にコンピューターが再起動されないようにします
/smartcard	スマートカードリダイレクト機能をインストールします

以下の表では、インストーラーに関連するその他のコマンドラインオプションについて説明します。

 **注記:** /help または /viewlicense が使用される場合、その他のオプションはすべて無視されます。


オプション	説明
/help	有効なコマンドラインオプションを表示します
/viewlicense	使用許諾契約書 (EULA: End User License Agreement) を表示します
/autoremove	アンインストールを開始します 注記: オプション /noreboot をこのオプションと組み合わせて使用できます

RGS Receiver のインストール (Linux)

Linux で RGS Receiver をインストールするには、以下の操作を行います。


1. root としてログインします。
2. RGS Receiver をダウンロードしたディレクトリに移動し、RGS パッケージを解凍します。Linux 用の RGS には Linux での展開専用のインストーラーが含まれています。展開するためのディレクトリに変更します。
3. 以下のコマンドを実行します。

```
./install.sh
```

 **ヒント:** 必要に応じて、PATH 環境変数に `/opt/hpremote/rgreceiver` ディレクトリを追加します。

RGS Sender のインストール (Linux)

Linux で RGS Sender をインストールするには、以下の操作を行います。


 **重要:** 続行する前に、送信側コンピューターに適切な NVIDIA® グラフィックスドライバーがすでにインストールされていることを確認します。NVIDIA ドライバーをインストールすると、`/etc/X11/xorg.conf` が作成されます。(Linux ディストリビューションによっては) このファイルがインストール処理中に使用される場合があるため、NVIDIA ドライバーを最初にインストールする必要があります。システム要件は『QuickSpecs』で確認できます ([5 ページのその他の情報の参照先](#)を参照してください)。

1. root としてログインします。
2. RGS Sender をダウンロードしたディレクトリに移動し、RGS パッケージを解凍します。Linux 用の RGS には Linux での展開専用のインストーラーが含まれています。展開するためのディレクトリに変更します。
3. 以下のコマンドを実行します。

```
./install.sh
```
4. 一部の設定ファイルを自動的に変更できるようにするためのオプションが表示されます。インストールを完了するには、このオプションを受け入れる必要があります。
5. 送信側コンピューターに `pcsc-lite` パッケージがインストールされている場合、スマートカードリダイレクトをインストールするためのオプションが表示されます。初期設定では、この機能はインストールされません。

RGS Receiver のインストール (Mac OS)

Mac OS には、インストーラー ウィザードまたはコマンドラインを使用して RGS Receiver をインストールできます。

 **注記:** ソフトウェアがすでにインストールされている場合は、インストール処理によって上書きされます。

インストーラー ウィザードによるインストール

1. 管理者としてログインします（または管理者の資格情報を入力できます）。
2. **HP RGS Receiver.pkg** を実行し、画面の説明に沿って操作します。

コマンドラインによるインストール

以下のコマンドを実行します。

```
sudo installer -pkg "HP\RGS\Receiver.pkg" -target /
```

 **注記：** 起動ボリュームのルート以外の場所に RGS Receiver をインストールするには、コマンドの末尾に /ではなく /Volumes/OtherDrive を入力します。

4 RGS Receiver の概要

RGS Receiver を開く

Windows で RGS Receiver を開くには、以下の操作を行います。

- ▲ 受信側コンピューターのオペレーティングシステムに応じて以下の操作を行います。

オペレーティングシステム	手順
Windows 7	[スタート]→[すべてのプログラム]→[HP]→[HP Remote Graphics Software]→[HP RGS Receiver]の順に選択します
Windows 8.1	スタート画面で[HP RGS Receiver]を選択します
Windows 10	[スタート]を選択し、「RGS」と入力し、検索結果から[HP RGS Receiver]を選択します

Linux で RGS Receiver を開くには、以下の操作を行います。

- ▲ 実行可能ファイル/opt/hpremote/rgreceiver/rgreceiver.sh を実行します。

または

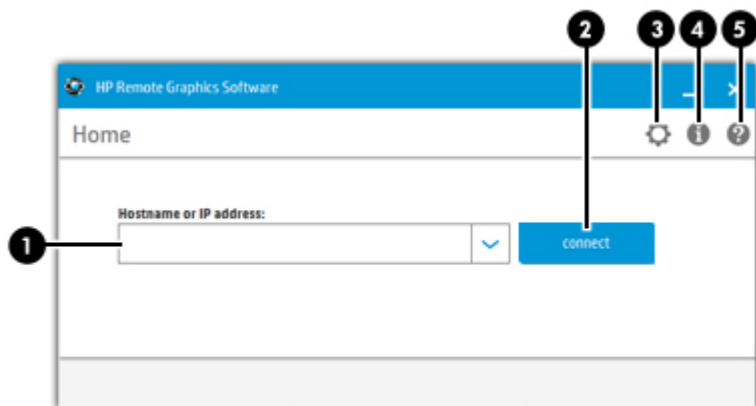
[Applications] (アプリケーション) → [Internet] (インターネット) → [HP RGS Receiver]の順に選択します。

Mac OS で RGS Receiver を開くには、以下の操作を行います。

- ▲ Launchpad で RGS Receiver のアイコンを選択します。

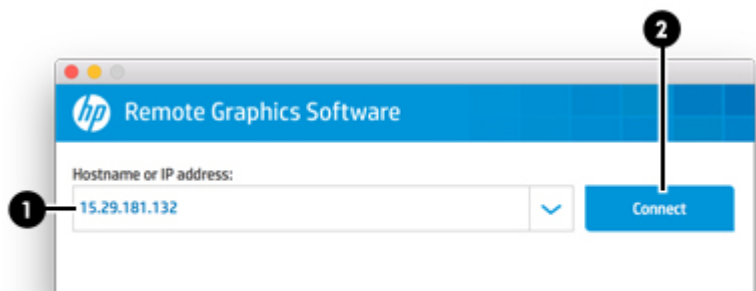
※ **ヒント** : RGS Receiver はコマンドラインで起動することもできます ([27 ページの RGS Receiver のコマンドラインオプション](#)を参照してください)。

RGS Receiver の GUI (Windows/Linux)



番号	説明
1	このフィールドに送信側コンピューターのホスト名または IP アドレスを入力します ヒント: ドロップダウン リストには最近のエントリが表示されます
2	接続を開始します
3	[Settings] (設定) パネルを開きます (詳しくは、 21 ページの RGS Receiver の設定 を参照してください)
4	[Info] (情報) パネルを開きます。バージョン情報、RGS の『使用許諾契約書』(EULA) および法律に基づく他社の情報が表示されます
5	『ユーザー ガイド』(このドキュメント) を開きます

RGS Receiver の GUI (Mac OS)



番号	説明
1	このフィールドに送信側コンピューターのホスト名または IP アドレスを入力します ヒント: ドロップダウン リストには最近のエントリが表示されます
2	接続を開始します

RGS セッションの開始

RGS セッションを開始するには、以下の操作を行います。

1. RGS Receiver の【Home】（ホーム）パネルで、送信側コンピューターのホスト名または IP アドレスを入力し、Enter キーを押すか、【Connect】（接続）ボタンを選択します。
2. この手順は、使用している認証方法によって異なります（[38 ページの認証](#)を参照してください）。

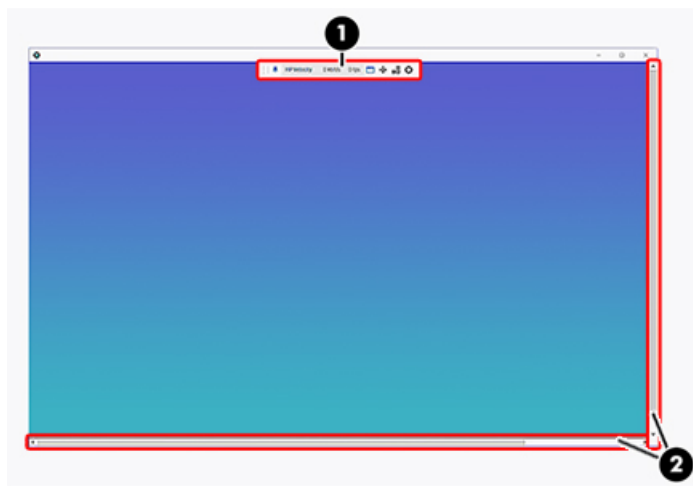
各認証方法で必要とされる資格情報を入力します。

認証が成功すると、RGS セッションが開始されます。受信側コンピューターで RGS Receiver ウィンドウが開き、そこに送信側コンピューターのデスクトップが表示されます。

RGS 接続の作成については、以下の詳細情報を参照してください。










- RGS 接続を初めて確立する場合、RGS Advanced Features の有効化のステータスによっては、確認メッセージまたはエラーメッセージが表示されることがあります。
- RGS Receiver の GUI を使用して一度に複数の送信側コンピューターに接続することはできません。2 台目の送信側コンピューターに接続しようとすると、1 台目の送信側コンピューターへの接続が切断されます。一度に複数の送信側コンピューターに接続する方法については詳しくは、[59 ページの Directory モード](#)を参照してください。

RGS Receiver ウィンドウの GUI (Windows/Linux)

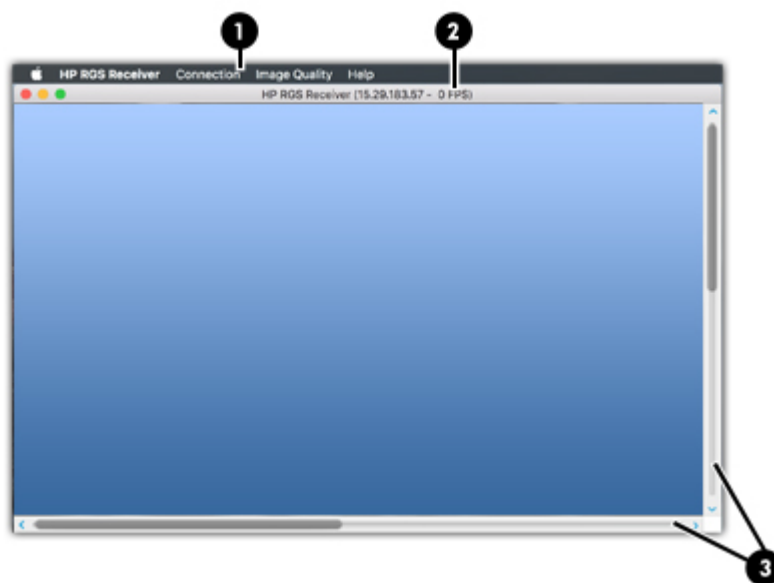


番号	説明
1	RGS Receiver ツールバーでは、最も頻繁に使用するオプションに簡単にアクセスできます（詳細については、 18 ページの RGS Receiver ツールバーの GUI (Windows/Linux) を参照してください）
2	スクロールバーは、送信側コンピューターの解像度が RGS Receiver ウィンドウのサイズより大きい場合に表示されます

RGS Receiver ツールバーの GUI (Windows/Linux)

アイコン	説明
	マウスの左ボタンでクリックして押したままの状態でもうすを動かすと、ツールバーを水平方向に移動できます
	ツールバーを Receiver ウィンドウに固定したり固定を解除したりできます。ツールバーが固定されていない場合、使用していないときは非表示になります。非表示になったツールバーを表示させるには、Receiver ウィンドウの最上部付近にマウスを合わせます
 HP Velocity	HP Velocity の現在のステータスを表示します (詳しくは、 38 ページの HP Velocity (Windows/Linux のみ) を参照してください)
0 kbit/s	接続が消費している現在のネットワーク帯域幅を表示します
0 FPS	1 秒あたりに受信している画像更新の数を示します
	仮想キーボードを開きます (詳しくは、 50 ページのタッチ機能の使用 (タッチ対応の Windows デバイスのみ) を参照してください)
	仮想マウスを有効にします (詳しくは、 50 ページのタッチ機能の使用 (タッチ対応の Windows デバイスのみ) を参照してください) ヒント: 仮想マウスは、4 本指タップ ジェスチャを使用して有効または無効にすることもできます
	RGS Receiver ウィンドウの枠線を追加または削除します。枠線を削除した場合、このアイコンはグレー表示になり、最小化アイコンおよび[X] (閉じる) アイコンが表示されます
	Setup Mode を切り替えます (20 ページの Setup Mode を参照してください)
	仮定の Ctrl + Alt + Del コマンドを送信側コンピューターに送信します
	[Settings] (設定) パネルを開きます (詳しくは、 21 ページの RGS Receiver の設定 を参照してください)

RGS Receiver ウィンドウの GUI (Mac OS)



番号	説明
1	<p>RGS Receiver ツールバーでは、以下のメニューから最も頻繁に使用するオプションに簡単にアクセスできます</p> <ul style="list-style-type: none">● [HP RGS Receiver] : バージョン情報の表示、設定の変更 (21 ページの RGS Receiver の設定を参照してください)、および RGS Receiver の終了を行えます 注記 : RGS 設定は、Mac OS ではシステム環境設定とも呼ばれます● [Connection] (接続) : Setup Mode の有効化 (20 ページの Setup Mode を参照してください)、送信側コンピューターへの仮想の Ctrl + Alt + Del コマンドの送信、および送信側コンピューターからの切断を行えます● [Image Quality] (画質) : 画質を設定できます (詳しくは、22 ページのパフォーマンスを参照してください)● [Help] (ヘルプ) : 『ユーザーガイド』(このドキュメント)を開きます
2	1 秒あたりに受信している画像更新の数を示します
3	送信側コンピューターの解像度が RGS Receiver ウィンドウのサイズより大きい場合、または Receiver ウィンドウが送信側コンピューターの解像度より小さいサイズに調整された場合のみ、スクロールバーが表示されます

Setup Mode

Setup Mode では、キーボード入力およびマウス入力の送信側コンピューターへの転送が中断されず。代わりに、キーボードおよびマウスを使用して受信側コンピューターの RGS Receiver ウィンドウを操作できます。このモードでは、以下の操作を行うことができます。

- タイトルバーおよび枠線のない RGS Receiver ウィンドウを移動する
- Directory モードで、別の RGS Receiver ウィンドウの後ろにある可能性がある特定の RGS Receiver ウィンドウを選択する（前面に移動する）
- Setup Mode の以下のホットキーを使用して、HP RGS Receiver アプリケーションを制御する

M : RGS Receiver の設定ウィンドウを表示する

N : Receiver ウィンドウを最小化する

C : Receiver ウィンドウを閉じる

G : ゲームモードと切り替える


H : ツールバーを非表示にする

F : Receiver ウィンドウのサイズを Sender デスクトップのサイズに合わせる

Setup Mode は、以下の 2 通りの方法で有効にできます。

- RGS Receiver ツールバーの[Setup Mode]ボタン（Windows/Linux）またはメニュー項目（Mac OS）を選択して、Setup Mode の状態を切り替えます。
- 以下の操作を行って、初期設定のホットキー シーケンスを入力します。

左 Shift キーを押したままにします。左 Shift キーを押したまま、スペースキーを押してすぐに離します。左 Shift キーを押している間は、Setup Mode が有効な状態になります。

 **注記** : 初期設定のホットキー シーケンスは変更できます（[20 ページの Setup Mode のホットキー シーケンスの変更](#)を参照してください）。

Setup Mode のホットキー シーケンスの変更

RGS では、Setup Mode のホットキー シーケンスを初期値（左 Shift キーを押し、スペースキーを押し、スペースキーを離す）から変更できます。

Setup Mode の新しいホットキー シーケンスを定義するには、以下のキーを使用できます。

- 左 Ctrl、右 Ctrl、Ctrl : それぞれ、左の Ctrl キー、右の Ctrl キー、左右を区別しない Ctrl キーです。
- 左 Alt、右 Alt、Alt : それぞれ、左の Alt キー、右の Alt キー、左右を区別しない Alt キーです。
- Shift
- スペース

どのキー シーケンスも Ctrl キー、Alt キー、または Shift キーで始まる必要があります。それぞれのキーに 2 つのアクションが関連付けられています。

- Down : キーを押します。
- Up : キーを離します。

Setup Mode のホットキー シーケンスを変更するには、以下の操作を行います。

1. RGS Receiver の設定で、**[Hotkeys]** (ホットキー) パネルの**[Set]** (設定) をクリックします。
2. キー シーケンスで使用する最初のキーを押したままにします。
3. キー シーケンスで使用するその他のキーを押して離します。
4. 最初のキーを離します。

Setup Mode のホットキー シーケンスを初期値に戻すには、**[Reset]** (リセット) をクリックします。

RGS Receiver の設定

ここでは、以下のカテゴリに分けて RGS Receiver で使用できる設定を説明します。

- [接続](#)
- [パフォーマンス](#)
- [ジェスチャ \(タッチ対応の Windows デバイスのみ\)](#)
- [オーディオ](#)
- [ネットワーク](#)
- [ホットキー](#)
- [ログ](#)
- [統計 \(Windows/Linux のみ\)](#)

接続

以下の表に、**[Connection]** (接続) パネルで利用できる設定を示します。

設定	説明
Prompt for username and password (ユーザー名およびパスワードの入力を求める)	<p>RGS 接続の開始時に、資格情報の入力を求めるプロンプトを強制的に表示します</p> <p>特定の状況では、RGS 接続の開始時に、ドメイン、ユーザー名、およびパスワードを求めるプロンプトが表示されません。ドメイン、ユーザー名、およびパスワードの入力が必要な場合は、このチェックボックスにチェックを入れます</p> <p>ヒント: このオプションは、RGS を Directory モードで使用し、セッションごとに異なる接続が必要になる場合に便利です</p>
Match Receiver display resolution (受信側コンピューターの表示解像度に合わせる)	<p>送信側コンピューターの解像度を受信側コンピューターの解像度に一致するように設定します</p> <p>注記: このオプションは、初期設定では Linux でサポートされません。このオプションを動作させるには、適切なモードラインまたはメタモードで X Server を設定する必要があります。詳しくは、47 ページのディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 (Linux ベースの送信側コンピューター) を参照してください</p>
Match Receiver display layout (受信側コンピューターの表示レイアウトに合わせる)	<p>送信側コンピューターの表示レイアウトを受信側コンピューターの表示レイアウトに一致するように設定します</p> <p>たとえば、受信側コンピューターで 2 台の物理ディスプレイを横に並べて設置し、2 台を合わせた表示解像度が 2560 × 1024 の場合、RGS は送信側コンピューターを同じレイアウトおよび解像度に設定します。この設定が失敗すると、RGS は 1 台の送信側コンピューターのディスプレイで解像度を 2560 × 1024 に設定します</p> <p>注記: 送信側コンピューターが Linux ベースの場合、このオプションはサポートされません</p>
Enable remote USB (リモート USB を有効にする)	<p>リモート USB を有効にします</p> <p>注記: Windows/HP ThinPro のみ</p>
Select Sender (Sender の選択)	<p>Directory モードが有効な場合にアクティブになります。送信側コンピューターに対するリモート USB デバイスをドロップダウンリストから選択できるようにします</p>
Enable remote clipboard (リモートクリップボードを有効にする)	<p>リモートクリップボードを有効にします</p>

パフォーマンス

パフォーマンスの設定では、対話型操作環境を向上させることができます。通常、この調整は、CAD などの非常に対話型操作の多いアプリケーションを、帯域幅の低いネットワークや遅延時間の長いネットワーク環境で操作するときに行います。

以下の表に、**[Performance]** (パフォーマンス) パネルで利用できる設定を示します。

設定	説明
Enable HP Velocity (HP Velocity を有効にする)	HP Velocity を有効にします
注記: Windows/Linux のみ	
Advanced Video Compression on Sender (Sender で Advanced Video Compression を行う)	Advanced Video Compression を有効にします
注記: Windows/Linux のみ	
Image Quality (画質)	画質の上限を設定します
[Adaptive image quality] (画質を調整する) を使用しない場合、RGS ではこのオプションで指定された画質が維持されます。 [Adaptive image quality] を選択すると、1 秒あたりの更新値の許容範囲内で、このオプションの設定が RGS での画質の目標レベルとして使用されます	
Enable adaptive image quality (画質の調整を有効にする)	[Enable adaptive image quality] を選択すると、RGS で 1 秒あたりの更新値が [Target update rate] の設定 (1 秒あたり 0~30 回の更新数) を下回った場合、 [Minimum image quality] で設定されたレベル (0~100) まで画質が低下します
Increase text rendering quality (テキスト表示画質を向上させる)	
Minimum image quality (画質の下限)	
Target update rate (目標更新率)	
[Increase text rendering quality] を選択すると、送信側コンピューターの色の少ない表示領域 (大半がテキストの表示領域) に別のエンコードを使用し、それらの領域が受信側コンピューターで表示される際の画質を高めます。動画が中心の環境または帯域幅が制約される環境では、このオプションを無効にすると RGS のパフォーマンスが向上する場合があります	
注記: Advanced Video Compression が有効になっている場合、これらのオプションは無効になります	
ヒント: RGS のパフォーマンスを最適化する方法については、 84 ページの「パフォーマンスの最適化」 を参照してください。	

ジェスチャ (タッチ対応の Windows デバイスのみ)

 **注記:** これらの機能は、Windows 7 ではサポートされていません。

ジェスチャ設定を使用すると、初期設定では RGS で使用されないジェスチャにホットキー シーケンスをマッピングできます。カスタマイズ可能なジェスチャの一覧については、[50 ページのタッチ機能の使用 \(タッチ対応の Windows デバイスのみ\)](#) を参照してください。

ホットキー シーケンスをマッピングするには、以下の操作を行います。

1. 目的のジェスチャの行にある鉛筆アイコンを選択します。
2. キー シーケンスを入力します。
3. 必要に応じて、同じジェスチャを使用してホットキー シーケンスを無効にするまで、そのジェスチャでホットキー シーケンスを押したままにする動作を行う場合は、**[Enable sticky gesture]** (スティッキー ジェスチャを有効にする) を選択します。
4. **[Save]** (保存) を選択します。

ホットキー シーケンスのマッピングを解除するには、以下の操作を行います。

- ▲ 目的のジェスチャの行にある[*]アイコンを選択します。

オーディオ

以下の表に、**[Audio]**（オーディオ）パネルで利用できる設定を示します。

設定	説明
Stream audio from Sender (Sender からオーディオをストリーミングする)	受信側コンピューターへのオーディオストリームの送信を有効にします
Stereo (ステレオ)	送信側コンピューターのオーディオストリームのステレオオーディオを受信側コンピューターに送信できるようにします 注記： ステレオオーディオを送信すると、必要なネットワーク帯域幅が増えます
Quality (音質)	送信側コンピューターから送信されるオーディオストリームの音質を設定します 注記： 高音質のオーディオを送信すると、必要なネットワーク帯域幅が増えます
Volume (音量)	受信側コンピューターの音量レベルを制御します 注記： このオプションは Windows および Linux でのみ使用できます。Mac OS では代わりにシステムのボリュームコントロールを使用してください

ネットワーク

以下の表に、**[Network]**（ネットワーク）パネルで利用できる設定を示します。

設定	説明
Error (エラー)	RGS Receiver が RGS Sender を検出できなくなってから接続を終了するまで待機する時間を秒単位で設定します
Warning (警告)	RGS Receiver が RGS Sender を検出できなくなってからローカルユーザーに警告ダイアログを表示するまで待機する時間を秒単位で設定します
Dialog (ダイアログ)	RGS Receiver が送信側コンピューターに表示されているダイアログ（認証ダイアログなど）への応答を待機する時間を秒単位で設定します。応答がない場合、要求はキャンセルされます
注記： Windows および Linux のみ	RGS でのプロキシサーバーの使用を有効にします
Use a proxy server for your LAN (LAN にプロキシサーバーを使用する)	プロキシサーバーを使用する場合、Advanced Video Compression や HP Velocity などの RGS Advanced Features を有効にするには、これらの設定が必要になります。詳しくは、 37 ページの RGS Advanced Features (Windows/Linux のみ) を参照してください
Address (アドレス)	
Port (ポート)	

ホットキー

以下の表に、**[Hotkeys]** (ホットキー) パネルで利用できる設定を示します。

設定	説明
Send First Key (最初のキーを送信する)	<p>ローカル ホットキー シーケンスの最初のキーを送信側コンピューターに強制的に送信します</p> <p>初期設定では、押されたキーがローカル Setup Mode シーケンスの最初のキーと一致する場合、次のキーが押されたらそのシーケンスが完了するかどうかを RGS が判断するまで、すべてのキー イベントが保留されます。Setup Mode のシーケンスではない場合、キーを押すイベントのすべてが送信側コンピューターに送信されます</p> <p>ただし、一部のリモートアプリケーションのコマンドでは、最初に押されたキー イベントを別に受信しないと、それらのコマンドが正常に機能しないことがあります。このオプションを有効にすると、最初に押されたキーがすぐに送信されるようになります</p> <p>注記: 最初に押されたキーが送信側コンピューターに送信された場合、そのキーは受信側コンピューターでも処理されます</p>
Send CTRL-ALT-END key sequence as CTRL-ALT-DEL (CTRL-ALT-END キー シーケンスを CTRL-ALT-DEL として送信する)	<p>Ctrl + Alt + End キー シーケンスを、送信側コンピューターの Ctrl + Alt + Delete キー シーケンスとして使用できるようにします</p> <p>コンピューターによっては、ローカル オペレーティング システムが標準の Ctrl + Alt + Delete キー シーケンスを遮断し、代わりにローカルの Windows セキュリティ オプションを表示するため、このオプションは送信側コンピューターにログインするときに便利です</p> <p>ヒント: Ctrl + Alt + Del キー シーケンスは、RGS Receiver ツールバーを使用して送信することもできます</p>
Key Repeat (キーの繰り返し)	<p>Shift キーが押されたままになっているときにキーの処理が繰り返されるようにします</p> <p>初期設定では、キーの繰り返し処理は RGS によって無効に設定されていますが、一部のリモートアプリケーションでこの機能が必要になる場合があります</p> <p>注記: このオプションを有効にすると、Setup Mode の初期設定のホットキー シーケンスは、十分な速度で入力されない限りトリガーされなくなります</p>
Setup Mode Sequence (Setup Mode のシーケンス)	<p>Setup Mode に切り替えるためのホットキー シーケンスを設定します</p> <p>詳しくは、20 ページの Setup Mode のホットキー シーケンスの変更を参照してください</p>

ログ

以下の表に、**[Logging]**（ログ）パネルで利用できる設定を示します。

設定	説明
Enable message logging（メッセージのログを有効にする）	ログを有効にします
Log file path（ログファイルのパス）	ログファイルのパスを指定します
Log level（ログレベル）	ログに記録する情報のレベルを指定します たとえば、 [WARN] を選択すると、ログファイルには、種類が [WARN] の情報、およびそれ以上の重要な種類（ [ERROR] および [FATAL] ）の情報が含まれます RGS Receiver が生成するすべての情報をログに記録するには、 [DEBUG] を選択してください
Max logfile size（最大ログファイルサイズ）	ログファイルのサイズを制限します
Clear Log（ログのクリア）	ログファイルの内容を消去します
View Log（ログの表示）	ログファイルの内容を表示します
Restore Defaults（初期設定に戻す）	すべてのログ設定を初期値にリセットします

統計（Windows/Linuxのみ）

以下の表に、**[Statistics]**（統計）パネルで利用できる設定を示します。

項目	説明
Total network usage (Mbits/sec)（合計ネットワーク使用量（メガビット/秒））	すべての接続から受信したネットワークトラフィックの合計を表示します
Image updates per second（1秒あたりの画像更新）	すべての接続から受信した1秒あたりの画像更新数の合計を表示します
Image compression（画像圧縮）	更新ストリームの圧縮比率を表示します 複数の接続が存在する環境では、現在キーボードフォーカスがあるRGS Receiver ウィンドウの値です。どのRGS Receiver ウィンドウにもフォーカスがない場合、値は0になります。単一の接続環境では、RGS Receiver ウィンドウにフォーカスがない場合でも、値は常に利用可能です
Current network loss with HP Velocity（HP Velocityを使用する場合の現在のネットワークパケットロス）	これらの項目には、HP Velocity が有効になっており、使用中である場合のHP Velocity に関する統計が表示されます
Current network loss without HP Velocity（HP Velocityを使用しない場合の現在のネットワークパケットロス）	
Peak network loss without HP Velocity（HP Velocityを使用しない場合のピークネットワークパケットロス）	

RGS Receiver のコマンドラインオプション

以下の表では、Windows 実行可能ファイル (**rgreceiver.exe**)、Linux シェル スクリプト (**rgreceiver.sh**)、および Mac OS 実行可能ファイル (**HP RGS Receiver**) の設定可能なコマンドライン オプションについて説明します。

 **注記**：これらのコマンドは、RGS Receiver のインストールディレクトリから発行する必要があります。

オプション	説明
-config <ファイル名>	RGS Receiver のインスタンスを開くときに使用する設定ファイルを指定します 注記 ：詳しくは、 78 ページのプロパティの値を設定ファイルの中で設定する方法 を参照してください
-directory <ファイル名>	指定したディレクトリ ファイルの設定を使用して RGS Receiver を Directory モードで開きます 注記 ：詳しくは、 59 ページの Directory モード を参照してください
-nosplash	RGS Receiver を開くときに初期設定で表示されるスプラッシュ画面を無効にします
-{version ver v}	RGS Receiver のバージョン情報を表示します
-{help h ?}	有効なコマンドライン オプションを表示します
-<プロパティ名>=<値>	指定した RGS Receiver プロパティを、指定の値に設定します 注記 ：詳しくは、 78 ページのコマンドラインでのプロパティ値の設定 を参照してください

5 RGS Sender の概要

RGS Sender の概要（Windows）

Windows 用の RGS Sender は 3 つのプロセスで構成されます。

- `rgsendersvc.exe` : `rgsender` という名前の Windows サービスとして実行され、（初期設定で）Windows の起動時に自動的に起動し、他の 2 つのプロセスを起動します
- `rgsender.exe` : RGS Sender のメイン プロセス
- `rgsender_gui.exe` : Windows の通知領域で見つけることができる通知アイコン

Windows がすでに起動されている場合は、(`rgsender` サービスの自動起動を手動で無効にしていない限り) RGS Sender を起動するための追加の操作は必要ありません。

他の 2 つのプロセスを実行するためには `rgsender` サービスがアクティブである必要があるため、`rgsender` サービスを停止すると、RGS Sender を完全に無効にできます。

`rgsender` サービスを停止、起動、または再起動するには、以下の操作を行います。

- ▲ Windows タスク マネージャーの[サービス]パネルで、[`rgsender`]を右クリックし、目的のオプションを選択します。

RGS Sender の概要（Linux）

Linux 用の RGS Sender は、Linux の起動時に `rgex` サーバー拡張機能を使用して起動します。Linux では、RGS Sender を手動で起動、停止、または再起動できません。

💡 **ヒント** : 拡張機能が読み込まれていること、および RGS Sender が起動したことは、X サーバー ログ ファイル `Xorg.0.log` を表示して確認できます。

障害が発生した場合は、送信側コンピューターが自動的に再起動します。Linux では、送信側コンピューターが停止した場合、X サーバーによって再起動されます。

RGS Sender のコマンドラインオプション（Windows）


RGS Sender のコマンドラインオプションは、レジストリ キーを変更することで `rgsender` サービスに適用できます。

`rgsender` サービスにコマンドラインオプションを適用するには、以下の操作を行います。

1. Windows の[レジストリエディター]ツールを開きます。
2. 以下のレジストリ キーに移動して選択します。
`HKEY_LOCAL_MACHINE¥SYSTEM¥CurrentControlSet¥services¥rgsender`
3. [ImagePath]の値に目的のコマンドライン オプションを追加します。

たとえば、コラボレーションを禁止するには、値のデータを以下のように変更します。

```
C:¥Program Files¥HP¥Remote Graphics Sender¥rgsendersvc.exe -nocollab
```

 **重要**：フォルダーパス C:\Program Files\HP\Remote Graphics Sender\rgsendersvc.exe は、64 ビットバージョンの Windows の場合です。32 ビットバージョンの Windows では、フォルダーパスは C:\Program Files\Hewlett Packard\Remote Graphics Sender\rgsendersvc.exe です。

4. rgsender サービスを再起動します。

以下の表では、設定可能なコマンドラインオプションについて説明します。

コマンド	説明
-nocollab	コラボレーションを無効にします
-timeout <値>	RGS Sender がアクティブではない接続を切断するまでのタイムアウト値をミリ秒単位で指定します
-authtimeout <値>	コラボレーション認証ダイアログが表示されてから要求が自動的に拒否されるまでのタイムアウト値をミリ秒単位で設定します
-{version ver v}	RGS Sender のバージョン情報を表示します
-{help h ?}	有効なコマンドラインオプションを表示します
-<プロパティ名>=<値>	指定した RGS Sender プロパティを、指定の値に設定します 注記 ：詳しくは、 78 ページのコマンドラインでのプロパティ値の設定 を参照してください

RGS Sender のコマンドラインオプション (Linux)

RGS Sender のコマンドラインオプションは、シェルスクリプト `rgsender.sh` に適用できます。以下の表では、有効なコマンドラインオプションについて説明します。

コマンド	説明
-{version ver v}	RGS Sender のバージョン情報を表示します
-{help h ?}	有効なコマンドラインオプションを表示します

RGS Sender の通知アイコン (Windows のみ)

RGS Sender の通知アイコンは Windows の通知領域にあり、アクティブな RGS セッションがある場合にアニメーション表示されます。通知アイコンを使用して以下を行うことができます。

- 通知アイコンを左クリックすると、[HP RGS Collaborators] (HP RGS コラボレーター) ウィンドウが開きます (詳しくは、[41 ページのコラボレーション](#)を参照してください)。
- 通知アイコンを右クリックすると、[About] (バージョン情報) および[Disconnect] (切断) オプションにすばやくアクセスできます。

RGS Sender イベント ログ (Windows のみ)

標準のログに加えて、RGS Sender はイベントのログを記録します。この情報は HPRemote という名前のログに出力されます。このログは、Windows の[イベント ビューアー]ツールで表示でき、以下のような場面で役に立ちます。

- **トラブルシューティング**：イベント ログ情報は RGS 接続の問題の診断に役立ちます。
- **リモートアプリケーションの停止**：詳しくは、[95 ページの「リモートアプリケーション停止用のエージェントの作成 \(Windows のみ\)」](#)を参照してください。
- **その他の自動操作**：イベントログを使用したリモートアプリケーション停止の基本原理を応用すると、その他の自動操作を実行するエージェントを作成できます。

RGS Sender へのアクセスのフィルタリング

RGS 接続は、Sender の ipfilter.txt ファイルの設定によって制限できます。ipfilter.txt ファイルには、接続を許可される受信側コンピューターシステムの IP アドレス、サブネットマスク、および完全修飾コンピューター名、またはドメイン名を指定します。受信側コンピューターがフィルターのどれか 1 つと一致しない場合は、接続が拒否されます。

ipfilter.txt ファイルがあるのは、Windows の場合はインストールフォルダー、Linux の場合は /etc/opt/hpremote/rgsender です。

ホスト名およびドメイン名に基づいて接続をフィルタリングするには、リバース DNS ルックアップを許可するように DNS を設定する必要があります。たとえば、受信側コンピューターの IP アドレスが 10.13.19.1 の場合、コマンド `nslookup 10.13.19.1` はホスト名およびドメイン名を返します。同様に RGS は、ホスト名およびドメイン名のフィルタリングのためにリバースルックアップを使用します。

たとえば、送信側コンピューターシステム上で ipfilter.txt ファイルに以下の行を追加すると、受信側コンピューターシステム `computername1` および `computername2` からの接続のみ許可されます。

```
HOSTNAME:computername1.networkdomain.name
```

```
HOSTNAME:computername2.networkdomain.name
```

ドメイン名のフィルタリングでは、ドメイン名の最初のピリオドの後のテキストが比較されます。たとえば、DNS リバースルックアップで `james.auth.corp.net` が返された場合、フィルターは `auth.corp.net` を ipfilter.txt ファイルのドメイン名のエン트리と比較して、受信側コンピューターからの接続を許可するかどうかを判断します。

フィルターの種類は、1 つの ipfilter.txt ファイルに集約できます。ipfilter.txt ファイルで指定されたフィルターと一致すると、RGS はファイルの処理を停止して、接続を許可します。初期設定では、ipfilter.txt ファイルで除外される接続はありません。受信側コンピューターが VPN 経由で送信側コンピューターに接続される場合、または IP アドレスの変換が発生する別のプロセスを通して送信側コンピューターに接続される場合、成功するはずの接続が拒否される場合があります。詳しくは、RGS Sender がインストールされているシステムで ipfilter.txt ファイルを確認してください。

6 証明書の構成

初期設定では、HP RGS Receiver は接続を確立する前に、送信側コンピューターの公開キー基盤 (PKI) 証明書を検証することによって、送信側コンピューターの識別情報の確認を試みます。初期設定では、HP RGS Sender は自己署名証明書を作成しますが、証明機関 (CA) によって署名された証明書を使用するように構成できます。

送信側コンピューターの検証

受信側コンピューターが送信側コンピューターに接続しようとしたときに証明書の検証に失敗すると、警告が表示されます。証明書の検証は、以下の理由で失敗することがあります。

- 送信側コンピューターが自己署名証明書を提供した。このユーザーは、[RGS Sender Configuration] ツールの [Certificate] (証明書) パネルから入手できる指紋と証明書の指紋を比較できます。
[32 ページのエンド ユーザーによる送信側コンピューターの証明書の検証](#)を参照してください。

 **注記** : RGS Sender は初期設定で自己署名証明書を生成するため、これが最も一般的な失敗です。

- 受信側コンピューターのウィンドウに入力した送信側コンピューターのアドレスが、送信側コンピューターの証明書のホスト名と一致しない。この失敗は、ユーザーが送信側コンピューターのホスト名の代わりに IP アドレスを使用して接続した場合に発生します。ユーザーは、送信側コンピューターに接続する前に、IP アドレスがその送信側コンピューターの証明書のホスト名に解決されることを確認する必要があります。または、ユーザーは送信側コンピューターの証明書のホスト名を使用して接続しなおすことができます。
- 証明書の有効期限が切れている。自己署名証明書を使用している場合、現在の証明書が有効期限に近づくると新しい自己署名証明書が生成されるため、このエラーは発生しません。

証明書の検証失敗ポリシー

証明書の検証失敗ポリシーは、送信側コンピューターの識別情報を確認できない場合に受信側コンピューターがどのように動作するかを決定します。この設定は、[RGS Receiver Configuration] ツールで構成できます ([63 ページの \[RGS Receiver Configuration\] ツールの使用](#)を参照してください)。

検証に失敗した場合に、以下のどれかの動作を行うように RGS Receiver を構成できます。

- **[Accept]** (許可する) : 証明書エラーが無視され、受信側コンピューターは送信側コンピューターに接続します。
- **[Prompt to accept]** (許可を要求する) (初期設定) : 警告メッセージが表示され、検証に失敗してもユーザーは接続することを選択できます。エラーメッセージと一緒に、送信側コンピューターの証明書の SHA-256 の指紋が表示されます。送信側コンピューターの識別情報を確認するには、エラーメッセージと一緒に表示されている指紋を、[RGS Sender Configuration] ツールの [Certificate] (証明書) パネルに表示される指紋と比較します。ユーザーが [RGS Sender Configuration] ツールにアクセスできない場合は、管理者からユーザーに指紋を提供できます。
- **[Deny]** (拒否する) : 受信側コンピューターは送信側コンピューターに接続しません。

エンドユーザーによる送信側コンピューターの証明書の検証

受信側コンピューターが送信側コンピューターの証明書を検証できず、証明書の検証失敗ポリシーが許可を要求するように構成されている場合、ユーザーは、検証エラーメッセージに表示される証明書の指紋が送信側コンピューターの[RGS Sender Configuration]ツールに表示される指紋と一致するかどうかを検証できます。管理者は必要に応じて[RGS Sender Configuration]ツールから指紋を提供できません。

CA によって署名された証明書の使用

簡単に展開できるように、HP RGS は送信側コンピューター用の自己署名証明書を作成します。セキュリティを高めるには、CA によって署名された証明書を使用するように HP RGS を構成できます。


CA によって署名された証明書を使用するには、CA 証明書およびキーファイルが送信側コンピューターおよび受信側コンピューターのシステムに存在する必要があります。

CA によって署名された証明書を使用するための送信側コンピューターの構成

RGS のプロパティの手動による設定について詳しくは、[78 ページの RGS のプロパティの手動設定](#)を参照してください。

送信側コンピューターの Ice (Interactive Connectivity Establishment) 構成ファイルの変更

1. config ファイルを開きます。Windows では、このファイルは RGS Sender のインストールディレクトリにあります。Linux では、このファイルは /etc/opt/hpremote/rgsender にあります。

 **注記：** [HP Velocity] が有効になっている場合、以下の設定は、<IceSSL> を <IceLive> に置き換えて複製する必要があります。

2. このファイルに以下の設定を追加します。


- IceSSL.DefaultDir=<証明書およびキー ファイルのディレクトリ>
- IceSSL.CertFile=<プログラム証明書ファイル>

このファイルにはプログラム証明書のほか、PEM 形式を使用して暗号化された秘密キーが含まれていることがあります。この証明書は、IceSSL.CertAuthFile 設定によって識別される CA 証明書で署名される必要があります。


- IceSSL.KeyFile=<IceSSL.CertFile 設定によって識別される証明書に関連付けられた秘密キーを含むファイル>

秘密キーは PEM 形式を使用して暗号化される必要があります。

- IceSSL.Password=<秘密キーの暗号化の解除に必要なパスワード>

 **注記：** 構成ファイル内で平文のパスワードを使用することは、セキュリティ上のリスクです。

- 受信側コンピューターを識別する証明書を検証するように送信側コンピューターを構成することもできます。送信側コンピューターが受信側コンピューターの証明書を検証できるようにするには、以下の設定を追加します。

 **注記：** 初期設定では、HP RGS は受信側コンピューターの証明書を作成せず、使用もしません。

```
IceSSL.VerifyPeer={0 | 1 | 2}
```

- 0：受信側コンピューターの証明書を検証しません。
 - 1：受信側コンピューターの証明書が提供されている場合は検証しますが、受信側コンピューターの証明書は必須ではありません。
 - 2：受信側コンピューターの証明書は必須で、証明書が検証されます。
- 受信側コンピューターの証明書を必要とするように送信側コンピューターを構成する場合、受信側コンピューターの証明書に署名するために使用されるものと同じ CA ルート証明書に送信側コンピューターがアクセスできるようにする必要があります。以下の設定を追加します。

```
IceSSL.CertAuthFile=<信頼済み CA の証明書を含むファイル>
```

ファイルは PEM 形式を使用して暗号化される必要があります。

送信側コンピューターの構成ファイルの変更

- `rgsenderconfig` ファイルを開きます。Windows では、このファイルは RGS Receiver のインストールディレクトリにあります。Linux では、このファイルは `/etc/opt/hpremote/rgreceiver` にあります。
- 以下の行からコメントを削除し、値を 0 に変更します。

```
Rgsender.Network.GenerateCertificate=0
```

この手順が完了すると、HP RGS は新しい証明書を生成したり、送信側コンピューターの検証用に自己署名証明書を使用したりしなくなります。


ファイルシステムからすべての既存の RGS 証明書を削除する必要があります。[35 ページの証明書の削除](#)を参照してください。

CA によって署名された証明書を使用するための受信側コンピューターの構成

RGS のプロパティの手動による設定について詳しくは、[78 ページの RGS のプロパティの手動設定](#)を参照してください。

受信側コンピューターの Ice 構成ファイルの変更

- `config` ファイルを開きます。Windows では、このファイルは RGS Receiver または RGS Sender のインストールディレクトリにあります。Linux では、このファイルは `/etc/opt/hpremote/rgreceiver` または `/etc/opt/hpremote/rgsender` にあります。Mac OS では、このファイルは `iceconfig` という名前で、`/Library/Application Support/HP/rgreceiver` にあります。

 **注記：** [HP Velocity] が有効になっている場合、以下の設定は、`<IceSSL>` を `<IceLive>` に置き換えて複製する必要があります。

- このファイルに以下の設定を追加します。


- `IceSSL.DefaultDir=<証明書およびキー ファイルのディレクトリ>`
- `IceSSL.CertFile=<プログラム証明書ファイル>`

このファイルにはプログラム証明書のほか、PEM 形式を使用して暗号化された秘密キーが含まれていることがあります。この証明書は、`IceSSL.CertAuthFile` 設定によって識別される CA 証明書で署名される必要があります。

- `IceSSL.KeyFile=<IceSSL.CertFile` 設定によって識別される証明書に関連付けられた秘密キーを含むファイル>

秘密キーは PEM 形式を使用して暗号化される必要があります。

- `IceSSL.Password=<秘密キーの暗号化の解除に必要なパスワード>`

 **注記：** 構成ファイル内で平文のパスワードを使用することは、セキュリティ上のリスクです。

3. 送信側コンピューターを検証するために CA によって署名された証明書を提供する場合、接続を試行するときに受信側コンピューターがその証明書を検証する必要があります。受信側コンピューターが送信側コンピューターの証明書を検証できるようにするには、以下の設定を追加します。

```
IceSSL.VerifyPeer={0 | 1}
```

- 0 : 送信側コンピューターの証明書を検証しません。
- 1 : 送信側コンピューターの証明書は必須で、証明書が検証されます。

4. 送信側コンピューター用に CA によって署名された証明書を構成する場合、送信側コンピューターの証明書に署名するために使用されるものと同じ CA ルート証明書に受信側コンピューターがアクセスできるようにする必要があります。以下の設定を追加します。

```
IceSSL.CertAuthFile=<信頼済み CA の証明書を含むファイル>
```

ファイルは PEM 形式を使用して暗号化される必要があります。

受信側コンピューターの構成ファイルの変更

1. `rgreceiverconfig` ファイルを開きます。Windows では、このファイルは RGS Receiver または RGS Sender のインストールディレクトリにあります。Linux では、このファイルは `/etc/opt/hpremote/rgreceiver` または `/etc/opt/hpremote/rgsender` にあります。Mac OS では、このファイルは `iceconfig` という名前で、`/Library/Application Support/HP/rgreceiver` にあります。

2. 以下の行からコメントを削除し、値を 0 に変更します。

```
Rgreceiver.Network.VerifyCertificate=0
```

この手順が完了すると、HP RGS は初期設定の自己署名証明書を使用しなくなります。

証明書の削除

証明書の検証に失敗した場合、ユーザーはメッセージが表示されたときに証明書を受け入れて接続することができます。

[Don't ask about this certificate again]（この証明書について今後このメッセージを表示しない）チェックボックスにチェックを入れた場合、RGS Receiver はホスト名および証明書のエンドユーザー検証結果を保存します。ユーザーが同じホスト名に再接続しようとしたときに、送信側コンピューターから同じ証明書が提供された場合、RGS Receiver は前回の選択に基づいて証明書を自動的に許可または拒否します。この情報は受信側コンピューターでローカルに保存されます。証明書を自動的に許可または拒否することを停止するには、証明書が保存されている場所から証明書を削除する必要があります。

Windows

1. [レジストリ エディター]を開き、**[HKEY_CURRENT_USER/Software/HP/KnownSenders]**フォルダーを見つけます。
2. すべての証明書を削除するには、**[KnownSenders]**フォルダーを削除します。特定の証明書を削除するには、**[KnownSenders]**フォルダーの中で、その証明書のホスト名に一致するサブフォルダーを削除します。

Linux

1. **[\$HOME/.config/HP/KnownSenders.conf]**という名前のファイルにアクセスします。
2. すべての証明書を削除するには、**[KnownSenders.conf]**ファイルを削除します。特定の証明書を削除するには、**[KnownSenders.conf]**ファイルを開き、その証明書のホスト名で始まるエントリを削除します。

macOS

1. **[\$HOME/Library/Preferences/com.hp.KnownSenders.plist]**という名前のファイルにアクセスします。
2. すべての証明書を削除するには、**[KnownSenders.plist]**ファイルを削除します。
3. コンピューターを再起動します。

証明書の構成のトラブルシューティング

ネットワークまたは証明書の構成の問題を診断するには、送信側コンピューターまたは受信側コンピューターの Ice 構成ファイルでログレベルを `DEBUG` に設定し、Ice プロパティを設定します。

1. `config` ファイルを開きます。Windows では、このファイルは RGS Receiver または RGS Sender のインストールディレクトリにあります。Linux では、このファイルは `/etc/opt/hpremote/rgreceiver` または `/etc/opt/hpremote/rgsender` にあります。Mac OS では、このファイルは `iceconfig` という名前で、`/Library/Application Support/HP/rgreceiver` にあります。
2. 以下の設定を追加します。
 - `IceSSL.Trace.Security={0 | 1}`
 - 0: セキュリティトレースが無効になります。
 - 1: セキュリティトレースが有効になります。
 - `Ice.Trace.Network={0 | 1 | 2 | 3}`
 - 0: ネットワークトレースが無効になります。
 - 1: 接続の確立中および終了中はネットワークトレースが有効になります。
 - 2: 接続の確立中および終了中はネットワークトレースが有効になり、詳細情報がログに記録されます。
 - 3: 接続の確立中および終了中はネットワークトレースが有効になり、詳細情報およびデータ転送がログに記録されます。
 - `Ice.Trace.Protocol={0 | 1}`
 - 0: プロトコルメッセージトレースが無効になります。
 - 1: プロトコルメッセージトレースが有効になります。

7 RGS 機能の使用


この章では、以下の RGS の機能およびトピックについて説明します。

- [RGS Advanced Features \(Windows/Linux のみ\)](#)
- [認証](#)
- [コラボレーション](#)
- [ディスプレイ](#)
- [入力](#)
- [リモートオーディオ](#)
- [リモートクリップボード](#)
- [リモート USB \(Windows/ThinPro のみ\)](#)
- [Directory モード](#)

RGS Advanced Features (Windows/Linux のみ)


ここでは、RGS Advanced Features について説明します。

- [Advanced Video Compression \(Windows/Linux のみ\)](#)
- [HP Velocity \(Windows/Linux のみ\)](#)

 **重要:** Windows ベースの受信側コンピューターで、初めて RGS 接続が確立されるときに、RGS Advanced Features を一度有効にする必要がありますが、それにはインターネットへのアクセスが必要です。LAN にプロキシサーバーを使用している場合は、プロキシが正しく設定されていることを確認します ([24 ページのネットワーク](#)を参照してください)。プロキシ自動設定 (PAC) ファイルまたは Web Proxy Auto-Discovery (WPAD) プロトコルでは有効にできません。

この有効化プロセスでは匿名アクセスを使用するため、IP アドレス 15.0.92.201 (activation.rgs.ext.hp.com) に対して匿名アクセスを許可するようにプロキシサーバーを設定する必要があります。


ハードディスク書き込み禁止設定のある Thin Client の場合は、初めて RGS 接続を行う前にハードディスク書き込み禁止設定を無効にし、有効化中に作成されたファイルがハードディスクドライブに完全に書き込まれるようにすることをおすすめします。ハードディスク書き込み禁止設定は、後で再度有効にしてください。

 **注記:** 以前の有効化 IP アドレス 192.151.30.9 は使用されなくなりました。

Advanced Video Compression (Windows/Linux のみ)

Advanced Video Compression は、RGS Advanced Features の 1 つで、最新のビデオコーデックを使用して高品質のビデオストリームに必要なネットワーク帯域幅を大きく削減できます。

Advanced Video Compression は、ビデオやテクスチャモードの 3D アプリケーションに最適です。ワイヤフレームや細い線は、動かしたときに画面に歪みが生じる可能性があるため、使用しないことをおすすめします。Advanced Video Compression は、RGS Receiver 設定の[Performance] (パフォーマンス) パネルで有効にできます。

 **重要** : Advanced Video Compression のシステム要件は RGS の基本的なシステム要件よりも高い場合があります。すべての要件は、『QuickSpecs』に記載されています ([5 ページのその他の情報の参照先](#)を参照してください)。

注 : フル HD (1920 × 1080) より大きい解像度での Advanced Video Compression のパフォーマンスは、コンテンツによって異なります。

Advanced Video Compression は、現在 4K (ウルトラ HD) の解像度をサポートしていません。

HP Velocity (Windows/Linux のみ)

HP Velocity は、RGS Advanced Features の 1 つで、ワイドエリアネットワーク (WAN) 内のパフォーマンスを向上させます。

HP Velocity のステータスは、RGS Receiver ツールバーに表示されます。

- 青 : HP Velocity はネットワークパケットロスを監視中で、使用できる状態です。
- 緑 : HP Velocity は正常に動作し、ネットワークの状態を向上させています。
- グレー : HP Velocity は有効になっていません。

 **注記** : HP Velocity を使用すると、ネットワーク帯域幅の使用量が増加する可能性があります。

認証

認証方法

RGS 接続では、3 種類の認証方法を使用できます。

- **標準認証** : Windows および Linux の RGS Sender でサポートされています。
- **Easy Login** : Windows および Linux の RGS Sender でサポートされています。
- **シングルサインオン** : Windows の RGS Sender のみでサポートされています。

Windows では、RGS Sender のインストール時に認証方法を選択しますが、[RGS Sender Configuration] ツールを使用して後で変更できます ([71 ページの\[RGS Sender Configuration\]ツールの使用](#)を参照してください)。標準認証および Easy Login についてはスマートカードリダイレクトがサポートされています ([40 ページのスマートカードリダイレクトの使用](#)を参照してください)。


Linux では、インストール時に Easy Login を有効にできますが、RGS Sender のプロパティを使用して無効にできます ([79 ページのその他のグローバルプロパティ](#)を参照してください)。

標準認証

標準認証は、ローカルユーザーがシングルサインオンまたは Easy Login のどちらのログイン方法も有効にされていない送信側コンピューターに接続を試みるためのプロセスです。

通常の操作では、ユーザーは受信側コンピューターから送信側コンピューターに RGS 接続を確立するときに、2 回の認証が必要です。以下の 2 つの操作を行います。

1. 最初の認証手順は、RGS Receiver から RGS Sender に対して行います。この認証手順のダイアログは、受信側コンピューターの RGS Receiver によって生成され、表示されます。
2. 2 番目の認証手順は、送信側コンピューターのデスクトップセッションにログインするか、ロック解除するときに行います。ログインまたはロック解除ダイアログが送信側コンピューターによって生成され、受信側コンピューターの RGS Receiver ウィンドウ内に表示されます。

 **注記：**別のユーザーが送信側コンピューターにすでにログインしている場合、2 番目の認証手順は行われません。代わりに、現在ログインしているユーザーに認可プロンプトが表示され、既存のデスクトップセッションへの新しいユーザーのアクセスを許可または拒否するように求められます ([41 ページのコラボレーション](#)を参照してください)。


Windows Receiver および Windows Sender が同じワークグループ内にあり、両方のシステムで同じユーザー名およびパスワードを使用する場合、最初の認証手順はセキュリティトークンを使用して実行されます。ユーザーがパスワードを入力する必要はありません。別のユーザーとして接続するには、[Prompt for username and password] (ユーザー名およびパスワードの入力を求める) 設定を有効にします (詳しくは、[21 ページの RGS Receiver の設定](#)を参照してください)。


Kerberos 認証の使用

Windows Sender または Linux Sender を Windows ドメインに接続しているときに、同じドメインに接続された Windows Receiver を使用する場合は、Kerberos を使用して最初の認証手順を実行できます。ユーザーがパスワードを入力する必要はありません。Linux Sender への Kerberos 認証には、Sender 識別子としてホスト名を入力する必要があります。Linux Sender への Kerberos 認証は、IP アドレスでは機能しません。別のユーザーとして接続するには、[Prompt for username and password] (ユーザー名およびパスワードの入力を求める) 設定を有効にします (「RGS Receiver の設定」を参照してください)。

Easy Login


Easy Login を使用する場合は、認証の最初の手順 (RGS 認証) が省略されます。


 **注記：**ログイン画面で、「HP RGS ELO」という名前の別のユーザー アカウントが表示される場合があります。このアカウントを使用するのではなく、通常のユーザー アカウントを使用してログインしてください。

 **注記：**Easy Login 認証を妨げる可能性のある問題がいくつか存在します。[RGS Sender Configuration] ツールの [Diagnostics] (診断) パネルは、これらの問題のトラブルシューティングに使用できます。詳しくは、[71 ページの \[RGS Sender Configuration\] ツールの使用](#)を参照してください。


シングルサインオン

シングルサインオンでは、2 つ目の (システム) 認証が省略されます。接続するときに、ユーザーはユーザー名およびパスワードの入力を求められます。検証が行われると、ユーザーは送信側コンピューターのデスクトップに直接接続されます。

 **注記：**シングルサインオンは、スマートカードおよび ActivKey 認証をサポートしていません。

 **注記：**デスクトップをロックすると、「HP RGS SSO」という名前の別のユーザー アカウントが表示される場合があります。このアカウントを使用するのではなく、通常のユーザー アカウントを使用してログインしてください。

スマートカードリダイレクトの使用

 **注記**：スマートカードリダイレクトは、Windows ベースの受信側コンピューター、および Windows ベースまたは Linux ベースの送信側コンピューターでのみサポートされています。


Windows ベースおよび ThinPro ベースの受信側コンピューターでは、リモート USB を使用してスマートカードをリモート接続できます。[56 ページのリモート USB \(Windows/ThinPro のみ\)](#) を参照してください。

スマートカードリダイレクトを有効にすると、受信側コンピューターのみ物理的に存在するスマートカードに、受信側コンピューターおよび送信側コンピューターの両方からアクセスできます。つまり、スマートカードを使用して受信側デスクトップのロックを解除し、送信側コンピューターに接続して、送信側デスクトップで受信側コンピューターのスマートカードを使用できます。

 **注記**：スマートカードリダイレクトは、標準認証または Easy Login でのみ使用できます。シングルサインオンでは使用できません。

スマートカードリダイレクトを使用するには、以下の操作を行います。

1. RGS Receiver および RGS Sender の両方をインストールするときにスマートカードリダイレクトを有効にします ([7 ページの「インストール」](#) を参照してください)。
2. 受信側コンピューターに、スマートカードリーダー用のベンダー ドライバーをインストールします。
3. 受信側コンピューターおよび送信側コンピューターの両方に、スマートカード用のベンダー ドライバーをインストールします。
4. リモート USB が有効な場合は、[40 ページのスマートカードリダイレクトのためのリモート USB の設定](#) を参照してください。

 **注記**：受信側コンピューターにスマートカード取り出しポリシーが設定されている場合、スマートカードが取り出されたときに受信側デスクトップがロックされます。送信側コンピューターにスマートカード取り出しポリシーが設定されている場合、RGS 接続が終了したとき、またはスマートカードが取り出されたときに送信側デスクトップがロックされます。

スマートカードリダイレクトのためのリモート USB の設定

スマートカードリーダーは、通常は USB 経由でシステムに接続するため、スマートカードリダイレクト機能を使用するには、スマートカードリーダーがリモート USB 機能によってリモート接続されることを防ぐ必要があります。

スマートカードリーダーがリモート接続されることを防ぐには、以下の操作を行います。

- ▲ RGS Receiver をインストールするときに、初期設定のリモート USB インストール オプション **[USB devices are Local/Remote]** (USB デバイスはローカルおよびリモート) を使用した場合、RGS セッションを開始する前にスマートカードリーダーを受信側コンピューターに取り付け、スマートカードリーダーをセッション中に取り外さないでください。

または

スマートカードリーダーのリモート接続動作を local に設定します ([56 ページの個々の USB デバイスのリモート接続動作の設定 \(Windows のみ\)](#) を参照してください)。

制限

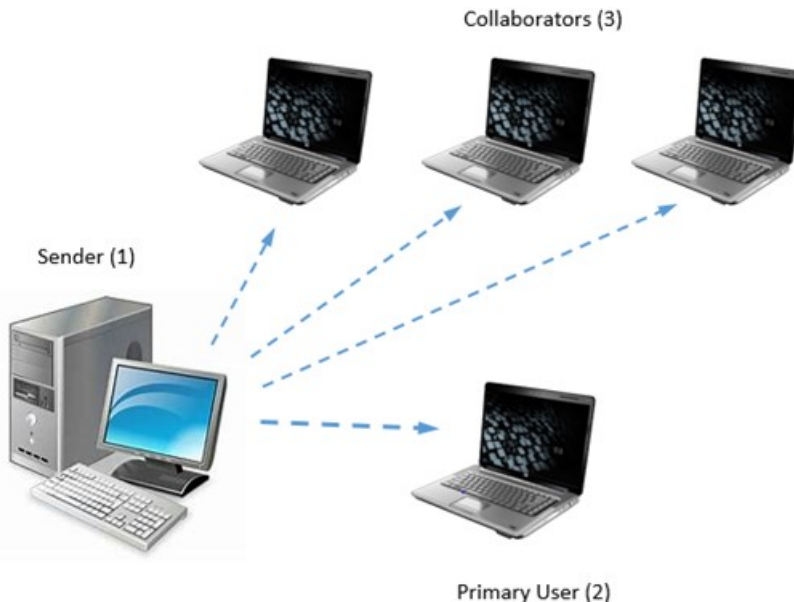
スマートカードリダイレクトを使用するときは、以下の制限に注意してください。

- スマートカードリダイレクトは、プライマリユーザーに制限されます。
- スマートカードリダイレクトは、受信側コンピューターで検出された最初のスマートカードに制限されます。受信側コンピューターでスマートカードが（仮想スマートカードを含めて）2つ以上有効になっている場合、スマートカードリダイレクトの結果が予測できないことがあります。
- RGS セッション中にスマートカードリーダーを取り外して再接続すると、スマートカードリーダーはリモート USB 経由でリモート接続されます。この状況では、受信側コンピューターはスマートカードリーダーまたはスマートカードを認識できなくなります。スマートカード取り出しポリシーが有効になっている場合は、受信側デスクトップがロックされます。

コラボレーション

RGS では、プライマリユーザーは、自分のデスクトップセッションを複数のユーザーと同時に共有できます。この機能は、教室での授業、デザインの検討、テクニカルサポートなど、さまざまなコラボレーションで利用できます。

プライマリユーザーが自分のデスクトップセッションに接続することを1人または複数のユーザーに認可する場合、コラボレーションセッションが作成されます。これによって、すべてのユーザーがプライマリユーザーのデスクトップを表示し、操作できるようになります。



番号	説明
1	送信側コンピューター ：RGS Sender をホストします。RGS Sender は、送信側コンピューターのデスクトップセッションを各受信側コンピューターの RGS Receiver に送信します
2	プライマリユーザー ：プライマリユーザーは送信側コンピューターにログインし、セッションを制御できます。プライマリユーザーは、セッションに接続し、積極的に参加できるユーザーを認可します
3	コラボレーター ：コラボレーターに認可されると、送信側コンピューターのデスクトップを表示して、プライマリユーザーが許可した変更を行うことができます


注記：上の図は、可能な構成の一例です。プライマリユーザーおよびコラボレーターは、RGS Receiver によってサポートされているハードウェアの組み合わせをすべて使用できます。

マウスやキーボードを現在制御しているユーザーをフロア所有者と呼びます。一度に1人のユーザー（フロア所有者）だけがデスクトップを操作できます。フロア所有者を移行するには、現在のフロア所有者がキーボードやマウスの操作を0.5秒間停止する必要があります。現在のフロア所有者がこの時間が過ぎた後も操作を停止している間に、別のユーザーがキーボードまたはマウスを使用すると、フロアの所有権が新しいユーザーに移行します。

 **ヒント** : 0.5秒という遅延時間は、Windowsで[RGS Sender Configuration]ツールを使用して変更できます（詳しくは、[71ページの\[RGS Sender Configuration\]ツールの使用](#)を参照してください）。

Windowsの通知領域にあるRGS Senderの通知アイコンをクリックすると、[HP RGS Collaborators]（HP RGS コラボレーター）ウィンドウが開き、以下を行うことができます。

- プライマリユーザーおよびコラボレーターを表示する
- 該当するマウスポインターアイコンをクリックして、各コラボレーターの入力、またはすべてのコラボレーターの入力を一度に有効または無効にする

 **ヒント** : 各コラボレーターの入力は、認可ダイアログで[Enable Input for this user]（このユーザーの入力を有効にする）を選択して、そのコラボレーターによる接続を認可するときに有効にすることもできます。

- 該当する[X]アイコンをクリックして、各コラボレーターまたはすべてのコラボレーターを一度に切断する

コラボレーションについては、以下の詳細情報を参照してください。

- コラボレーションでは、送信側コンピューター上で一意のログイン資格情報が参加者ごとに必要です。
- ゲストアカウントがWindowsで有効になっている場合、コラボレーターがセッションに参加するには、ユーザー名を「Guest」とし、パスワードを空白のままにします。ただし、参加できるゲストコラボレーターは一度に1人のみです。他のゲストコラボレーターが参加すると、最初のゲストコラボレーターはセッションから追い出されます。
- Windowsでは、プライマリユーザーが接続を切断するとデスクトップはロックされますが、すべてのコラボレーターは接続されたままになります。Linuxでは、プライマリユーザーが接続を切断すると、デスクトップはロックされ、すべてのコラボレーターの接続が切断されます。
- すべてのコラボレーターの更新率は、最も更新率の低いコラボレーターによって制限されます。最も更新率が低いコラボレーターが、RGS Receiver設定の[Performance]（パフォーマンス）パネルを使用して更新率を向上させると、すべてのコラボレーターの環境が向上します。
- Advanced Video Compression または HP Velocity が有効になっているセッションでコラボレーションする場合、各コラボレーターのRGS Receiverで、Advanced Video Compression および HP Velocity が同じように設定されている必要があります。設定が異なる場合、接続が拒否されます。

ディスプレイ

ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整

多くの RGS シナリオでは、送信側コンピューターによって送信される解像度と表示レイアウトが、受信側コンピューターのディスプレイ構成と一致する必要があります。ここでは、RGS が初期設定で解像度と表示レイアウトを調整できない場合に、送信側コンピューターを構成する方法について説明します。

マルチ モニターの概要

RGS 接続中は、RGS が送信側コンピューターの完全なデスクトップ領域を受信側コンピューターに送信します。送信側コンピューターの方が受信側コンピューターよりモニターの数が多い場合、またはモニターの解像度が高い場合は、RGS Receiver ウィンドウにスクロールバーが表示され、送信側コンピューターの完全なデスクトップ領域を表示できます。送信側コンピューターに複数のモニターがある場合は、[43 ページのディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 \(Windows ベースの送信側コンピューター\)](#) または [47 ページのディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 \(Linux ベースの送信側コンピューター\)](#) に記載されているオプションを使用することが望ましい場合があります。



受信側コンピューターの複数のモニターも、多対一接続に使用できます。受信側コンピューターが2台の送信側コンピューターに接続されている場合、受信側コンピューターに2台のモニターがあれば、各送信側コンピューターのフレームバッファをそれぞれのモニターに表示できます (以下の図を参照してください)。



注記: Mac OS で、OS の[ディスプレイごとに個別の操作スペース]設定が選択されていない場合、1つの RGS Receiver ウィンドウ内に、複数の送信側コンピューターのモニターを表示できます。RGS Receiver に複数のモニターがある場合、1台のモニターに全画面表示モードで表示され、別のモニターには何も表示されません。

ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 (Windows ベースの送信側コンピューター)

[Match Receiver display resolution] (受信側コンピューターの表示解像度に合わせる) および **[Match Receiver display layout]** (受信側コンピューターの表示レイアウトに合わせる) オプションが有効になっている場合 ([22 ページの接続](#)を参照してください)、RGS は送信側コンピューターの解像度および表示レイアウトと一致するように受信側コンピューターの解像度および表示レイアウトを自動的に設定します。ただし、送信側コンピューターにモニターが接続されていない場合などのいくつかのシナリオでは、望ましい結果を得るためにいくつかの手動構成が必要になる場合があります。

解像度と表示レイアウトを一致させようとするとき、留意すべき最も重要なことは、送信側コンピューターが受信側コンピューターと同じ解像度およびレイアウトをサポートする必要があるということです。

解像度を調整するときに生じる可能性のある問題を避けるために、以下の手順を使用して、解像度を事前にテストしてください。

1. **[Match Receiver display resolution]** (受信側コンピューターの表示解像度に合わせる) 設定を無効にして RGS 接続を確立します。
2. 接続が確立されたら、送信側コンピューターの解像度を受信側コンピューターの解像度と一致するように手動で設定してみてください。


解像度を一致させることができる場合、RGS も自動的にこれを行うことができます。

解像度を一致させることができない場合、このセクションの追加情報を参照してください。

使用中の NVIDIA GPU およびドライバーによっては、送信側コンピューターに追加構成を行うことが必要な場合もあります。必要な構成は、以下で説明するようにハードウェアの種類によって異なります。

- **ブレードワークステーション**：送信側コンピューターがブレードワークステーションの場合、その NVIDIA ドライバーは、モニターがすべて接続されているかのように、表示出力をオペレーティングシステムに公開します。NVIDIA ドライバーによって提供される解像度は幅広い設定に対応し、ほとんどのユーザーのニーズを満たします。目的の解像度が得られない場合、[46 ページのカスタム解像度の追加](#)を参照してください。
- **仮想ワークステーション**：送信側コンピューターが、ハイパーバイザーを持つ仮想ワークステーションの場合、NVIDIA ドライバーはオペレーティングシステムに単一のディスプレイを提供します。NVIDIA ドライバーによって提供される解像度は幅広い設定に対応し、ほとんどのユーザーのニーズを満たします。受信側コンピューターで単一のディスプレイを使用している場合、他の操作は必要ありません。追加の解像度を設定したり、別のディスプレイを使用できるようにしたりする必要がある場合は、[45 ページの NVIDIA の解像度の調整 \(NVIDIA グラフィックスを備えた Windows ベースの送信側コンピューターのみ\)](#)を参照してください。
- **従来のワークステーション**：送信側コンピューターが従来のワークステーションの場合、その NVIDIA ドライバーは、1 つまたは複数の出力に取り付けられているディスプレイの検索を試行します。検出された場合、ドライバーはディスプレイから EDID (Extended Display Information Data) 情報を照会してサポートされている解像度を調べ、そのディスプレイおよび解像度がオペレーティングシステムで使用可能になるようにします。Windows 7 において、ディスプレイが接続されていない場合、NVIDIA ドライバーは、基本のディスプレイ解像度を使用する単一の VGA 出力に戻します。Windows 10 では、解像度の調整は初期設定で有効になっており、適切な EDID ファイルが自動的に作成され、RGS 接続の間使用されます。プロパティ AllowNvidiaResolutionMatching は Windows 8.1 および Windows 10 では初期設定で有効になりますが、Windows 7 では有効にする必要があります。サーバー、ラック マウントワークステーション、および非 NVIDIA グラフィックスでは、EDID エミュレーター デバイスを使用するか、または EDID ファイルを作成して、解像度を調整できるようにします。詳しくは、[45 ページの EDID ファイルの作成および適用](#)および[43 ページのディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 \(Windows ベースの送信側コンピューター\)](#)を参照してください。または、RGS は自動的に EDID ファイルをロードします。[45 ページの NVIDIA の解像度の調整 \(NVIDIA グラフィックスを備えた Windows ベースの送信側コンピューターのみ\)](#)を参照してください。
- **ヘッドレスワークステーション**：物理的なディスプレイが接続されていないワークステーションに接続する場合、RGS はまず EDID をロードする必要があります。RGS は 4K までのほとんどの解像度をサポートするカスタム EDID が自動的にロードされるように設定できます。NVIDIA GPU を搭載したヘッドレスワークステーションで EDID の自動ロードを有効にするには、以下の操作を行います。


1. `rgsenderconfig` で、`Rgsender.Compatibility.Displays.ForceEdidOnHeadless` を 1 に設定します。
2. RGS Sender サービスを再起動します。
または
送信側コンピューターを再起動します。

 **注記：**このプロパティは、RGS Sender サービス起動時にヘッドレスであるシステムにのみ、EDID を適用します。RGS Sender サービス起動時にワークステーションがヘッドレスではない場合、EDID はロードされません。


NVIDIA の解像度の調整 (NVIDIA グラフィックスを備えた Windows ベースの送信側コンピューターのみ)

NVIDIA の解像度の調整により、初期設定の解像度の調整方法に以下の機能が追加されます。

- EDID ファイルの自動ロードおよび自動アンロードによる、モニターの数を受信側コンピューターより少ない送信側コンピューターでのディスプレイの「偽装」の許可

 **注記：**これは、ハイパーバイザーが通常は 1 つのディスプレイのみを提供する仮想ワークステーションで特に役立ちます。

- 仮想システム (具体的には、Citrix および VMware 仮想マシン) でのモニターの回転
- 仮想システムでのカスタム解像度の自動適用

 **注記：**NVIDIA の解像度の調整で、要求された解像度の調整に失敗した場合、RGS は初期設定の解像度の調整方法を試します。

NVIDIA の解像度の調整を有効にするには、以下の操作を行います。

1. `rgsenderconfig` で、`Rgsender.Compatibility.Displays.AllowNvidiaResolutionMatching` を 1 に設定します。
2. RGS Sender サービスを再起動します。
または
送信側コンピューターを再起動します。

 **注記：**プロパティの設定について詳しくは、[78 ページのプロパティの値を設定ファイルの中で設定する方法](#)を参照してください。

EDID ファイル


EDID (Extended Display Identification Data) データは、ディスプレイが解像度やビデオ特性などの機能を入力デバイスとやりとりするための標準化された手段です。これによって、入力デバイス (PC、グラフィックスカード) はシステムのニーズに合わせて必要なグラフィックスを生成できます。EDID は、RGS が複雑なお客様の要件を管理するためのパワフルで効率的な方法を提供します。

EDID ファイルの作成および適用

EDID ファイルを作成および編集するために使用できるソフトウェアツールもありますが、最も簡単な方法は、受信側コンピューターの既存のモニターを使用することです。これを送信側コンピューターに一時的に接続し、NVIDIA コントロールパネルを使用して EDID ファイルをエクスポートできます。いくつかの異なるディスプレイを受信側コンピューターで使用している場合、最高のディスプレイ解像度を持つモニターの EDID 情報を取り込むことをおすすめします。これは、他のすべての解像度のニーズに対処します。

EDID ファイルを作成するには、以下の操作を行います。


1. 送信側コンピューターまたは受信側コンピューターにモニターを接続します。

 **注記**：この方法は、MXM グラフィックスを使用しているブレードワークステーションでは使用できません。

2. NVIDIA コントロールパネルを開き、**[システムトポロジの表示]**をクリックします。
3. 接続したモニターの**[EDID]**を探して選択します。
4. **[EDID の管理]**ダイアログボックスが表示されます。**[モニター]**と書かれているリンクを選択します。
5. **[EDID のエクスポート]**を選択し、出力をファイルに保存します。このファイルは、送信側コンピューターシステムでインポートできます。

EDID ファイルをインポートするには、以下の操作を行います。

1. 送信側コンピューターシステムの**[システムトポロジの表示]**で、使用するコネクタポートの**[EDID]**を選択します。
2. **[EDID の管理]**ダイアログボックスで、**[ロード]**タブ→**[参照]**→作成した EDID ファイルの順に選択します。
3. **[コネクタ]**で、EDID モニターのために使用するコネクタ（DVI、DisplayPort）を選択します。
4. **[ロード]**を選択します。EDID 情報が適用されます。
5. **[OK]**→**[キャンセル]**の順に選択して、**[EDID の管理]**ダイアログボックスを閉じます。


 **注記**：複数の DisplayPort にファイルを適用すると、RGS は複数ディスプレイ構成をサポートできるようになります。

NVIDIA コントロールパネルの**[システムトポロジの表示]**画面の下に、選択した DisplayPort に対して EDID ファイルが適用されていることが表示されているのが確認できます。これで、RGS は目的の表示解像度と表示レイアウトを一致させることができます。

カスタム解像度の追加

以下の操作では、NVIDIA ドライバーによってサポートされていない解像度を追加する方法について説明します。

1. NVIDIA コントロールパネルを開き、**[解像度の変更]**をクリックします。
2. **[カスタマイズ]**をクリックします。

 **注記**：この操作を初めて行うときに警告メッセージが表示されることがありますが、これに同意します。

3. **[このディスプレイに表示されない解像度を有効にする]**チェックボックスにチェックを入れ、**[カスタム解像度の作成]**をクリックします。
4. 目的のカスタム解像度を追加します。

ディスプレイの解像度およびレイアウトの調整 (Linux ベースの送信側コンピューター)


[Match Receiver display resolution] (受信側コンピューターの表示解像度に合わせる) オプションが有効になっている場合 ([22 ページの接続](#) を参照してください)、RGS は送信側コンピューターの解像度および表示レイアウトと一致するように受信側コンピューターの解像度および表示レイアウトを自動的に設定します。RGS は 1 つのリモート X 画面のみをサポートするため、受信側コンピューターに取り付けられているすべてのディスプレイの解像度を合算した解像度になるよう送信側コンピューターの解像度を設定します。

たとえば、受信側コンピューターでデュアルモニターを使用していて、どちらのモニターも 1280 × 1024 の解像度に設定されている場合、RGS は解像度を 2560 × 1024 に設定するよう送信側コンピューターに要求します。解像度がサポートされていない場合、RGS は代わりに `xorg.conf` ファイルから得られる送信側コンピューターの推奨される解像度を使用します。

送信側コンピューターを受信側コンピューターの解像度と一致させることができるかどうかを確認するための最も簡単な方法は、送信側コンピューターの解像度を手動で設定してみることです。解像度を手動で設定できる場合、RGS は自動的にこれを行うことができます。解像度を手動で設定できない場合、必要な追加の解像度をサポートするように `xorg.conf` ファイルを変更する必要があります。

解像度を手動で一致させることができるかどうかをテストするには、以下の接続設定を**[無効]**にして RGS 接続を確立します。

- **[Match Receiver display resolution]**
- **[Match Receiver display layout]** (受信側コンピューターの表示レイアウトに合わせる)

 **注記:** Linux の RGS Sender に接続するときは、この設定を常に無効にする必要があります。

RGS セッションを確立したら、X ターミナルウィンドウを開き、`xrandr` ツールを使用して、X サーバーに対して現在のサポートされているすべての解像度のリストを表示します。このツールを使用して、サイズや向きなど、X サーバー ディスプレイの設定を行うこともできます。

X ウィンドウシステムの以前のリリースでは、`/etc/X11/xorg.conf` ファイルを使用して初期セットアップ情報を保存していました。モニターまたはビデオカードに変更が生じた場合、ファイルを手動で編集する必要がありました。Red Hat® Enterprise Linux (RHEL) の現在のリリースではプロセスが大幅に自動化されましたが、モニターが接続されていなかったり、異なる解像度を持つ別のモニターが取り付けられていることを X サーバーでシミュレートしたりする場合は、構成をサポートするためにファイルを編集する必要があります。この場合も同様に、X サーバーが受信側コンピューターのモニターの能力を判別できない場合に、RGS セッション内で受信側コンピューターの解像度を一致させることが必要になります。



注記：一部のウィンドウマネージャー（GNOME など）を使用するとディスプレイ設定を変更できませんが、これによって、以下のファイルが作成されることがあります。

```
$HOME/.config/monitors.xml
```

システムにログインしてウィンドウマネージャーがセッションが開始されると、ウィンドウマネージャーはこのファイルの情報を使用して現在のデスクトップ解像度を設定します。これにより、RGSによって行われた解像度の調整が元に戻され、デスクトップが不適切な解像度に設定されることがあります。

たとえば、ウィンドウマネージャーを使用して送信側コンピューターのデスクトップ解像度を 1024 × 768 に設定した場合、その解像度は `monitors.xml` に保存されます。次に、解像度が 1920 × 1200 の受信側コンピューターで有効にされているディスプレイ解像度の調整を使用して RGS 接続が確立された場合、送信側コンピューターの解像度は 1920 × 1200 に変更されてから 1024 × 768 に変更されます。解像度の調整要求が失敗したという通知は行われません（要求が失敗したわけではないため）。

この動作を回避するには、ウィンドウマネージャーのコントロールを使用して解像度を設定しないようにしてください。`monitors.xml` を削除して、ディスプレイ解像度の調整機能を復元することをおすすめします。お使いのオペレーティングシステムまたはウィンドウマネージャーでディスプレイの設定を管理する場所および方法について詳しくは、それぞれのドキュメントを参照してください。

X サーバーの構成

X サーバーは、いくつかの異なる方法で構成できます。このセクションでは、2 つの異なるシナリオについて推奨される方法について説明します。

シナリオ 1：すべての受信側コンピューターの構成が同じである場合

すべての受信側コンピューターの構成が同じである場合、`xorg.conf` ファイルの **[Screen]** セクションの下にある **[Virtual]** エントリを使用するのが最も簡単な方法です。

たとえば、すべての受信側コンピューターに、1280 × 1024 に構成されたモニターがそれぞれ 4 台ずつ接続されている場合、`xorg.conf` ファイルに以下の追加を行うことで、X サーバーを 5120 × 1024 の解像度で実行するように構成します。

[Device] セクションに以下を追加します。

```
Option "UseDisplayDevice" "none"
```

```
Option "UseEDID" "false"
```

[Screen] セクションに以下を追加します。

```
SubSection "Display"
```

```
Virtual 5120 1024
```

```
Depth 24
```

```
EndSubSection
```

こうすることで、X サーバーは 5120 × 1024 の解像度で実行する単一の画面を持つように構成され、受信側コンピューターの 4 台のモニターすべてに対応します。この方法を使用して、フレームバッファメモリによってのみ制限される非常に大きな仮想ディスプレイをサポートできます。

シナリオ 2：一部の受信側コンピューターの構成が異なる場合

多くの異なるディスプレイ解像度およびモニター構成をサポートする必要があるというよくあるシナリオでは、NVIDIA TwinView® モードを使用して解像度を調整できます。TwinView モードでは、2つのディスプレイ（デジタルフラットパネル、CRT）で、1つの X 画面の内容を異なる構成で表示できます。複数のモニターを使用するためのこの方法は、Xinerama（RGS でサポートされていない）などの他の手法に比べて以下の明白な利点があります。

- 1つの X 画面のみを使用します。NVIDIA ドライバーは、X サーバーからの複数のディスプレイに関するすべての情報を隠蔽します。X サーバーに関しては、1つの画面のみが存在します。
- 両方のディスプレイが1つのフレームバッファを共有します。したがって、1台のディスプレイに存在するすべての機能（たとえば、高速化された OpenGL）を TwinView で使用できます。
- 単一のデスクトップをエミュレートするとき追加のオーバーヘッドがありません。

たとえば、すべての受信側コンピューターが1台または複数のモニターを持つ場合、受信側コンピューターのどれかで使用されている最高の解像度を持つモニターを持っていると認識するように X サーバーを構成する必要があります。これにより、X サーバーで可能な限り多くのディスプレイ解像度がサポートされるようにすることができます。これを行うには、モニターから EDID 情報を取得し（[50 ページの EDID ファイルの作成](#)を参照してください）、xorg.conf ファイルに以下の追加を行います。

以下の例では、HP LP2465 デュアルディスプレイを使用します。xorg.conf の[Device]セクションに以下のテキストを追加します。

```
Option "ConnectedMonitor" "DFP-0,DFP-1"

Option "CustomEDID" "DFP-0:/etc/X11/lp2465edid.bin;DFP-1:/etc/X11/lp2465edid.bin"
```

これで X サーバーは、HP LP2465 デュアルディスプレイが接続されると認識したため、[Screen]セクションの下で TwinView サポートを有効にし、サポートされるシングルディスプレイレイアウトおよびデュアルディスプレイレイアウトを構成します。


```
Option "TwinView" "True"

Option "MetaModes" "DFP-0: 1920x1200 +0+0, DFP-1: 1920x1200 +1920+0;
DFP-0: 1920x1200 +0+0, DFP-1:NULL"

SubSection "Display"


Depth 24

EndSubSection
```

 **注記：**上記の例で、NULL はシングルディスプレイ構成を表します。この行は、デュアルディスプレイ構成およびシングルディスプレイ構成の両方に対応します。

追加の解像度をサポートするには、同じ行に追加の組み合わせを定義します。

```
Option "MetaModes" "DFP-0: 1920x1200 +0+0, DFP-1: 1920x1200 +1920+0;
DFP-0: 1920x1200 +0+0, DFP-1:NULL; DFP-0: 1680x1050 +0+0, DFP-1:
1680x1050 +1680+0; DFP-0: 1680x1050 +0+0, DFP-1:NULL; DFP-0: 1600x1200
+0+0, DFP-1: 1600x1200 +1200+0; DFP-0: 1600x1200 +0+0, DFP-1:NULL; DFP-0:
1400x1050 +0+0, DFP-1: 1400x1050 +1400+0; DFP-0: 1400x1050 +0+0,
DFP-1:NULL; DFP-0: 1280x1024 +0+0, DFP-1: 1280x1024 +1280+0; DFP-0:
1280x1024 +0+0, DFP-1:NULL"
```


 **注記：**X サーバーに提供されている EDID ファイルも、リストされている解像度をサポートする必要があります。

EDID ファイルの作成

EDID ファイルを作成するには、以下の操作を行います。


- ▲ NVIDIA ツールの `nvidia-settings` を使用して、`.bin` または `.txt` 形式で EDID ファイルを作成します。

 **重要** : NVIDIA ツールを使用する前に、物理的なディスプレイを接続する必要があります。

 **ヒント** : [45 ページの EDID ファイルの作成および適用](#) で説明する Windows 用の方法を使用して、EDID ファイルを Linux システムにコピーしてもかまいません。

送信側コンピューターの画面ブランキング

初期設定では、RGS Sender は、送信側コンピューターのモニター（接続されている場合）の画面をブランキングして、送信側コンピューターにデスクトップセッションが表示されないようにします

 **重要** : 画面のブランキングは、送信側コンピューターが仮想マシンの場合はサポートされません。


初期設定の動作では、RGS セッションの開始時に送信側コンピューターの画面が暗転して、カーソル以外は表示されなくなります。送信側コンピューターの画面の暗転は、RGS セッションの終了時に解除されます。

RGS Sender の画面ブランキングについては、以下の詳細情報を参照してください。

- RGS セッションが開始されてから送信側コンピューターの画面がブランキングされるまでに最大 2 秒の遅延が発生する場合があります。
- 何らかの理由で RGS Sender が送信側コンピューターの画面をブランキングできない場合は、受信側コンピューターに警告ダイアログが表示されます。
- 送信側コンピューターが HP ワークステーションの場合、画面ブランキング中には、送信側コンピューターに物理的に接続されたキーボードまたはマウスからの入力がほとんどブロックされます。RGS Sender がキーボードまたはマウスの入力を RGS Receiver から受信すると、送信側コンピューターのモニターは省電力モードに入り、カーソルもブランキングされます。
- 送信側コンピューターに物理的に接続されたキーボードでの `Ctrl + Alt + Del` キーシーケンスは RGS Sender によってブロックされません。このシーケンスが物理的に接続されたキーボードを使用して送信側コンピューターに入力されると、リモートデスクトップの Windows ログオン画面が受信側の RGS Receiver ウィンドウに表示されます。送信側コンピューターのモニターはブランキングしたままですが、モニターの省電力モードは終了します。ログオン画面が閉じられるまで送信側コンピューターのキーボード入力はブロックされません。
- 複数のモニターを使用する Linux ベースの送信側コンピューターでは、NVIDIA TwinView を使用している場合にのみ、画面ブランキングがサポートされます。
- 画面ブランキングは、[RGS Sender Configuration] ツールを使用して無効にできます ([71 ページの \[RGS Sender Configuration\] ツールの使用](#) を参照してください)。


入力

タッチ機能の使用（タッチ対応の Windows デバイスのみ）

 **注記** : RGS は、Windows 7 ではタッチ機能をサポートしません。


RGS では、以下のタッチ機能をサポートします。

- **ジェスチャ**：詳しくは、以下の表を参照してください。
- **仮想キーボードおよび仮想マウス**：仮想キーボードおよび仮想マウスにアクセスするには、RGS Receiver ツールバーを使用します。仮想マウスを使用すると、タブレット GUI では通常表示されないリモートカーソル位置が表示されます。仮想マウスは、カーソルの位置を正確に移動する必要がある場合に役立ちます。

 **ヒント**：仮想マウスは、4 本指タップ ジェスチャを使用して有効または無効にすることもできます。

- **ホットキー シーケンスのマッピング**：詳しくは、[23 ページのジェスチャ \(タッチ対応の Windows デバイスのみ\)](#) を参照してください。

以下の表では、RGS でサポートされているジェスチャについて説明します。

 **重要**：「**押す**」とは 0.5 秒以上押したままにする操作、「**タップ**」とは 0.5 秒未満で離す操作を意味します。

ジェスチャ	説明
1 本指タップ	左クリック
1 本指ダブルタップ	ダブルクリック
1 本指で押してドラッグ	左クリックしてドラッグ
2 本指タップ	右クリック
2 本指で押してドラッグ	右クリックしてドラッグ
2 本指ピンチ/ズーム	ズームアウト (縮小) /ズームイン (拡大) 注記 ：指を離すと倍率は 100%に戻ります
2 本指ドラッグ	移動 (ズームインしている場合)
3 本指スワイプまたはドラッグ	スクロールホイール
4 本指タップ	仮想マウスを有効または無効にします
4 本指で押してドラッグ	中央クリックしてドラッグ
1 本指で押す	これらのジェスチャはカスタマイズできます。詳しくは、 23 ページのジェスチャ (タッチ対応の Windows デバイスのみ) を参照してください
1 本指で左方向にスワイプ	
1 本指で右方向にスワイプ	
1 本指で上方向にスワイプ	
1 本指で下方向にスワイプ	
3 本指タップ	
3 本指で押す	
4 本指で押す	

ヒント：これらのジェスチャの図を見るには、RGS Receiver 設定で、**[Gestures]** (ジェスチャ) パネル→**[See gestures tutorial]** (ジェスチャのチュートリアルを見る) の順に選択します。


注記：仮想マウスを有効にすると、一部のジェスチャが無効になります。

Wacom ペンの使用 (Linux)

Linux で入力に Wacom ペンを使用するには、適切な Wacom ドライバーを送信側コンピューターおよび受信側コンピューターの両方にインストールする必要があります。HP ThinPro の場合、Wacom ドライバーは RGS インストールパッケージに含まれているか、オペレーティングシステムイメージにプリインストールされています。他のすべての Linux オペレーティングシステムでは、カーネルモジュールおよび X ドライバーをコンパイルして、送信側コンピューターおよび受信側コンピューターの両方にインストールする必要があります。ソースコードおよび手順については、<https://sourceforge.net/projects/linuxwacom/> (英語のみ) を参照してください。

Wacom ペン機能は、最初に送信側コンピューターおよび受信側コンピューターの両方でそれぞれテストする必要があります。HP ThinPro 以外の Linux オペレーティングシステムの場合は、圧力感知アプリケーションを使用して簡単にテストできます。マウスイベントではなくペンイベントが作成されていることを確認できます。HP ThinPro の場合は、Wacom ペンでカーソルが動くことを確認するだけです。

接続した Wacom ペンは、RGS Receiver ウィンドウ内でのみ使用できます。RGS インターフェイスおよびローカルデスクトップの操作にはマウスが必要です。

 **注記** : Wacom ペンは、コラボレーションセッションでのフロアの制御に対応しません。複数のユーザーが何らかの入力を同時に行おうとすると、望ましくない動作が発生することがあります。

リモート USB および Wacom ペンを同時に使用することはできません。リモート USB が有効になっているときに Wacom ペンの使用を有効にするには、HP ThinPro で [USB マネージャー] を起動し、USB プロトコルを **[Local]** (ローカル) に設定します。

ゲームモード (Windows のみ)

ゲームモードでは、カーソルを RGS Receiver ウィンドウ内にロックして、3D 環境での操作など、カーソルの相対的な動きを利用する機能を実行できます。ゲームモードが有効になっていない場合、そのような操作ではカーソルが不規則な動きをすることがあります。

ゲームモードの初期状態 (有効または無効) は [RGS Receiver Configuration] ツールを使用して設定できます。また、RGS Receiver が Setup Mode のときに **G** キーを押すと、ゲームモードのオン/オフを切り替えることができます。

サポートされているキーボードレイアウト

すべてのキーボードレイアウトおよび言語がサポートされています。


リモートオーディオ

リモートオーディオを使用すると、送信側コンピューターで生成されたオーディオを受信側コンピューターのスピーカーで再生できます。

ここでは、RGS 接続時にオーディオがたどるパスについて説明します。

1. 送信側コンピューターのソフトウェアがオーディオ出力を生成します。
2. オーディオ出力は物理または仮想オーディオデバイスを使用して RGS Sender にルーティングされます。
3. RGS Sender はオーディオ出力をエンコードし、各受信側コンピューターの RGS Receiver に転送します。
4. RGS Receiver はオーディオ出力をデコードし、オペレーティングシステムのオーディオミキサーに送信します。

5. オペレーティングシステムのオーディオミキサーは、初期設定のオーディオ再生デバイスにオーディオを送信します。
6. オーディオデバイスは、スピーカーなどの接続されているオーディオ周辺機器でオーディオ出力を再生します。

 **注記** : Windows の ToggleKeys サウンドなど、内蔵スピーカーを通じて再生されるサウンドは RGS によってキャプチャされません。

RGS Receiver のオーディオの設定については、[24 ページのオーディオ](#)を参照してください。

リモートオーディオのトラブルシューティングのヒントについては、[91 ページのリモートオーディオの問題](#)を参照してください。

リモートオーディオの使用（Windows ベースの送信側コンピューター）

Windows では、リモートオーディオは初期設定で有効になっています。送信側コンピューターにオーディオデバイスがある場合、RGS Sender のインストール時に検出されます。送信側コンピューターにオーディオデバイスがない場合（または RGS Sender のインストール前にすべてのオーディオデバイスを無効にした場合）は、RGS Sender のインストール時に HP Remote Audio 仮想オーディオデバイスもインストールされ、RGS によって代わりに使用されます。

リモートオーディオの使用（Linux ベースの送信側コンピューター）


Linux では、使用するオーディオキャプチャ方式に応じて、リモートオーディオに対して手動設定が必要になる場合があります。

送信側コンピューターにオーディオデバイスがある場合、RGS は 2 種類のオーディオキャプチャ方式をサポートします。

- PulseAudio : [53 ページの PulseAudio](#) を参照してください。
- Advanced Linux Sound Architecture (ALSA) : [54 ページの ALSA](#) を参照してください。

以下のプロパティは、使用されるオーディオキャプチャ方式を指定します（詳しくは、[79 ページのその他のグローバルプロパティ](#)を参照してください）。

```
Rgsender.Audio.Linux.RecorderApi
```

 **注記** : 一部のオーディオデバイスドライバーでは、アプリケーションによって生成されたオーディオをキャプチャできない場合があります。

PulseAudio

PulseAudio 用に設定されているすべてのオーディオデバイスを使用できます。PulseAudio には、ALSA 用のステレオミックス機能に似たソフトウェアインターフェイスが用意されています。PulseAudio には、ハードウェアのオーディオデバイスを使用できない場合にオーディオシステムが機能できるようにするダミーデバイスも用意されています。

PulseAudio を使用してオーディオをキャプチャすると、RGS Sender は自動的に送信側コンピューターの初期設定の再生デバイスのモニターを検出して接続しようとします。PulseAudio キャプチャデバイスの明示的な制御は、以下のプロパティを使用して実行できます（詳しくは、[79 ページのその他のグローバルプロパティ](#)を参照してください）。

```
Rgsender.Audio.Linux.DeviceName
```

このプロパティを設定すると、RGS Senderはこのプロパティで指定されたデバイスに接続しようとします。コマンド `pactl list` は、PulseAudioのデバイス名を確認するときに便利です。特定のデバイスからキャプチャするには、対応するPulseAudio モニターソース文字列を指定します (`alsa_output.pci-0000_00_1b.0.analog-stereo.monitor` など)。

PulseAudioを使用すると、システム内のオーディオデバイスを設定および制御できます。RGS セッション中に出力デバイスを変更すると、オーディオが聞こえなくなります。オーディオを復元するには、元のデバイスを再度選択するか、RGS Receiverのオーディオ設定を使用してオーディオストリームを停止して開始します。

ALSA

ALSA オーディオシステムを使用してオーディオをキャプチャする場合、アプリケーションによって生成されたオーディオを受信側コンピューターに送信するには、送信側コンピューターにオーディオデバイスを取り付ける必要があります。さらに、送信側コンピューターに取り付けられたオーディオデバイスには、すべてのオーディオ信号をミキシングするコントロールから録音する機能が備わっている必要があります。比較として、Windows コンピューターでは、このコントロールは一般に**【ステレオミックス】**と呼ばれます。ただし、Linuxはこのコントロールに対して、標準的な名前付け規則に従っていません。そのため、Linuxでの使用の適合性を判断するには、個々のオーディオデバイスを評価する必要があります。

Linuxのオーディオデバイスでは、オーディオコントロールの名前付け規則に一貫がありません。RGS Sender インストーラーは、オーディオをキャプチャできるようにするため、既知のオーディオデバイスの音量レベルを調整しようとします。ここでは、サポートされているオーディオデバイスの音量レベルを調整する方法について説明します。この情報は、RGS Sender インストーラーで現在サポートされていないオーディオデバイスの設定にも役立つ場合があります。

通常、音量レベルは音量調整用アプリケーションで調整できます。多くの場合、このアプリケーションはGnome パネルまたはシステム設定メニューにあります。音量調整用アプリケーションでは、使用可能な音量コントロールの一部が表示されていない場合があります。表示されていない音量コントロールにアクセスできるよう、音量調整用アプリケーションの設定の調整が必要になる場合があります。

`alsamixer` は音量調整用のコマンドラインツールです。このアプリケーションでは、GUIアプリケーションのように一部のオーディオコントロールが非表示になることはありません。ただし、直感的な操作はできません。キャプチャ音量の調整方法については詳しくは、`alsamixer` を実行してから **H** キーを押してください。

サポートされていないPCI オーディオデバイスでも、アプリケーションによって生成されたオーディオをキャプチャできることが確認されています。ただし、調整する必要があるコントロールの名前には、一貫がありません。**【PCM】**、**【キャプチャ】**、**【ミックス】**などのような名前が付いたコントロールの調整が必要になる場合があります。

録音するオーディオの発生元のデバイスは、以下のプロパティを使用して指定する必要があります。

```
Rgsender.Audio.Linux.DeviceName
```

以下のコマンドを実行します。

```
cat /proc/asound/devices
```

ここからオーディオデバイスの一覧を表示すると、以下のように表示されます。

```
0: [ 0 ] : control
1: : sequencer
8: [ 0- 0 ] : raw midi
16: [ 0- 0 ] : digital audio playback
```



```
17: [ 0- 1]: digital audio playback
24: [ 0- 0]: digital audio capture
32: [ 1] : control
33: : timer
48: [ 1- 0]: digital audio playback
56: [ 1- 0]: digital audio capture
```

capture という文字列を含むオーディオ デバイスのみを使用します (上の例ではデバイス番号 24 または 56)。角括弧内の最初の数字はサウンドカード、2 番目の数字はミキサー デバイスです。

以下の構文を使用して、オーディオキャプチャ デバイスを設定します。ここで、<c>はサウンドカード番号、<d>はミキサー デバイス番号です。

```
Rgsender.Audio.Linux.DeviceName=plughw:<c>,<d>
```

上の例を使用して、次のようにオーディオ デバイス番号 24 を指定できます。

```
Rgsender.Audio.Linux.DeviceName=plughw:0,0
```

または、次のようにオーディオ デバイス番号 56 を指定できます。

```
Rgsender.Audio.Linux.DeviceName=plughw:1.0
```

リモートクリップボード


リモートクリップボードを使用すると、受信側コンピューターと送信側コンピューターの間、または 2 台の異なる送信側コンピューターの間で、データをカット、コピー、およびペーストできます。

テキストのカットアンドペーストは、Windows、Linux、および Mac OS でサポートされています。画像のカットアンドペーストは、Windows ベースの送信側コンピューターと Windows ベースの受信側コンピューターの間でのみサポートされます。

Windows では、リモートクリップボードを RGS Receiver および RGS Sender の両方のインストール作業中に有効にする必要があります ([7 ページの「インストール」](#)を参照してください)。

Linux では、リモートクリップボードは初期設定でインストールされます。

また、Windows、Linux、および Mac OS で、リモートクリップボードを RGS Receiver 側の設定で有効にする必要があります ([22 ページの接続](#)を参照してください)。

 **ヒント** : RGS Receiver または RGS Sender のログレベルを `DEBUG` に設定すると、リモートクリップボード ログ情報が有効になります。

リモート USB (Windows/ThinPro のみ)


リモート USB を使用すると、受信側コンピューターに物理的に接続された USB デバイスを送信側コンピューターに仮想接続 (マウント) できます。これによって、送信側コンピューターは、物理的に接続されている場合と同じように USB デバイスに直接アクセスできます。

リモート USB のサポートについては、以下の一覧を参照してください。

- 送信側コンピューターは Windows ベースである必要があります。
- 受信側コンピューターは、Windows ベースまたは ThinPro ベースのどちらかである必要があります。
- 受信側コンピューターに物理的に接続された USB デバイスは、単一の送信側コンピューターにまとめて接続できます。デバイスを複数の送信側コンピューター間で分けたり、複数の送信側コンピューターにまとめて接続したりすることはできません。
- RGS では 4 種類の USB データ転送方式 (バルク、アイソクロナス、インタラプト、およびコントロール) がすべてサポートされています。
- USB 1.x または 2.x 標準に準拠している USB デバイスであれば、動作するはずですが、タイミングの影響を受けやすい Web カメラなどのデバイスでは、パフォーマンスが低下したり、まったく動作しなかったりする場合があります。RGS で使用するすべての USB デバイスを十分にテストすることをおすすめします。
- USB 1.x デバイスおよび USB 2.x デバイスは USB 3.x ポートでサポートされていますが、USB 3.x デバイスは RGS ではサポートされていません。
- ファイルのコピーでは、USB プロトコルの上層にあるネットワーク プロトコルで追加のオーバーヘッドが発生するため、時間が長くなる場合があります。

個々の USB デバイスのリモート接続動作の設定 (Windows のみ)

個々の USB デバイスのリモート接続動作を、インストール中に全体に設定した動作から変更することができます。

 **重要** : この設定には、Windows レジストリの変更が必要です。レジストリの変更は最大限の注意を払って行う必要があります。変更を行う前に必ずレジストリのバックアップをとってください。

USB デバイスのリモート接続動作を設定するには、以下の操作を行います。

1. USB デバイスのベンダー ID およびデバイス ID を確認します ([58 ページの USB デバイス情報の特定 \(Windows\)](#) を参照してください)。


2. [レジストリ エディター]を開き、以下のレジストリ キーを作成します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\hprpusbh\Parameters\Device
```

3. 以下のレジストリ キーを作成します。

```
HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\hprpusbh\Parameters\Device VID_VendorID&PID_ProductID
```

4. 作成したキーに、Mode という名前の文字列値を作成します。
5. Mode の値を auto、local、または remote に設定します。


 **注記** : auto に設定した場合、USB デバイスは、RGS 接続の開始時および終了時にマウント先がそれぞれ送信側コンピューターおよび受信側コンピューターになるように切り替えます。
remote に設定した場合、RGS セッションの終了後に受信側コンピューターから USB デバイスを物理的に取り外し、その USB デバイスが受信側コンピューターで使用可能になるように USB デバイスを接続しなおす必要があります。

USB マイク

(受信側コンピューターの) リモート USB ドライバーでは、オーディオデバイスやビデオデバイスなどから生成されるストリーミングデータでよく使用される、USB アイソクロナスデータ型がサポートされます。これによって、他の USB デバイスと同じように、一部のアイソクロナス USB マイクに送信側コンピューターから直接アクセスできるようになります。

USB マイクを送信側コンピューターにリモートで接続する場合、以下のどちらかの [Remote USB Configuration] 設定を選択できます。

- **[USB devices are Remote]** (USB デバイスはリモート) : これを選択した場合は、送信側コンピューターからいつでも USB マイクにアクセスできます。
- **[USB devices are Local/Remote]** (USB デバイスはローカルおよびリモート) : これを選択した場合は、RGS 接続が確立されたときに対する受信側コンピューターへのマイクの接続のタイミングによって、送信側コンピューターから USB マイクにアクセスできる方法が決まります。
 - RGS 接続の確立後にマイクを受信側コンピューターに接続すると、マイクはリモートデバイスのみとなり、送信側コンピューターから直接アクセス可能となります。

 **ヒント** : 送信側コンピューターで Windows の [録音デバイス] ダイアログを使用すると、ユーザーは初期設定の録音デバイス (マイク) を設定できます。


リモート USB のアクセス制御リスト

RGS Sender は、アクセス制御リスト (ACL) ファイルをサポートしています。ACL ファイルには、受信側の USB デバイスからのリモート USB 接続を許可するかどうかを指定するルールが含まれています。

各ルールの種類には、allow または deny のどちらかを指定できます。リモート USB 接続要求があるたびに、以下で説明するようにルールが評価されます。

- どれかのルールで USB 接続の拒否が指定されていると、その他のルールに関係なく接続が拒否されます。
- どれかのルールで USB 接続の許可が指定され、接続を拒否するルールがない場合は、接続が許可されます。
- 一致するルールがない場合は、接続が拒否されます。


ACL ファイルは、XML 形式で実装され、XML 要素を定義する XSD (XML スキーマ定義) ファイルが伴います。初期設定の ACL ファイル hprDefaultUsbAcl.xml および XSD ファイル hprUsbAcl.xsd はどちらも RGS Sender のインストールディレクトリにあります。

 **ヒント** : [RGS Sender Configuration] ツールを使用して別のファイルを指定できます ([71 ページの \[RGS Sender Configuration\] ツールの使用](#) を参照してください)。

初期設定の ACL ファイルには、すべての USB 接続を許可する以下の内容が含まれています。

```
<hprUsbAcl> <ruleset> <rule type="allow"> <name>Allow all USB devices (HP default)</name> </rule> </ruleset></hprUsbAcl>
```

ルールには、以下の表に示すフィルターを含めることができます。

 **ヒント**：フィルターの使用例については、hprUsbAcl.xsd を参照してください。

フィルター	説明
bDeviceClass	デバイスクラス
bDeviceSubclass	デバイスサブクラス
bDeviceProtocol	デバイス プロトコル
idVendor	ベンダー ID
idProduct	製品 ID
bcdDevice	デバイスのバージョン番号
manufacturer	製造元の名前
product	製品名
serialNumber	製品のシリアル番号
peerAddress	受信側コンピューターの IP アドレス
group	受信側コンピューターにログオンしているユーザーのドメイングループ

重要：manufacturer、product、および serialNumber の値は、製造元によって入力されていない場合があります。そのため、これらの値によるフィルタリングは信頼性が高くありません。

USB デバイス情報の特定 (Windows)

USB デバイス情報を特定するには、以下の操作を行います。

1. [デバイス マネージャー]を開き、[ユニバーサル シリアルバス コントローラー]で USB デバイスを見つけます。
2. USB デバイスをダブルクリックし、表示されたウィンドウで[詳細]タブを選択します。
3. ベンダー ID、製品 ID、クラス、サブクラス、およびプロトコルを特定します。

- a. ドロップダウン メニューから[ハードウェア ID]を選択します。ベンダー ID および製品 ID は以下の形式で表示されます。

```
USB\VID_<ベンダー ID>&PID_<製品 ID>
```

以下の例で、ベンダー ID は 1234、デバイス ID は 5678 です。

```
USB VID_1234&PID_5678
```

- b. ドロップダウン メニューから[互換性 ID]を選択します。クラス、サブクラス、およびプロトコルは数値コードで表され、以下の形式で表示されます。

```
USB\Class_<クラス コード>&SubClass_<サブクラス コード>&Prot_<プロトコル  
コード>
```

以下の例で、クラスコードは 08、サブクラスコードは 06、プロトコルコードは 50 です。

```
USB Class_08&SubClass_06&Prot_50
```

USB デバイス情報の特定 (Linux)

USB デバイス情報を特定するには、<http://sourceforge.net/projects/usbview/> (英語サイト) で入手可能な USBView という名前のオープンソースプログラムを使用します。

HP ThinPro でのリモート USB の有効化

送信側コンピューターが Windows ベースの場合は、リモート USB を HP ThinPro 上の RGS Receiver に対して有効にできます。


HP ThinPro でリモート USB を有効にするには、以下の操作を行います。

1. HP ThinPro で、[USB マネージャー]を開き、USB プロトコルを[RGS]に設定します。
2. Thin Client を再起動します。
3. RGS Receiver で[Enable remote USB] (リモート USB を有効にする) が有効になっていることを確認します。

Directory モード

Directory モードでは、1 台の受信側コンピューターを複数の送信側コンピューターに同時に接続できます。Directory モードで RGS Receiver を起動すると、ユーザー名およびコンピューター名を含むディレクトリファイルが検索されます。RGS Receiver は、このファイルを読み取り、指定された各送信側コンピューターに自動的に接続しようとします。

初期設定のディレクトリファイルは、RGS Receiver のインストールディレクトリにある `directory.txt` です。

 **注記** : このファイルには例が含まれています。例は#文字を使用してコメント扱いされています。

ディレクトリファイルの形式

通常、ディレクトリファイルは、グループ、部門、組織、会社などで共通のファイルです。このディレクトリファイルで、任意の数のユーザーを対象に送信側コンピューターを管理できます。複数の受信側コンピューターで共有できるよう、ディレクトリファイルはすぐにアクセスできるネットワークファイル共有またはマッピングされたドライブに保存することをおすすめします。

ディレクトリファイルは以下の形式を備えたユーザーごとのテキストファイルです。

<ドメイン名> <ユーザー名> <コンピューター名> [<コンピューター名> ...]

Windows ベースの送信側コンピューターのドメイン名は環境によって異なります。ドメインアカウントの場合、`worldwide\user1` という例では、Directory モードに使用されるドメイン名は `worldwide` です。

以下のディレクトリファイル例は、ドメインアカウント環境で `user1` および `user2` の送信側コンピューターを指定します。

```
worldwide user1 RC_1 RC_2 RC_3
```

```
worldwide user2 RC_4 RC_5 RC_6
```

ローカルアカウントの場合、`user1_computer\user1` という例では、Directory モードに使用されるドメイン名は `user1_computer` です。

以下のディレクトリファイル例は、ローカルアカウント環境で `user1` および `user2` の送信側コンピューターを指定します。

```
user1_computer user1 RC_1 RC_2 RC_3
user2_computer user2 RC_4 RC_5 RC_6
```

Linux ベースの送信側コンピューターの場合は、UNIX をドメイン名として使用します。


Linux ユーザーのディレクトリファイルを使用する場合、ドメイン名は該当しません。ドメイン名の代わりに、キーワード UNIX を指定します。たとえば、以下のように指定します。

```
UNIX user1 RC_1 RC_2 RC_3
```

ユーザー名にスペース文字が含まれる場合は、以下のように名前を二重引用符で囲むことができます。

```
domain1 "user1 user" RC_1 RC_2 RC_3
domain1 "user2 user" RC_4 RC_5 RC_6
```

Directory モードでの RGS Receiver の起動 (Windows)

 **注記** : 初めて Directory モードで接続する前に、まず、RGS が個別に各コンピューターに接続できるかどうかを確認してください。

▲ Windows 7 : **[スタート]** → **[すべてのプログラム]** → **[HP]** → **[HP Remote Graphics Software]** → **[HP RGS Receiver Directory Mode]** の順に選択します。

Windows 8.1 : スタート画面で **[HP RGS Receiver Directory Mode]** を選択します。

Windows 10 : **[スタート]** を選択し、「RGS」と入力し、検索結果から **[HP RGS Receiver Directory Mode]** を選択します。

または、コマンドラインで以下のどちらかを使用して RGS Receiver を Directory モードで起動できます。

```
rgreceiver.exe -directory <ファイル名>
rgreceiver.exe -directory
```

-directory の後ろでファイル名が指定されていると、RGS Receiver はそのファイルをディレクトリファイルとして使用します。ファイル名が指定されていない場合は、入力を求めるメッセージが表示されたときに、ディレクトリファイルのパスおよび名前を指定します。

Directory モードでは、RGS Receiver にディレクトリファイルの名前が表示されます。**[Change]** (変更) ボタンを使用すると、別のディレクトリファイルを指定できます。**[Connect All]** (すべて接続) ボタンは、ディレクトリファイルに記載された送信側コンピューターへの接続を確立するために使用します。

[Connect All] をクリックした後、送信側コンピューターごとに認証してログインする必要があります。

特定の RGS Receiver ウィンドウを前面に移動するには、以下の操作を行います。

1. ホットキー シーケンスを使用して Setup Mode を有効にします ([20 ページの Setup Mode](#) を参照してください)。
2. Tab キーを押して RGS Receiver ウィンドウ セレクターを開き、目的の RGS Receiver ウィンドウを選択します。

Directory モードでの RGS Receiver の起動 (Mac OS)

- ▲ コマンドラインで以下のコマンドのどちらかを実行します。

```
open -a "HP RGS Receiver" --args -directory Filename
```

```
open -a "HP RGS Receiver" --args -directory
```

-directory の後ろでファイル名が指定されていると、RGS Receiver はそのファイルをディレクトリファイルとして使用します。ファイル名が指定されていない場合は、入力を求めるメッセージが表示されたときに、ディレクトリファイルのパスおよび名前を指定します。


8 構成ツールおよびプロパティ

Windows および Linux では、RGS Receiver および RGS Sender にはそれぞれ構成ツールが用意されており、一部の高度な RGS 設定を変更できます。構成ツールのほとんどのオプションは、それぞれ `rgreceiverconfig` および `rgsenderconfig` ファイルにあるプロパティの1つに対応しています。

Mac OS では、プロパティは `/Library/Application Support/HP/rgreceiverconfig` ファイルを編集して手動で設定する必要があります。

この章では、以下のトピックについて説明します。

- [RGS Receiver の設定の優先順位](#)
- [\[RGS Receiver Configuration\]ツールの使用](#)
- [RGS Sender の設定の優先順位](#)
- [\[RGS Sender Configuration\]ツールの使用](#)
- [RGS のプロパティの手動設定](#)
- [その他のプロパティ](#)

 **注記：**構成ツールを使用して設定を変更する場合、[78 ページのプロパティの値を設定ファイルの中で設定する方法](#)で説明するプロセスは自動化されます。RGS Receiver のセッションごとのプロパティなど、対応するオプションがどちらの構成ツールにもないプロパティを追加または変更する場合を除いて、設定ファイルを手動で編集する必要はありません。

詳しくは、[78 ページの RGS のプロパティの手動設定](#)および[79 ページのその他のプロパティ](#)を参照してください。

RGS Receiver の設定の優先順位

[RGS Receiver Configuration]ツールを使用して（または `rgreceiverconfig` ファイルのプロパティを手動で編集して）オプションの設定を変更した場合、新しい設定は最後に RGS Receiver を閉じたときに保持されていたそのオプションの設定より優先されます。ただし、コマンドラインまたは RGS Receiver 設定を使用して設定をさらに無効にできます（同じオプションを使用できる場合）。

以下の一覧の上位にある方法で構成された設定は、それより下位にある方法で構成された設定より優先されます（1 が最上位で、5 が最下位です）。

1. RGS Receiver で構成された設定
2. コマンドラインで構成された設定
3. [RGS Receiver Configuration]ツールを使用して（または `rgreceiverconfig` ファイルのプロパティを手動で編集して）構成された設定
4. 最後に RGS Receiver を閉じたときに保持された設定
5. 初期設定

[RGS Receiver Configuration]ツールの使用

[RGS Receiver Configuration]ツールを使用するには、以下の操作を行います。

1. RGS Receiver のインストールディレクトリに移動して、ツールを起動します。

- Windows では、以下の実行ファイルを実行します。

```
receiverConfigApp.exe
```


- Linux では、以下のコマンドを実行します。

```
./receiverconfigapp.sh
```

2. 必要に応じて、オプションを設定します。

 **注記**：各オプションについては、以降のセクションの表を参照してください。

3. **[Save]** (保存) を選択して、変更を保存します。

 **ヒント**：[RGS Receiver Configuration]のすべての設定を初期設定に戻すには、RGS Receiver が実行中でないことを確認し、[RGS Receiver Configuration]ツールの左下隅にある**[Restore to default]** (初期設定に戻す) を選択します。または、RGS Receiver をアンインストールして再インストールすることにより、すべての設定が初期設定に戻ります。

全般

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの**[General]**パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgreceiverconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Enable borders on the Receiver window (Receiver ウィンドウの枠線を有効にする)	RGS Receiver ウィンドウの枠線を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) : <code>Rgreceiver.IsBordersEnabled</code>
Snap the Receiver window when close to the edge of the screen (画面の端に近づいたときに Receiver ウィンドウをスナップする)	有効にすると、RGS Receiver ウィンドウが画面の上端または左端に近づくときスナップします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) : <code>Rgreceiver.IsSnapEnabled</code>
Enable the Receiver window Toolbar (Receiver ウィンドウ ツールバーを有効にする)	RGS Receiver ツールバーを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) : <code>Rgreceiver.IsMenuBarEnabled</code>
Display a warning that disconnecting from RGS while logged in will not log the user out of the remote system (ログイン中に RGS との接続を切断してもユーザーがリモートシステムからログアウトされないことを知らせる警告を表示する)	有効にすると、RGS 接続を切断しても送信側コンピューターから自動的にログアウトされないことを知らせる警告を表示します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.IsDisconnectWarningEnabled</code>
Network disruption warning color (ネットワーク障害の警告色)	[Color] (色) コントロールおよび [Transparency] (透明度) コントロールを使用して、RGS Receiver がネットワーク障害を検出したときに RGS Receiver ウィンドウに重ねて表示する色を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.ConnectionWarningColor</code>

オプション	説明
Enable RGS to communicate mouse cursor snaps (RGS でマウスカーソルのスナップの送信を有効にする)	有効にすると、マウスカーソルの (ダイアログボックスの初期設定のボタンなどへの) スナップが RGS によって送信されます 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.IsMouseSyncEnabled</code>
Number of recent remote connections listed (最近のリモート接続数の一覧表示)	RGS Receiver に最近のリモート接続数の一覧表示を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.MaxSenderListSize</code>
File used for Directory Mode (Directory モードで使用するファイル)	Directory モードで使用するファイルを指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Directory</code>
Always prompt for the domain, username, and password when establishing a connection (接続を確立するときにドメイン、ユーザー名、およびパスワードの入力プロンプトを常に表示する)	有効にすると、接続を確立するときに、RGS Receiver がドメイン、ユーザー名、およびパスワードの入力プロンプトを表示します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) : <code>Rgreceiver.IsAlwaysPromptCredentialsEnabled</code>
Certificate Verification Failure Policy (証明書の検証失敗ポリシー)	送信側コンピューターの証明書の検証に失敗した場合の RGS Receiver の動作を指定します。【Accept】(許可する)、【Prompt to accept】(許可を要求する)、または【Deny】(拒否する)を選択します。 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Network.Certificate.VerificationPolicy={Accept Prompt to accept Deny}</code>
Allow user to modify Certificate Verification Failure Policy (証明書の検証失敗ポリシーの変更をユーザーに許可する)	【Certificate Verification Failure Policy】(証明書の検証失敗ポリシー) 設定をユーザーが変更できるようにします。 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Network.Certificate.VerificationPolicy.IsMutable={0 1}</code>
Allow user to set whether the Remote Clipboard is enabled (リモートクリップボードを有効にするかどうかの設定をユーザーに許可する)	有効にすると、ユーザーが、RGS Receiver で【Enable remote clipboard】(リモートクリップボードを有効にする) 設定を変更できるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Clipboard.IsMutable</code>
Enable Remote Clipboard by default (初期設定でリモートクリップボードを有効にする)	初期設定でリモートクリップボードを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Clipboard.IsEnabled</code>
Remote Clipboard filters (リモートクリップボードのフィルター)	重要 : このプロパティは上級ユーザー向けです。お使いのアプリケーションに必要なクリップボード形式をリモートクリップボードがサポートしていない場合にのみ、このプロパティの初期値を変更してください 【Selected filters】 (選択したフィルター) ウィンドウで、リモートクリップボードを使用して転送できるクリップボード形式を指定します。初期設定ではすべてのフィルターが選択されていますが、 【Available filters】 (使用可能なフィルター) ウィンドウにフィルターを移動させるとそのフィルターを削除できます

オプション	説明
	<p>注記 : クリップボード形式について詳しくは、http://msdn2.microsoft.com/en-us/library/ms649013.aspx (英語サイト) を参照してください</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows のみ) :</p> <p><code>Rgreceiver.Clipboard.FilterString</code></p>

イメージおよび表示

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの[Image and Display]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgreceiverconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Enable Advanced Video Compression on Sender (Sender で Advanced Video Compression を有効にする)	<p>初期設定で Advanced Video Compression を有効にします</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) :</p> <p><code>Rgreceiver.ImageCodec.IsH264Enabled</code></p>
Advanced Video Compression encoding (Advanced Video Compression のエンコード)	<p>Advanced Video Compression のエンコードを送信側コンピューターの GPU または CPU で処理するかどうかを設定します</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) :</p> <p><code>Rgreceiver.ImageCodec.UseGPU</code></p>
Maximum number of cores (コアの最大数)	<p>デコードに使用できる受信側コンピューターの CPU コアの最大数を設定します</p> <p>注記 : Advanced Video Compression が有効になっている場合、このオプションは使用できません</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p><code>Rgreceiver.Decoder.ThreadPoolSize</code></p>
Increase text rendering quality (テキスト表示画質を向上させる)	<p>テキストや線を多く含む画像の画質を向上させます</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p><code>Rgreceiver.ImageCodec.IsBoostEnabled</code></p>
Enable image quality slider (画質スライダーを有効にする)	<p>有効にすると、ユーザーが RGS Receiver または RGS Receiver ツールバーで画質スライダーを調整できるようになります</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p><code>Rgreceiver.ImageCodec.IsMutable</code></p>
Image Quality by default (初期設定の画質)	<p>初期設定の画質を設定します (0 ~ 100)</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p><code>Rgreceiver.ImageCodec.Quality</code></p>
Enable adaptive image quality by default (初期設定で画質の調整を有効にする)	<p>有効にすると、RGS は初期設定で [Adaptive image quality] (画質を調整する) 設定を使用します</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p><code>Rgreceiver.Experience.Mode</code></p>
Minimum image quality (画質の下限)	<p>[Minimum image quality] 設定の初期値を設定します</p>

オプション	説明
	設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Experience.MinImageQuality
Target update rate (目標更新率)	[Target update rate] 設定の初期値を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Experience.MinUpdateRate
Max number of image update requests (画像更新要求の最大数)	このプロパティは、RGS Sender が RGS Receiver からの応答を待たずにネットワーク経由で送信できる画像更新の最大数を設定することで、遅延時間の長いネットワーク環境でパフォーマンスを最適化します。この値を大きくするとフレームレートが向上する可能性があります。ネットワーク帯域幅の消費が増加する場合があります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.MaxImageUpdateRequests
Force full screen image updates (画面全体の画像更新を強制的に行う)	初期設定で RGS Receiver の [Force full screen image updates] オプションを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) : Rgreceiver.IsGlobalImageUpdateEnabled
Enable Match Receiver display resolution by default (受信側コンピューターの表示解像度に合わせる設定を初期設定で有効にする)	初期設定で RGS Receiver の [Match Receiver display resolution] (受信側コンピューターの表示解像度に合わせる) オプションを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.IsMatchReceiverResolutionEnabled
Enable Match Receiver display layout by default (受信側コンピューターの表示レイアウトに合わせる設定を初期設定で有効にする)	初期設定で RGS Receiver の [Match Receiver display layout] (受信側コンピューターの表示レイアウトに合わせる) オプションを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.IsMatchReceiverPhysicalDisplaysEnabled

オーディオ

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの**[Audio]**パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、rgreceiverconfig ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Allow user to modify audio settings (ユーザーにオーディオ設定の変更を許可する)	有効にすると、ユーザーが RGS Receiver でオーディオ設定を変更できるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Audio.IsMutable
Enable Remote Audio by default (初期設定でリモートオーディオを有効にする)	初期設定でリモートオーディオを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Audio.IsEnabled

オプション	説明
Enable stereo audio by default (初期設定でステレオオーディオを有効にする)	初期設定でステレオオーディオを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Audio.IsInStereo
Audio quality (音質)	初期設定の音質を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Audio.Quality
Only play audio from current Receiver window (現在の Receiver ウィンドウのオーディオだけを再生する)	有効にすると、フォーカスがある RGS Receiver ウィンドウのオーディオだけが再生されるようになります。無効にすると、すべての RGS Receiver ウィンドウのオーディオがまとめられます 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Audio.IsFollowsFocusEnabled

ネットワーク

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの[Network]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、rgreceiverconfig ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Allow user to modify network timeout settings (ユーザーにネットワークタイムアウト設定の変更を許可する)	有効にすると、ユーザーが RGS Receiver でネットワーク設定を変更できるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Network.Timeout.IsMutable
Enable the warning dialog for when the RGS connection is about to time out (RGS 接続がタイムアウトになるときに表される警告ダイアログを有効にする)	RGS Sender が見つからないために RGS 接続がタイムアウトになるときに表される警告ダイアログを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Network.Timeout.IsGuiEnabled
Error timeout (seconds) (エラー タイムアウト (秒))	RGS Receiver が RGS Sender を検出できなくなってから接続を終了するまで待機する時間を秒単位で設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Network.Timeout.Error
Warning timeout (seconds) (警告タイムアウト (秒))	RGS Receiver が RGS Sender を検出できなくなってからローカルユーザーに警告ダイアログを表示するまで待機する時間を秒単位で設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : Rgreceiver.Network.Timeout.Warning
Dialog timeout (seconds) (ダイアログタイムアウト (秒))	RGS Receiver が送信側コンピューターに表示されているダイアログ (認証ダイアログなど) への応答を待機する時間を秒単位で設定します 注記 : 応答がない場合、要求はキャンセルされます 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :

オプション	説明
	<code>Rgreceiver.Network.Timeout.Dialog</code>
RGS Sender network port (RGS Sender ネットワークポート)	RGS Receiver と RGS Sender の間の通信に使用するポートを指定します 重要: この設定は、RGS Sender のポート設定と一致させる必要があります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS): <code>Rgreceiver.Network.Port</code>

HP Velocity (Windows/Linux のみ)

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの[HP Velocity]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgreceiverconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

 **注記:** HP Velocity の設定について詳しくは、HP Velocity のドキュメントを参照してください。

オプション	説明
Enable HP Velocity (HP Velocity を有効にする)	HP Velocity を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Network.HPVelocity.Enabled</code>
Operational Mode (動作モード)	HP Velocity でネットワークパケットロスの修正を行う ([Active Mode] (アクティブモード)) か、または監視のみを行う ([Monitor Mode] (監視モード)) かを設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Network.HPVelocity.LiveUdpMode</code>
Target loss rate (10k packet sample) (目標損失率 (1万パケットのサンプル))	パケット保護の冗長性をデータフローに追加するまでに HP Velocity が許容するネットワークパケットロスの量を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Network.HPVelocity.LiveUdpTargetLossRate</code>
Level of congestion control (過密状態の制御レベル)	過密状態の制御レベルを設定します。 [Standard] (標準) では遅延時間の長いネットワークの影響を処理し、 [Friendly] (緩め) では標準の TCP などの過密状態制御アルゴリズムを使用します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Network.HPVelocity.LiveUdpCongestionControlAlgorithm</code>

USB (Windows/Linux のみ)

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの[USB]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgreceiverconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Allow user to modify Remote USB settings (ユーザーにリモート USB 設定の変更を許可する)	有効にすると、ユーザーが RGS Receiver でリモート USB 設定を変更できるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Usb.IsMutable</code>
Enable Remote USB by default (初期設定でリモート USB を有効にする)	初期設定でリモート USB を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Usb.IsEnabled</code>
USB active session (USB アクティブセッション)	Directory モードで USB デバイスが接続される送信側コンピューターを指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): <code>Rgreceiver.Usb.ActiveSession</code>

ホットキー

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの[Hotkeys]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgreceiverconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Allow user to modify hotkey settings (ユーザーにホットキー設定の変更を許可する)	有効にすると、ユーザーが RGS Receiver でホットキー設定を変更できるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS): <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsMutable</code>
Enable the Send Ctrl+Alt+End key sequence as Ctrl+Alt+Del option by default ([Ctrl + Alt + End キーシーケンスを Ctrl + Alt + Del として送信する]オプションを初期設定で有効にする)	初期設定で RGS Receiver の[Send CTRL-ALT-END key sequence as CTRL-ALT-DEL] (Ctrl + Alt + End キーシーケンスを Ctrl + Alt + Del として送信する) オプションを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS): <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsSendCtrlAltEndAsCtrlAltDeleteEnabled</code>
Process a Ctrl+Alt+Delete sequence on both the local and remote computers (ローカルコンピューターとリモートコンピューターの両方で Ctrl + Alt + Delete キーシーケンスを処理する)	有効にすると、送信側コンピューターおよび受信側コンピューターの両方で Ctrl + Alt + Delete キーシーケンスが処理されるようになります。無効にすると、受信側コンピューターのみで Ctrl + Alt + Delete キーシーケンスが処理されるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows のみ): <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsCtrlAltDeletePassThroughEnabled</code>
Enable the Setup Mode hotkey sequence (Setup Mode のホットキーシーケンスを有効にする)	Setup Mode のホットキーシーケンスを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS): <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsSetupModeEnabled</code>
Setup Mode sequence (Setup Mode のシーケンス)	Setup Mode のホットキーシーケンスを指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS): <code>Rgreceiver.Hotkeys.SetupModeSequence</code>

オプション	説明
Enable the Send First Key option by default (最初のキーを送信するオプションを初期設定で有効にする)	初期設定で RGS Receiver の【Send First Key】(最初のキーを送信する) オプションを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsSendFirstKeyInSequenceEnabled</code>
Enable the Key Repeat option by default (キーの繰り返しオプションを初期設定で有効にする)	初期設定で RGS Receiver の【Key Repeat】(キーの繰り返し) オプションを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsKeyRepeatEnabled</code>
Enable Game Mode (ゲームモードを有効にする)	ゲームモードを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ) : <code>Rgreceiver.Hotkeys.IsGameModeEnabled</code>

ログ

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの【Logging】パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgreceiverconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Allow user to modify logging settings (ユーザーにログ設定の変更を許可する)	有効にすると、ユーザーが RGS Receiver でログ設定を変更できるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Log.IsMutable</code>
Enable RGS Receiver logging by default (初期設定で RGS Receiver のログを有効にする)	初期設定で RGS Receiver のログを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Log.IsFileLoggerEnabled</code>
Log Level (ログレベル)	ログに出力する情報の最下位レベルを設定します。指定したレベルおよびそれより重大なレベルが RGS Receiver のログファイルに記録されます 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Log.Level</code>
Log file path (ログファイルのパス)	RGS Receiver のログファイルのパスを指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Log.FileName</code>
Max logfile size (KB) (最大ログファイルサイズ (KB))	RGS Receiver のログファイルの最大サイズをキロバイト (KB) 単位で指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) : <code>Rgreceiver.Log.MaxFileSize</code>

アクティベーション (Windows/Linux のみ)

以下の表では、[RGS Receiver Configuration]ツールの[Activation]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、rgreceiverconfig ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Enable activation to the HP activation server (HP のアクティベーション サーバーへのアクティベーションを有効にする)	RGS Advanced Features を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): Rgreceiver.Registration.IsEnabled
Use a proxy server when activating RGS Advanced Features (RGS Advanced Features のアクティベーションを行うときにプロキシサーバーを使用する)	RGS Advanced Features のアクティベーションを行うためのプロキシサーバーの使用を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): Rgreceiver.Network.ProxyEnabled
Proxy server address (プロキシサーバーアドレス)	RGS Advanced Features のアクティベーションに使用するプロキシサーバーのアドレスを指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): Rgreceiver.Network.ProxyAddress
Proxy port	RGS Advanced Features のアクティベーションに使用するプロキシサーバーのポートを指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux のみ): Rgreceiver.Network.ProxyPort

RGS Sender の設定の優先順位

RGS Sender で初期設定をオーバーライドするには、以下の操作を行います。

- ▲ [RGS Sender Configuration]ツールを使用するか、または rgsenderconfig ファイルのプロパティを手動で編集します。

[RGS Sender Configuration]ツールの使用

[RGS Sender Configuration]ツールを使用するには、以下の操作を行います。

1. RGS Sender のインストールディレクトリに移動して、ツールを起動します。

- Windows では、以下の実行ファイルを実行します。

```
senderConfigApp.exe
```


- Linux では、以下のコマンドを実行します。


```
./senderconfigapp.sh
```

2. 必要に応じて、オプションを設定します。

 **注記**：各オプションについては、以降のセクションの表を参照してください。

3. **[Save]** (保存) を選択して、変更を保存します。

 **ヒント** : [RGS Sender Configuration]のすべての設定を初期設定に戻すには、RGS Sender サービスが停止していることを確認し、[RGS Sender Configuration]ツールの左下隅にある**[Restore to default]** (初期設定に戻す) を選択します。または、RGS Sender をアンインストールして再インストールすることにより、すべての設定が初期設定に戻ります。

 **注記** : 送信側コンピューターの認証の設定はコマンドラインから変更することもできます。このツールをコマンドライン引数とともに使用する場合、ツールの GUI は表示されません。詳しくは、[72 ページの認証 \(Windows のみ\)](#) を参照してください。

全般

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの**[General]**パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgsenderconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
End the RGS session and disconnect all collaborators when the primary user logs out (プライマリユーザーがログアウトするときに RGS セッションを終了してすべてのコラボレーターを切断する)	有効にすると、プライマリユーザーがログアウトしたときに、RGS Sender が RGS 接続を終了し、すべてのコラボレーターを切断します 注記 : Linux では、プライマリユーザーがログアウトすると、RGS 接続は常に終了します。 設定ファイルのプロパティ (Windows のみ) : <code>Rgsender.IsDisconnectOnLogoutEnabled</code>
Enable session reconnection after logout or fast user switching. (ログアウトまたはユーザーの簡易切り替え後のセッション再接続を有効にする)	ログアウトまたはユーザーの簡易切り替え後のセッションの再接続を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows のみ) : <code>Rgsender.IsReconnectOnConsoleDisconnectEnabled</code>
Enable monitor blanking on Sender when a remote user connects (リモートユーザーが接続したときに送信側コンピューターでモニターブランキングを有効にする)	有効にすると、リモートユーザーが接続したときに、送信側コンピューターの画面に何も表示されなくなり、キーボードおよびマウスが無効になります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.IsBlankScreenAndBlockInputEnabled</code>
Enable Remote Audio (リモートオーディオを有効にする)	リモートオーディオを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Audio.IsEnabled</code>
Enable Remote Clipboard (リモートクリップボードを有効にする)	リモートクリップボードを有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Clipboard.IsEnabled</code>

認証 (Windows のみ)

[RGS Sender Configuration]ツールの**[Authentication]**パネルを使用して、標準認証、Easy Login、またはシングルサインオンを選択できます。

 **注記** : このパネルは、以前に Windows の RGS Sender に含まれていた[RGS Admin]ツールに代わるものです。

☞ **ヒント**：認証の設定はコマンドラインから変更することもできます。以下のコマンドがサポートされています。

標準認証を有効にする：`senderConfigApp.exe -enableStandardLogin`

シングルサインオンを有効にする：`senderConfigApp.exe -enableSSO`

Easy Login を有効にする：`senderConfigApp.exe -enableEasyLogin`

現在選択されている方法を表示する：`senderConfigApp.exe -status`

使用状況のメッセージを表示する：`senderConfigApp.exe -h`

イメージおよび表示

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの[Image and Display]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgsenderconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Preferred display methods (優先される表示方法)	<p>画像の変更を検出する方法の順序を設定します。最初の方法がシステムで現在サポートされていない場合は、一覧で次に指定された方法が試行されます。使用可能な方法は以下のとおりです</p> <ul style="list-style-type: none">GPU：GPU ハードウェアを使用して、1つの全画面を前の全画面とすばやく比較しますChangeList：Windows では RGS ミラードライバー、Linux では RGS X Sever 拡張機能を使用して、表示の変更を検出しますComparitron：システムの CPU を使用して、1つの全画面を前の全画面と比較します <p>注記：Advanced Video Compression が有効になっている場合、このオプションには効果がありません</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux)：</p> <code>Rgsender.PreferredDisplayMethods</code>
Maximum number of cores (コアの最大数)	<p>エンコードに使用できる送信側コンピューターの CPU コアの最大数を設定します</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux)：</p> <code>Rgsender.Encoder.ThreadPoolSize</code>
Maximum image update rate (最大画像更新率)	<p>1秒あたりの画像更新数の最大値を設定します。0に設定すると、更新数は無制限になります</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux)：</p> <code>Rgsender.MaxImageUpdateRate</code>
Image codec (画像コーデック)	<p>転送されるすべての画像データで使用するコーデックの順序を設定します。最初のコーデックがシステムで現在サポートされていない場合は、一覧で次に指定されたコーデックが試行されます。使用可能なコーデックは以下のとおりです</p> <ul style="list-style-type: none">HP3：このコーデックは RGS 5.0 以降の初期設定ですHP2：このコーデックは RGS 5.0 より前の初期設定ですJPEG-LS：このコーデックは数学的に損失がありません

オプション	説明
	<p>注記： Advanced Video Compression が有効になっている場合、このオプションには効果がありません</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) :</p> <pre>Rgsender.ImageCodec.Preferred</pre>

ネットワーク

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの[Network]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、rgsenderconfig ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Error timeout (seconds) (エラー タイムアウト (秒))	<p>RGS Sender が RGS Receiver を検出できなくなってから接続を終了するまで待機する時間を秒単位で設定します</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) :</p> <pre>Rgsender.Network.Timeout.Error</pre>
Listen for RGS connections on all network interfaces (すべてのネットワーク インターフェイス上で RGS 接続をリッスンする)	<p>有効にすると、RGS Sender はすべてのネットワーク インターフェイス上で接続をリッスンします</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) :</p> <pre>Rgsender.Network.IsListenOnAllInterfacesEnabled</pre>
Listen to a specific network interface (特定のネットワーク インターフェイスをリッスンする)	<p>RGS Sender が接続をリッスンするネットワーク インターフェイスを指定します</p> <p>各ネットワーク インターフェイスに対応する値を確認する方法については、88 ページの送信側コンピューターでのネットワーク インターフェイスのバインドを参照してください</p> <p>注記： [Listen for RGS connections on all network interfaces] (すべてのネットワーク インターフェイス上で RGS 接続をリッスンする) オプションが有効になっている場合、このオプションは使用できません</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) :</p> <pre>Rgsender.Network.Interface.<n>.IsEnabled</pre> <p>注記： 手動でプロパティを設定する場合は、<n>をネットワーク インターフェイスの番号に置き換えます</p>
Listen to a specific range of IP addresses (特定の範囲の IP アドレスをリッスンする)	<p>RGS Sender が接続をリッスンする IP アドレスの範囲を指定します。ネットワーク インターフェイスが[Listen to a specific network interface] (特定のネットワーク インターフェイスをリッスンする) オプションによって有効になっていて、その IP アドレスが指定された範囲内にある必要があります</p> <p>注記： [Listen for RGS connections on all network interfaces] (すべてのネットワーク インターフェイス上で RGS 接続をリッスンする) オプションが有効になっている場合、このオプションは使用できません</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) :</p>

オプション	説明
	<code>Rgsender.Network.AllowIpAddressSubnet</code>
RGS Sender network port (RGS Sender ネットワークポート)	RGS Sender と RGS Receiver の間の通信に使用するポートを指定します 重要: この設定は、RGS Receiver のポート設定と一致させる必要があります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Network.Port</code>

HP Velocity

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの[HP Velocity]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgsenderconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

 **注記:** HP Velocity の設定について詳しくは、HP Velocity のドキュメントを参照してください。

オプション	説明
Enable HP Velocity (HP Velocity を有効にする)	HP Velocity を有効にします 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Network.HPVelocity.Enabled</code>
Operational Mode (動作モード)	HP Velocity でネットワーク パケット ロスの修正を行う ([Active Mode] (アクティブモード)) か、または監視のみを行う ([Monitor Mode] (監視モード)) を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Network.HPVelocity.LiveUdpMode</code>
Target loss rate (10k packet sample) (目標損失率 (1万パケットのサンプル))	パケット保護の冗長性をデータ フローに追加するまでに HP Velocity が許容するネットワーク パケット ロスの量を設定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Network.HPVelocity.LiveUdpTargetLossRate</code>
Level of congestion control (過密状態の制御レベル)	過密状態の制御レベルを設定します。 [Standard] (標準) では遅延時間の長いネットワークの影響を処理し、 [Friendly] (緩め) では標準の TCP などの過密状態制御アルゴリズムを使用します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : <code>Rgsender.Network.HPVelocity.LiveUdpCongestionControlAlgorithm</code>

USB

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの[USB]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、`rgsenderconfig` ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
ACL file name (XML) (ACL ファイル名 (XML))	リモート USB アクセス制御リスト (ACL) を実装する XML ファイルの名前を指定します

オプション	説明
	設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : Rgsender.Usb.Acl.RulesetPath
ACL schema file (XSD) (ACL スキーマファイル (XSD))	リモート USB の XML ファイルに付属するスキーマファイルの名前を指定します 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : Rgsender.Usb.Acl.SchemaPath
Amount of time that the RGS Sender will wait before disconnecting all USB devices if the USB ACL file becomes inaccessible (milliseconds) (USB ACL ファイルがアクセスできなくなってから RGS Sender がすべての USB デバイスを切断するまで待機する時間 (ミリ秒))	USB ACL ファイルが消えたりアクセスできなくなったりしてから RGS Sender がすべての USB デバイスを切断するまで待機する時間をミリ秒単位で設定します 注記 : タイムアウトが時間切れになる前にファイルが戻ると、USB デバイスは切断されません 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : Rgsender.Usb.Acl.RulesetErrorTimeout

コラボレーション

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの[**Collaboration**]パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、rgsenderconfig ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Display list of users connected to the remote computer (リモートコンピューターに接続しているユーザーの一覧を表示する)	コラボレーション通知ダイアログを有効にします 重要 : 通常、このオプションは有効のままにしてください。無効にすると、コラボレーションセッションの参加者がリモートユーザーにもローカルユーザーにも通知されません。送信側コンピューターのモニターをプランキングできない場合に表示される警告ダイアログも表示されなくなります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : Rgsender.IsCollaborationNotificationEnabled
Automatically give permission for authorized collaborators to join the session (認証されたコラボレーターにセッションに参加するアクセス権を自動的に付与する)	有効にすると、コラボレーターは、プライマリユーザーによって認証されなくても常に受け入れられるようになります 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : Rgsender.Collaboration.AlwaysAcceptCollaborators
Collaboration request timeout (milliseconds) (コラボレーション要求タイムアウト (ミリ秒))	コラボレーション認証ダイアログが表示されてから要求が自動的に拒否されるまでの時間の長さをミリ秒単位で設定します 注記 : コラボレーションを行うすべての受信側コンピューターで、値を Rgreceiver.Network.Timeout.Dialog 以下に設定します。詳しくは、 67 ページのネットワーク を参照してください 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) : Rgsender.CollabUI.Dialog.Timeout
Delay before another user can take floor control when active user stops giving input (アクティブユーザーが入力を停止したときに別のユーザーがフロア制御を獲得できるまでの遅延時間)	コラボレーションセッションでアクティブユーザーが入力を停止してから、他のユーザーがフロアの制御を獲得できるようになるまでの遅延時間をミリ秒単位で設定します。値は、500 ミリ秒 (0.5 秒) から 15000 ミリ秒 (15 秒) の範囲です 設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux) :

オプション	説明
	Rgsender.RequestFloorControlTime

ログ

以下の表では、[RGS Sender Configuration]ツールの**[Logging]**パネルで使用できるオプションについて説明します。参考のために、rgsenderconfig ファイルの対応するプロパティを記載します。

オプション	説明
Log Level (ログレベル)	<p>ログに出力する情報の最下位レベルを設定します。指定したレベルおよびそれより重大なレベルが RGS Sender のログ ファイルに記録されます</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p>Rgsender.Log.Level</p>
Log file path (ログファイルのパス)	<p>RGS Sender のログ ファイルのパスを指定します</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p>Rgsender.Log.Filename</p>
Max logfile size (KB) (最大ログファイルサイズ (KB))	<p>RGS Sender のログ ファイルの最大サイズを指定します (キロバイト単位)</p> <p>設定ファイルのプロパティ (Windows/Linux/Mac OS) :</p> <p>Rgsender.Log.MaxFileSize</p>

診断

[RGS Sender Configuration]ツールの**[Diagnostics]**パネルを使用して、リモート接続の障害になる可能性のある問題を検出できます。

証明書

[RGS Sender Configuration]ツールの**[Certificates]** (証明書) パネルでは、RGS Sender によって生成された自己署名証明書に関する情報が提供されます。

セクション	説明
File Location (ファイルの場所)	RGS Sender によって使用されている証明書のファイルの場所を識別します
Expiration (有効期限)	RGS Sender によって使用されている証明書の有効期限日を識別します
Expiration (指紋)	RGS Sender によって使用されている証明書の SHA256 の指紋を識別します。

RGS のプロパティの手動設定

プロパティの構文

以下の例は、RGS のプロパティの構文です。

```
Rgreceiver.Network.Timeout.Warning=10000
```


この例では、プロパティの名前は `Rgreceiver.Network.Timeout.Warning` で、プロパティの値は `10000` です。この設定は、RGS Receiver が、RGS Sender と通信できなくなったことを示す警告ダイアログを表示するまで `10000` ミリ秒（`10` 秒）待機することを指定しています。この設定は、RGS Receiver 設定の[Network]（ネットワーク）パネルと同じです。

プロパティには、以下の例のように空の値を設定することもできます。

```
Rgreceiver.Browser.Name=
```

値が空のプロパティは以下のように初期化されます。


- プロパティのデータ型が **string** の場合、値は空の文字列として設定されます。
- プロパティのデータ型が **int**、**int vector**、または **bool** の場合、値は `0` に設定されます。


 **重要**：プロパティ名のつづりが間違っても警告は出ませんが、そのプロパティは無効になります。設定ファイルまたはコマンドラインでプロパティを指定しても効果がないときは、プロパティ名のつづり（大文字と小文字の区別も含む）が正しいかどうかを確認してください。


プロパティの値を設定ファイルの中で設定する方法

RGS プロパティの値は設定ファイルで設定できます。Receiver の設定ファイルは `rgreceiverconfig` という名前です。Sender の設定ファイルは `rgsenderconfig` という名前です。Windows では、これらのファイルは RGS Receiver または RGS Sender のインストールディレクトリにあります。Linux では、これらのファイルは `/etc/opt/hpremote/rgreceiver` または `/etc/opt/hpremote/rgsender` にあります。Mac OS では、`rgreceiverconfig` ファイルが `Library/Application Support/HP/rgreceiver` にあります。

設定ファイルには、プロパティが 1 行に 1 つずつ記述されています。設定ファイルの中のプロパティはすべて最初は `#` 文字が付いてコメント扱いとなっています。設定ファイルの中でプロパティを設定するには、まず先頭の `#` 文字を削除してから値を指定します。RGS Receiver の場合は、設定ファイルでプロパティのコメントアウトを解除すると、RGS Receiver を閉じたときにプロパティの設定が保持されます。

 **重要**：RGS Receiver のプロパティが保持されると、もう一度設定ファイルでプロパティをコメントアウトしてもその値は初期設定にリセットされません。値を初期設定にリセットするには、設定ファイルでプロパティの設定を初期値に戻して、行をコメントアウトされていない状態にします。

 **注記**：1 つのプロパティを複数指定した場合には、最後のエントリが有効になります。

 **注記**：設定ファイルで設定されている RGS のプロパティは、コンピューターが再起動されるまで有効にならない場合があります。

コマンドラインでのプロパティ値の設定

Windows および Linux の RGS Receiver のプロパティ値、および Windows の RGS Sender のプロパティ値をコマンドラインで設定できます。この例については、[27 ページの RGS Receiver のコマンドラインオプション](#) および [28 ページの RGS Sender のコマンドラインオプション \(Windows\)](#) を参照してください。

 **注記** : セッションごとのプロパティ値は、コマンドラインでは設定できません。

その他のプロパティ

ここでは、構成ツール内に対応するオプションがなく、設定ファイルまたはコマンドラインでのみ設定できる RGS プロパティについて説明します。

その他のグローバル プロパティ

プロパティ	説明
<code>Rgreceiver.Smartcard.IsEnabled</code>	有効にすると、受信側コンピューターは、スマートカードリダイレクトがインストールされて有効になっている送信側コンピューターとの間でスマートカードリダイレクトを使用します
<code>Rgsender.Smartcard.IsEnabled</code>	有効にすると、スマートカードリダイレクトがインストールされている場合、受信側コンピューターがスマートカードリダイレクトを使用できます
<code>Rgreceiver.IsSendCtrlLeftMouseClickedAsRightMouseClickedEnabled</code>	注記 : Mac OS のみ 有効にすると、 Ctrl キーを押したままマウスの左ボタンをクリックしたとき、この組み合わせが右クリックに変換されて送信側コンピューターに送信されます 無効にすると、 Ctrl キーを押したままマウスの左ボタンを同時にクリックしたとき、この組み合わせが変換されずに送信側コンピューターに送信されます
<code>Rgreceiver.Experience.IsMutable</code>	有効にすると、ユーザーは RGS Receiver の[Experience] (エクスペリエンス)の見出しの下にある設定を変更できます
<code>Rgreceiver.Audio.Linux.DeviceName</code>	注記 : Linux のみ このプロパティで、使用するオーディオデバイスの名前を指定します
<code>Rgreceiver.Registration.ServerAddresses</code>	重要 : HP から指示がない限り、この設定は変更しないでください RGS Advanced Features のアクティベーションに使用する HP サーバーの IP アドレスを指定します


プロパティ	説明
<code>Rgsender.ConsoleLogonTimeout</code>	このプロパティでは、システム ログイン イベントが完了するまで待機する時間を秒単位で設定します。ログインがこの時間内に完了しない場合、送信側コンピューターはシャットダウンされます
<code>Rgsender.IsClassicEasyLogonEnabled</code>	Windows の場合、このプロパティによって複数のユーザーは、ログオンする前に、ロックされているデスクトップに接続できます。Linux の場合、このプロパティによって Easy Login が有効になります
<code>Rgsender.Audio.Linux.DeviceName</code>	注記 : Linux のみ このプロパティで、使用するオーディオデバイスの名前を指定します

プロパティ	説明
<code>Rgsender.Audio.Linux.RecorderApi</code>	<p>注記 : Linux のみ</p> <p>pulse に設定すると (初期設定)、オーディオは PulseAudio を使用してキャプチャされます。alsa に設定すると、オーディオは ALSA オーディオシステムを使用してキャプチャされます</p>
<code>Rgsender.Audio.Linux.IsVolumeMonitorEnabled</code>	<p>注記 : Linux のみ</p> <p>有効にすると、RGS Sender は送信側で音量の変更を追跡し、RGS Receiver はそれに応じて音量レベルを自動的に調整します</p>
<code>Rgsender.PreferredLicenseOrder</code>	<p>このプロパティは、RGS が各ライセンスの種類を検索するときに優先される順序を設定します</p>
<code>Rgsender.Compatibility.Displays.ConfigureVmwareDisplaysForBestPerformance</code>	<p>注記 : Windows ゲスト オペレーティングシステムを実行している VMware[®] のみ</p> <p>有効にすると、RGS 接続の開始時に VMware SVGA 3D ディスプレイが無効になります。使用可能な NVIDIA ディスプレイがあれば有効になり、GPU 表示方法が強制的に使用されます</p> <p>注記 : このプロパティが有効になっていると、VMware vSphere[®] コンソールを使用して VMware 仮想マシンにアクセスできません。この機能は VMware SVGA 3D ディスプレイを必要とするためです。RGS 接続の終了時に VMware SVGA 3D ディスプレイを再度有効にするには、プロパティ <code>Rgsender.Compatibility.Displays.ReEnableVmwareDisplaysOnRGSDisconnect</code> を使用します</p> <p>Windows からログアウトした場合にも、VMware SVGA 3D ディスプレイが再度有効になります。これにより、ユーザーがログオンしていないときに vSphere コンソールにアクセスできるようになります</p>
<code>Rgsender.Compatibility.Displays.ReEnableVmwareDisplaysOnRGSDisconnect</code>	<p>注記 : Windows ゲスト オペレーティングシステムを実行している VMware のみ</p> <p>有効にすると、RGS 接続の終了時に VMware SVGA 3D ディスプレイが再度有効になります。これにより、Windows からログアウトしなくても、vSphere コンソールを使用して VMware 仮想マシンにアクセスできるようになります</p> <p>注記 : RGS 接続が切断されている間に、Windows によってアプリケーションウィンドウが並べ替えられることがあるため、vSphere コンソールを使用しない場合はこの設定を無効にすることをおすすめします</p>
<code>Rgsender.Compatibility.Displays.AllowNvidiaResolutionMatching</code>	<p>注記 : NVIDIA グラフィックスを備えた Windows ベースの送信側コンピューターのみ</p>

プロパティ	説明
Rgsender.KerberosLogon	<p>有効にすると、RGS Sender は、初期設定の解像度の調整方法を試す前に NVIDIA の解像度の調整を試します</p> <p>注記： Linux のみ</p> <p>ログインに Kerberos RGS 認証チケットを使用できるようにします。ユーザー名を選択するか手動で入力する必要があります。可能な値は以下のとおりです</p> <p>Off：ログインに Kerberos チケットは使用されません</p> <p>On：ログインに Kerberos チケットが使用されます</p> <p>Persist：ログインに Kerberos チケットを使用できます。チケットは RGS 接続の存続期間中継続的に使用できます。デスクトップのロック解除など、その他の認証操作にチケットが使用される可能性があります</p>

セッションごとのプロパティ（RGS Receiver のみ）

RGS Receiver のセッションごとのプロパティでは、RGS セッションごとに設定を指定できます。セッションごとのプロパティは、Directory モードのみに適用されます。

 **注記：** セッションごとのプロパティを入力する場合は、<n>をセッションの番号に置き換えます。1 番目のセッションは 0、2 番目のセッションは 1、のようになります。

ウィンドウの配置およびサイズ プロパティ（セッションごと）

プロパティ	説明
Rgreceiver.Session.<n>.RemoteDisplayWindow.X	このプロパティで、セッション番号<n>の RGS Receiver ウィンドウの水平位置を設定します。これはメイン画面の左端から測った距離です。初期値は 0 です
Rgreceiver.Session.<n>.RemoteDisplayWindow.Y	このプロパティで、セッション番号<n>の RGS Receiver ウィンドウの垂直位置を設定します。これはメイン画面の上端から測った距離です。初期値は 0 です
Rgreceiver.Session.<n>.VirtualDisplay.IsPreferredResolutionEnabled	<p>1：セッション番号<n>の望ましい解像度プロパティを有効にします。送信側コンピューターが受信側コンピューターでの望ましい解像度設定を採用できない場合、受信側コンピューターに警告ダイアログが表示されます</p> <p>0：セッション番号<n>の望ましい解像度プロパティを無効にします（初期値）</p> <p>注記：セッションごとの望ましい解像度プロパティは、グローバルプロパティ Rgreceiver.IsMatchReceiverResolutionEnabled より優先されます</p>
Rgreceiver.Session.<n>.VirtualDisplay.PreferredResolutionHeight	このプロパティで、セッション番号<n>の望ましい縦の解像度を設定します

プロパティ	説明
<code>Rgreceiver.Session.<n>.VirtualDisplay.PreferredResolutionWidth</code>	このプロパティで、セッション番号<n>の望ましい横の解像度を設定します
<code>Rgsender.Compatibility.Displays.ForceEdidOnHeadless</code>	<p>注記: NVIDIA グラフィックスを備えた Windows ベースの送信側コンピューターのみ</p> <p>有効にすると、システムに物理的なディスプレイが接続されていないと判断された場合に、RGS Sender は EDID をロードしようとしています</p> <p>注記: Sender サービスが起動したときに、物理的なディスプレイが Sender に接続されていないことが必要です。それ以外の場合、システムはヘッドレスと見なされず、EDID はロードされません</p> <p>注記: プロパティが無効になり、RGS Sender サービスが再起動されるまで、この EDID はロードされたままになります</p>


クリップボードプロパティ (セッションごと)

プロパティ	説明
<code>Rgreceiver.Session.<n>.Clipboard.IsEnabled</code>	<p>1: セッション番号<n>のリモートクリップボードを有効にします (初期値)。この設定を有効にするには、グローバルプロパティ <code>Rgreceiver.Clipboard.IsEnabled</code> が有効になっている必要があります</p> <p>0: セッション番号<n>のリモートクリップボードを無効にします</p>

自動起動プロパティ (Windows のみ)

RGS Receiver の自動起動ファイルの拡張子は `.rgreceiver` です。 `rgreceiverconfig` と同じ構文を使用してプロパティ値を設定します (78 ページの [RGS のプロパティの手動設定](#) を参照してください)。

自動起動ファイルを開くと、RGS Receiver は自動的に起動し、ファイルの設定に従って、単一の送信側コンピューターへの接続を確立しようとしています。

 **注記:** 自動起動ファイルは、複数の送信側コンピューターへの RGS 接続の開始をサポートしていません。複数の送信側コンピューターへの接続については、59 ページの [Directory モード](#) を参照してください。

以下の表では、自動起動プロパティについて説明します。一度に自動起動できる接続は 1 つだけのため、セッション番号は常に 0 です。

プロパティ	説明
<code>Rgreceiver.Session.0.IsConnectOnStartup</code>	このプロパティが有効になっていると、RGS Receiver は、自動起動ファイルが開かれたときに接続を自動起動しようとしています
<code>Rgreceiver.Session.0.Hostname</code>	このプロパティは、自動起動接続のホスト名または IP アドレスを設定します

プロパティ	説明
Rgreceiver.Session.0.Username	このプロパティは、自動起動接続のユーザー名を UTF-8 でエンコードされた文字列として設定します
Rgreceiver.Session.0.Password	このプロパティは、自動起動接続のパスワードを UTF-8 でエンコードされた文字列として設定します
Rgreceiver.Session.0.PasswordFormat	<p>Encrypted: このパスワード形式は Windows でのみサポートされており、Windows の CryptProtectData コマンドを使用して暗号化されたパスワードを 16 進数の文字列で表します。詳しくは、http://msdn.microsoft.com/en-us/library/aa380261(VS.85).aspx (英語サイト) を参照してください</p> <p>Clear: このパスワード形式は、パスワードを暗号化されていないテキストで表します</p> <p>XOR: このパスワード形式はキー 129 で XOR 暗号化されたパスワードを 16 進数の文字列で表します</p>

自動起動ファイルを使用するときには、[RGS Receiver Configuration]ツール（および rgreceiverconfig ファイル）からの設定が無視されるため、目的のプロパティ設定を自動起動ファイルに追加する必要があります。例については、以下を参照してください。

```
Rgreceiver.Session.0.IsConnectOnStartup=1
Rgreceiver.Session.0.Hostname=192.168.0.47
Rgreceiver.Session.0.Username=MyUserName
Rgreceiver.Session.0.Password=MyPassword
Rgreceiver.Session.0.PasswordFormat=Encrypted
Rgreceiver.Network.Timeout.Error=60000
Rgreceiver.Network.Timeout.Warning=4000
Rgreceiver.Network.Timeout.Dialog=30000
Rgreceiver.IsBordersEnabled=0
```

9 パフォーマンスの最適化

全般

以下の方法は、すべてのオペレーティングシステムに適用できます。

- HP Velocity を有効にします（詳しくは、[38 ページの HP Velocity \(Windows/Linux のみ\)](#) を参照してください)。
- 送信側コンピューターのデスクトップの背景を無地に設定し、送信する必要がある画像データの量を削減します。
- 受信側コンピューターおよび送信側コンピューターの両方で、ディスプレイの深度を 32 ビット/ピクセルに設定します。
- 送信側コンピューターのディスプレイ解像度を下げます。
- [RGS Sender Configuration] ツールを使用して、[Maximum image update rate]（最大画像更新率）を 30 から 60 に上げます。
- RGS Receiver でリモートオーディオ品質設定を下げるか、必要ない場合はリモートオーディオを無効にします。

以下の方法は、Windows にのみ適用できます。

- [コントロールパネル] で Windows のシステムパフォーマンスの設定を調整します。**[パフォーマンスを優先する]** オプションを使用すると、RGS の帯域幅の要件を最小限に抑えられます。

ネットワーク

RGS を使用するには、低遅延のネットワークおよび適度に高速なネットワーク帯域幅が必要です。受信側コンピューターと送信側コンピューターとの間のネットワーク帯域幅、遅延、およびホップ数をテストし、測定するには、いくつかの方法を使用できます。

- ネットワーク遅延を測定するには、ping コマンドを使用します。
- ネットワーク遅延に加え、コンピューターに到達するためにかかるホップの数が報告されるようにするには、Traceroute (Linux) コマンドまたは tracert (Windows) コマンドを使用します。
- NTttcp ユーティリティ、ipref などのツールを使用します。NTttcp ユーティリティは、<https://gallery.technet.microsoft.com/NTttcp-Version-528-Now-f8b12769/> (英語説明文) から入手できます。

ネットワークのパフォーマンスを測定すると、改善が必要かどうかを判断できます。

ネットワーク インターフェイスは、ローカル ネットワーク上のネットワーク スイッチとの間でネットワーク速度の自動ネゴシエーションを行います。最新のネットワーク インターフェイスおよびスイッチとのネゴシエーションでは、最高速度が選択されるはずですが、ネットワークが最高スループットを提供できるように慎重に設計されていない限り、次善の速度が選択されます。

ネットワーク インターフェイスおよびスイッチが自動ネゴシエーションを正しく行うように設定されていれば、設定は自動ネゴシエーションのままかまいません。ネットワークを特定の速度で動作させる必要がある場合は、ネットワーク インターフェイスおよびスイッチの設定をハードコードできます。ただし、これらの設定を変更する場合には注意が必要です。ネットワーク インターフェイスおよびスイッチの設定が互いに補完しあうように設定しないと、ネットワークのパフォーマンスは低下します。

ネットワーク インターフェイスを設定して、Windows でネットワークを特定の速度で動作させるには、以下の操作を行います。

1. [コントロールパネル]で、[デバイス マネージャー]を選択します。
2. [ネットワーク アダプター]を展開します。
3. 設定するネットワーク アダプターを右クリックし、[プロパティ]を選択します。
4. [詳細設定]タブをクリックします。
5. プロパティの一覧で、リンク速度および全/半二重設定を制御するプロパティを探します。プロパティの名前は通常、[Speed & Duplex]や[Link Speed & Duplex]です (実際の名前と異なる場合があります)。
6. [値]ドロップダウンリストで、お使いのネットワークでサポートされている最高速度を選択します (必ず、その速度の[Full Duplex] (全二重) 版を選択してください)。

ネットワーク インターフェイスを設定して、Linux でネットワークを特定の速度で動作させるには、以下の操作を行います。

- ▲ root としてログインし、以下の例のようなコマンドを使用します。この例は、ネットワーク インターフェイスを全二重モードで動作する 100 Mb/sec 接続として設定します。

```
$ /usr/local/sbin/ethtool -s eth0 speed 100 duplex full autoneg off
```

ネットワーク パフォーマンスに満足できない場合は、ネットワーク スイッチ上のログ ファイルを確認します (受信側コンピューターがネットワーク スイッチに接続されている場合)。スイッチ ポートで多数のエラーが発生している場合は、コンピューターまたはネットワークが正しく設定されていません。管理者に連絡して、コンピューターおよびネットワークの設定を最適化してください。

10 トラブルシューティング

接続が失敗した場合

ここでは、RGS 接続の失敗の原因となる最も一般的な問題について説明します。

受信側コンピューターのチェックリスト


以下のチェックリストを使用して、受信側から接続失敗のトラブルシューティングを行います。

1. 送信側コンピューターの正しいホスト名または IP アドレスを入力していることを確認します。
RGS Sender がリッスンするポートを初期設定の 42966 から変更した場合は、以下の例のように、ホスト名または IP アドレスとともにポート番号を指定する必要があります。

```
MyHostName:12345  
192.168.0.10:12345
```
2. 受信側コンピューターが送信側コンピューターと同じネットワークに接続していることを確認します。
3. 受信側コンピューターが送信側コンピューターに ping できることを確認します。
4. 受信側コンピューターがファイアウォールの背後にある場合は、ファイアウォールが NAT (Network Address Translation) をサポートしていることを確認します。

送信側コンピューターのチェックリスト

以下のチェックリストを使用して、送信側から接続失敗のトラブルシューティングを行います。

 **注記：**このチェックリストでの確認を完了した後、RGS 接続を再び試す前に、必ず送信側コンピューターからログアウトしてください。

1. 受信側コンピューターからアクセスしようとしているユーザー アカウントの資格情報を確認します。アカウントパスワードを空白にすることはできません。
2. 送信側コンピューターで RGS Sender が起動していることを確認します（詳しくは、[28 ページの「RGS Sender の概要」](#)を参照してください）。
3. [RGS Sender Configuration] ツールの [Diagnostics] (診断) タブですべてのテストに合格することを確認します。
4. 送信側コンピューターがファイアウォールの背後にある場合は、ファイアウォールが NAT (Network Address Translation) およびポートフォワーディングをサポートしていることを確認します。
5. RGS Sender のネットワーク インターフェイスのバインドをすべてのネットワーク インターフェイスをリッスンするという初期設定から変更した場合は、送信側コンピューターが正しいネットワーク インターフェイスをリッスンしていることを確認します（詳しくは、[88 ページの送信側コンピューターでのネットワーク インターフェイスのバインド](#)を参照してください）。
6. (Windows のみ)

[コマンド プロンプト]で以下のように入力することによって、送信側コンピューターが自動プライベート IP アドレス指定 (APIPA) を使用していないことを確認します。


```
netstat -n -a
```

RGS Sender リスニングポート（初期設定で 42966）に関連付けられている IP アドレスがプライベートであれば、APIPA が原因である可能性があります。APIPA を無効にする方法については、<http://support.microsoft.com/kb/220874/> を参照してください。


7. (Linux のみ)

送信側コンピューターがコマンドラインで起動された X デスクトップを使用していないことを確認します。外部接続の失敗は、PAM セッション管理とコンソールに対するアクセス許可が不完全なことに起因する場合があります。ログイン管理は、`init` ランレベル 5 で起動されたディスプレイ マネージャーによって処理される必要があります。

RGS Sender は、以下のディスプレイ マネージャーをネイティブにサポートしています。

- GNOME ディスプレイ マネージャー (GDM)
- KDE ディスプレイ マネージャー (KDM)
- LightDM

送信側システムが別の PAM ベースのディスプレイ マネージャーを使用している場合は、以下の方法を試すこともできます。

 **注記：** この設定は、一部のディスプレイ マネージャーでは機能しない可能性があります。

- a. `/etc/pam.d/` で、ディスプレイ マネージャーの構成ファイルを見つけます。
- b. 各ファイルの末尾に以下の行を追加します (各ファイルを変更する前にバックアップを作成してください)。

```
session optional pam_rg.so
```

- c. 送信側システムを再起動します。

Kerberos

Kerberos 認証は、Windows の受信側コンピューターでのみ使用可能です。受信側コンピューターは、Windows または Linux の送信側コンピューターと同じ Windows ドメインに接続する必要があります。Kerberos 認証では、RGS Receiver および RGS Sender のシステムクロックが同期している必要があります。クロックには一定の許容誤差があります。この許容誤差はドメインコントローラーのパラメーター設定によって異なります。送信側コンピューターでログインに Kerberos チケットを使用できるようにするには、`Rgsender.KerberosLogon` プロパティを設定し、ドメインコントローラーでコンピューターの委任を有効にする必要があります。一部のサービスでは、この機能が設定されていない場合があります。その他の PAM サービスは、`/etc/pam.d` で関連付けられた PAM サービスに `auth sufficient pam_rg.so` を追加することで、Kerberos チケットを使用して認証できる場合があります。これは、`password-auth` または `system-auth` が含まれた認証の行の前に追加する必要があります。

受信側コンピューターが必要なサービスチケットを取得するために、Linux の送信側コンピューターは IP アドレスではなくホスト名で識別する必要があります。受信側コンピューターでコマンドラインプログラム `klist` を実行することで、ホスト名 `hostname.example.com` を持つホストのサービスチケットを確認できます。このチケットは、サーバー名 `host/hostname.example.com` とともに一覧表示されます。

送信側コンピューターでのネットワークインターフェイスのバインド

RGS Sender は、初期設定で送信側コンピューターに存在するすべてのネットワークインターフェイスをリッスンするように設定されます。この動作が望ましくない場合、ネットワークインターフェイスのバインドを手動で再設定できます。

RGS Sender のネットワークインターフェイスのバインドを再設定するには、以下の 3 つの方法があります。

- RGS Sender にリッスンさせたくないネットワークインターフェイスを無効にし、送信側コンピューターを再起動します。これによって、RGS Sender は残りの有効なネットワークインターフェイスにバインドします。この方法を使用すると、他のネットワークインターフェイスを使用できなくなります。
- 目的のネットワークインターフェイスを RGS Sender によってリッスンされるインターフェイスとして手動で設定します。詳しくは、[88 ページの手動でのネットワークインターフェイスバインドの再設定](#)を参照してください。
- [RGS Sender Configuration]ツールを使用して、どのネットワークインターフェイスをリッスンするかを指定します。詳しくは、[89 ページの\[RGS Sender Configuration\]ツールを使用したネットワークインターフェイスバインドの再設定](#)を参照してください。

RGS 接続を確立するとき IP アドレスの代わりにホスト名を入力すると、正しくないネットワークインターフェイスの IP アドレスにホスト名が変換される場合があります。これは、DHCP および DNS サーバーの設定を含むさまざまな要因が原因となります。

ホスト名が、正しくないネットワークインターフェイスの IP アドレスに変換された場合は、以下のどれかの操作を行います。

- RGS 接続を確立するとき、ホスト名の代わりに RGS Sender が関連付けられる IP アドレスを入力します。
- ホスト名が正しい IP アドレスになるように、DHCP サーバーおよび DNS サーバーを再設定します。
- nslookup コマンドを使用して、ホスト名に対応する IP アドレスを調べます。次に、[88 ページの手動でのネットワークインターフェイスバインドの再設定](#)の手順に沿って操作し、対応するネットワークインターフェイスが接続一覧の先頭に表示されるように設定します。

手動でのネットワークインターフェイスバインドの再設定

送信側コンピューターがバインドするネットワークインターフェイスを手動で設定するには、以下の操作を行います。

1. [RGS Sender Configuration]ツールで**[Listen for RGS connections on all network interfaces]**(すべてのネットワークインターフェイス上で RGS 接続をリッスンする) オプションを無効にします。

 **注記** : 詳しくは、[71 ページの\[RGS Sender Configuration\]ツールの使用](#)を参照してください。

2. Windows の通知領域にあるネットワークアイコンをクリックして、**[ネットワークと共有センターを開く]**をクリックします。
3. 左側の枠内で、**[アダプターの設定の変更]**をクリックします。
4. Alt キーを押してメニューバーを表示し、**[詳細設定]**→**[詳細設定]**の順に選択します。
5. **[アダプターとバインド]**パネルで、**[接続]**ボックスの横にある矢印ボタンを使用して、目的のネットワークインターフェイスを一覧の先頭に移動します。

一覧の先頭にあるネットワークインターフェイスが、RGS Sender によってリッスンされるインターフェイスです。

[RGS Sender Configuration]ツールを使用したネットワーク インターフェイスバインドの再設定

[RGS Sender Configuration]ツールのオプションを設定する前に、RGS Sender にリッスンさせるネットワーク インターフェイスに対応する番号を調べる必要があります。調べるには、以下の操作を行います。

1. Windows の通知領域にあるネットワーク アイコンをクリックして、**[ネットワークと共有センターを開く]**をクリックします。
2. 左側の枠内で、**[アダプターの設定の変更]**をクリックします。
3. **Alt** キーを押してメニューバーを表示し、**[詳細設定]**→**[詳細設定]**の順に選択します。
4. **[アダプターとバインド]**パネルで、**[接続]**ボックスのネットワーク インターフェイスの一覧を調べます。

一覧の先頭にあるネットワーク インターフェイスに対応する番号が**[0]**、一覧の次のネットワーク インターフェイスの番号が**[1]**です。

目的のネットワーク インターフェイスに対応する番号を調べたら、以下の操作を行って、適切な RGS Sender 設定を構成します。

1. [RGS Sender Configuration]ツールで**[Listen for RGS connections on all network interfaces]**(すべてのネットワーク インターフェイス上で RGS 接続をリッスンする) オプションを無効にします。
2. [RGS Sender Configuration]ツールの**[Listen to a specific network interface]** (特定のネットワーク インターフェイスをリッスンする)オプションの値を目的のネットワーク インターフェイスの番号に設定します。

 **注記** : 詳しくは、71 ページの[\[RGS Sender Configuration\]ツールの使用](#)を参照してください。

ネットワーク タイムアウト

RGS Receiver および RGS Sender のネットワーク タイムアウト プロパティは、ネットワーク障害に対処するための方法です。TCP/IP は信頼性が高いですが、ネットワーク パケットが必ず送信されるという確証はありません。以下の問題が考えられます。

- 過度のネットワーク接続によって、ネットワークが過密状態になり、パケットが失われる
- 他のプロセスやタスクが CPU を使用しているため、TCP/IP ネットワーク スタックに配分できなくなる
- ネットワーク スイッチ、ルーター、ネットワーク インターフェイスに設定の間違いや誤作動が生じる

タイムアウト関連の問題および解決方法については、以下を参照してください。

RGS Receiver ウィンドウが何度も暗くなり、接続警告メッセージが表示される。

原因	解決方法
RGS Receiver と RGS Sender の間で頻繁にネットワーク障害が発生しています	警告メッセージがあまりに頻繁に表示される場合は、RGS Receiver の警告タイムアウト値を大きくします

RGS Receiver ウィンドウが暗くなり、RGS Receiver が切断されて接続エラーが表示されるが、すぐに再度接続できる。

原因	解決方法
ネットワーク障害が発生している時間の長さが RGS Receiver または RGS Sender のエラー タイムアウト値を超えました	RGS Receiver、RGS Sender、または両方のエラー タイムアウト値を大きくします

注記：この問題は、RGS Sender が予期しないで停止した場合にも起こることがあります

Linux ベースの送信側コンピューターに接続するとき、受信側コンピューターに PAM 認証ダイアログが表示される時間が短すぎて、資格情報を入力できない。

原因	解決方法
RGS Receiver のダイアログ タイムアウト値が小さすぎます	RGS Receiver のダイアログ タイムアウト値を大きくします

送信側コンピューターに接続するとき、認証ダイアログが表示される時間が短すぎて、ユーザーが応答できない。

原因	解決方法
RGS Sender のコラボレーション要求のタイムアウト値が小さすぎます	RGS Sender のコラボレーション要求のタイムアウト値を大きくします

RGS Receiver ウィンドウが更新されない。

原因	解決方法
ネットワーク障害が発生しましたが、RGS Receiver の警告およびエラー タイムアウト値の設定が高すぎるため、警告の表示や接続の終了が行われませんでした	RGS Receiver の警告およびエラー タイムアウト値を小さくします

RGS Receiver のエラー タイムアウト値を大きくしても効果がなく、引き続き RGS Receiver が切断される。

原因	解決方法
RGS Sender のエラー タイムアウト値が RGS Receiver のエラー タイムアウト値より小さく設定されています	RGS Sender のエラー タイムアウト値を、RGS Receiver のエラー タイムアウト値よりも大きくします

グラフィックスの問題 (Linux)

フルスクリーンの十字型カーソル

一部のソフトウェアで使用される大きな十字型カーソルは、受信側コンピューターで正しく表示されない場合があります。フルスクリーンの十字型カーソルを無効にするには、Xターミナルに以下のコマンドを入力します。

```
X11xprop -root -remove _SGI_CROSSHAIR_CURSOR
```

受信側コンピューター上でのガンマ補正

送信側コンピューターの3Dアプリケーションの色は、受信側コンピューターでは正しく表示されないことがあります。これは受信側コンピューターのモニターのガンマ特性と、送信側コンピューターのモニターのガンマ特性が一致していないために発生します。

ディスプレイのガンマ値を調整できるツールを使用すると、この問題を解決できます。ツールには、ディスプレイ全体のガンマ値を調整するものと、ウィンドウごとにガンマ値を補正するものがあります。RGS Receiver ウィンドウのみを調整できるウィンドウごとの補正ツールを使用した方が、最適な結果を得られます。

黒またはブランクの RGS Receiver ウィンドウ

送信側コンピューターが24ビットまたは32ビットの色数(グラフィックスアダプターによって異なる)より低く設定されていると、RGS Receiver ウィンドウに黒またはブランクのデスクトップセッションが表示される場合があります。色数を増やし、送信側コンピューターを再起動すると、通常は問題が解決します。

リモートオーディオの問題

オーディオ関連の問題および解決方法については、以下を参照してください。

RGS Receiver からオーディオが出力されない。

原因	解決方法
さまざまな原因があります	<ul style="list-style-type: none">● RGS Receiver 設定でリモートオーディオが有効になっていることを確認します● オペレーティングシステムによってオーディオが消音になっていないことを確認します● 受信側コンピューターのオーディオデバイスが動作していることを確認します

オーディオが中断される。

原因	解決方法
オーディオ品質設定が低帯域幅接続に対して高すぎます	<ul style="list-style-type: none">● オーディオ品質を低くします● ステレオオーディオを無効にします
RGS Sender プロセスの優先度が低すぎます	RGS Sender プロセスの優先度を上げます

オーディオによって連続的なネットワークトラフィックが発生する。

原因	解決方法
ノイズレベルが高すぎるため、RGS によってオーディオ信号として解釈されています	音量入力設定を下げるか、送信側コンピューターのラインインオーディオコネクタに接続されている外部デバイスを無効にします

送信側コンピューターまたは受信側コンピューターが複数のオーディオ デバイスを備えている場合に、音声がかえらない。

原因	解決方法
RGS が正しいオーディオ デバイスを使用していない	余分なオーディオ デバイスを無効にして、RGS が正しいデバイスを使用するようにします。

リモート USB の問題

以下の情報はリモート USB のトラブルシューティングのヒントです。

- RGS Receiver でリモート USB が有効になっていることを確認します。
- USB デバイスが受信側コンピューターに物理的に接続され、電源が供給されて、オンになっていることを確認します。
- USB デバイスが受信側コンピューターによって検出されることを確認します。
 - Windows : USB デバイスが[デバイス マネージャー]の一覧に表示されていることを確認します。
 - Linux : USB デバイスが `/proc/devices/usb_remote/devices` の一覧に含まれていることを確認します。受信側コンピューターによって USB デバイスが 1 つだけ認識されている場合、`devices` ファイルには、リモート USB デバイスを指す `192` というファイル記述子が 1 つだけ存在します。コマンド `cat 192` を使用してこのファイルをダンプすると、デバイスに関するデータが表示されます。複数のデバイスが接続されている場合は、`192` で始まる連番のファイル記述子が各デバイスに割り当てられます。
- 送信側コンピューターおよび受信側コンピューターの両方がリモート USB をサポートすることを確認します ([56 ページのリモート USB \(Windows/ThinPro のみ\)](#) を参照してください)。
- USB デバイスがサポートされていることを確認します ([56 ページのリモート USB \(Windows/ThinPro のみ\)](#) を参照してください)。
- RGS Receiver をアンインストールしてから再インストールしてください。再インストール時に、リモート USB が正しく設定されていることを確認します ([7 ページの RGS Receiver のインストール \(Windows\)](#) を参照してください)。
- RGS Sender をアンインストールしてから再インストールしてください。再インストール時に、リモート USB が有効にされることを確認します ([10 ページの RGS Sender のインストール \(Windows\)](#) を参照してください)。
- USB デバイスに必要なドライバーおよびソフトウェアが送信側コンピューターにインストールされ、使用可能になっていることを確認します。USB デバイスが機能するには、ほとんどの場合、製造元が提供するソフトウェアが必要です。通常、このソフトウェアは、USB デバイスをコンピューターに接続する前にインストールする必要があります。

スマートカードリダイレクトの問題

スマートカードリダイレクトのトラブルシューティングを行うときは、以下の点に注意してください。

- スマートカードが接続の両端で単独で動作することを確認します。
- スマートカードリーダー用およびスマートカードデバイス用のベンダー ドライバーがインストールされていることを確認します。
- プライマリユーザーのみがスマートカードを使用しようとしていることを確認します。
- 受信側コンピューターに接続されているアクティブなスマートカードが1つのみであることを確認します。仮想スマートカードはアクティブなスマートカードとして数えられます。
- RHEL 7 のスマートカード サービスが正常に起動しない場合は、`/usr/lib/systemd/system/pcscd.service` にある `pcscd` 起動スクリプトの変更が必要になる場合があります。スクリプトを編集するために開き、`ExecStart` オプションを以下のように変更します。

```
ExecStart=/usr/sbin/pcscd --foreground --auto-exit -c /etc/reader.conf.d/hpremotescr.conf
```

サーバー/ブレードでのマウスカーソルの問題 (Windows の送信側コンピューター)

Windows 8 以降では、物理的なポインター デバイスのないシステム (サーバーやブレードワークステーションなど) に **[VMouseSetup.exe]** をインストールする必要があります。[VMouseSetup.exe] によって仮想ポインター ドライバーがインストールされ、HP RGS はポインター デバイスのないシステムでもマウスカーソルを正しく表示できるようになります。[VMouseSetup.exe] は、Windows の送信側コンピューター用の RGS インストールパッケージに含まれています。

A RGS とリモート デスクトップ接続の切り替え（Windows のみ）

RGS セッションと Windows リモート デスクトップ接続セッションの両方で同じ資格情報を使用する場合、送信側コンピューターのリモート デスクトップからログアウトしないでこれらのセッションを切り替えることができます。他方のプログラムを使用して新しいセッションを開始すると、既存のセッションは終了します。

異なる資格情報を使用して、すでに RGS セッションを行っている送信側コンピューターとのリモート デスクトップ接続セッションを開始しようとする、リモート デスクトップ接続で、現在 RGS セッションを行っているリモート ユーザー アカウントのログオフを強制できます。ログオフを強制すると、RGS セッションが終了します。この操作には、Windows 管理者権限が必要です。

異なる資格情報を使用して、すでにリモート デスクトップ接続セッションを行っている送信側コンピューターとの RGS セッションを開始しようとする、RGS で認証失敗メッセージが表示されます。このシナリオではログオフを強制できません。

 **重要**：セキュリティおよび認証に関する懸念については、以下の情報を参照してください。

- アクティブなリモート デスクトップ接続セッションから RGS セッションに切り替えると、リモート デスクトップはログオン済みのロック解除状態になる場合があります。ロック解除されたリモート デスクトップにセキュリティ上の懸念がある場合、この状態は望ましくありません。この問題を回避するには、RGS セッションを開始する前に、リモート デスクトップ接続を使用してリモート デスクトップからログオフします。
- スマートカードを使用して認証したアクティブなリモート デスクトップ接続セッションがあるときに、そのリモート デスクトップ接続セッションを開始したものと異なる受信側コンピューターから、Easy Logon を使用して RGS セッションに切り替えようとする、RGS が、Easy Login では通常は要求されないユーザー名およびパスワードの入力を求めます。普段スマートカード認証を使用しているためにユーザー名とパスワードがわからない場合は、RGS セッションに切り替えることができません。このシナリオでは、スマートカードリーダーを解放して RGS が使用できるようにするために、リモート デスクトップ接続セッションを手動で終了する必要があります。

B リモートアプリケーション停止用のエージェントの作成（Windowsのみ）

RGSセッションが誤って終了された場合は、送信側コンピューターのアプリケーションが管理されない状態で動作し続けることがないように、アプリケーションを停止できます。

この付録では、リモートアプリケーションの停止機能を提供する送信側コンピューター上のエージェントを作成する方法について説明します。このエージェントは、RGS Sender イベント ログ HPRemote のイベントを監視することにより、リモートアプリケーションを停止します。


HPRemote ログの表示

HPRemote ログを表示するには、以下の操作を行います。

1. [スタート]→[コントロールパネル]→[管理ツール]→[コンピューターの管理]の順に選択します。
2. 左側のパネルで、[システムツール]→[イベントビューアー]→[HPRemote]の順に選択します。

HPRemote ログには、最近の RGS 接続アクティビティに関する情報が含まれます。初期設定では、最新のイベントから一覧表示されます。

イベントのプロパティを表示するには、そのイベントをダブルクリックして、[Event Properties]（イベントプロパティ）ウィンドウを開きます。

 **注記** : Windows イベント ログについて詳しくは、マイクロソフト デベロッパー ネットワーク (MSDN)、<http://msdn.microsoft.com/> を参照してください。

HPRemote ログの形式

HPRemote ログのデータには、メッセージ ID に続き、文字列形式とバイナリ形式の両方のオプションデータが含まれています。

以下の表では、HPRemote ログに記録されるイベントについて説明します。メッセージ ID は、ヘッダー ファイル RGSenderEvents.h 内で定義されている 32 ビット値です。EventID は、メッセージ ID 内の Code フィールドに含まれており、HPRemote ログでは 1~13 の範囲です。

メッセージ ID	説明
RGSSENDER_CONNECT_STATE イベント ID : 3	接続ステートです。プライマリ ユーザーの接続数 (0 または 0 以外) および非プライマリ ユーザーの接続数 (0 または 0 以外) を示します。イベントレコードでは、各カテゴリでのアクティブな接続数が記録されます。特定の接続の接続ステータスに変更があると、イベントが発生します 最初のフィールドは、プライマリ接続の数です。2 番目のフィールドは、非プライマリ接続の数です。ステートフィールドには、文字列および 32 ビットの符号なし整数が含まれます イベントビューアーのメッセージ： Primary connections: %1. Non-primary connections: %2. 文字列： %1 = プライマリ接続の数

メッセージ ID	説明
	<p>%2 = 非プライマリ接続の数</p> <p>データ :</p> <p>UINT32 numPrimary</p> <p>UINT32 numNonprimary</p> <p>イベントビューアーの例 :</p> <p>Primary connections: 1. Non-primary connections: 0.</p>
RGSENDER_CONNECT イベント ID : 4	<p>関連付けられた名前を使用して、新しい接続が確立されたことを示します。Easy Login が有効の場合、ログインまで名前の割り当ては保留されますので、関連付けられた名前は Anonymous となります</p> <p>イベントビューアーのメッセージ :</p> <p>Connect %1.</p> <p>文字列 :</p> <p>%1 = name associated with connection</p> <p>%2 = 受信側コンピューターの IP アドレスおよびポート番号</p> <p>データ :</p> <p>なし</p> <p>イベントビューアーの例 :</p> <p>Connect MYDOMAIN¥myusername.</p>
RGSENDER_DISCONNECT イベント ID : 5	<p>受信側コンピューターが切断したことを示します。メッセージには、接続に関連付けられた名前が含まれています。Easy Login が有効になっているときに受信側コンピューターがログインの前に切断した場合、関連付けられた名前は Anonymous となります</p> <p>イベントビューアーのメッセージ :</p> <p>Disconnect %1.</p> <p>文字列 :</p> <p>%1 = name associated with connection</p> <p>%2 = 受信側コンピューターの IP アドレスおよびポート番号</p> <p>データ :</p> <p>なし</p> <p>イベントビューアーの例 :</p> <p>Disconnect MYDOMAIN¥myusername.</p>
RGSENDER_STARTUP イベント ID : 1	<p>リファレンスイベントであり、イベントビューアーでイベントログを解釈する上での参考になります。RGS Sender サービスの正しい起動を示します</p> <p>イベントビューアーのメッセージ :</p> <p>RGS Sender startup.</p> <p>文字列 :</p> <p>なし</p> <p>データ :</p> <p>なし</p>

メッセージ ID	説明
RGSENDER_SHUTDOWN イベント ID : 2	<p>リファレンスイベントであり、イベントビューアーでイベントログを解釈する上での参考になります。RGS Sender サービスの正しい方法でのシャットダウンを示します</p> <p>イベントビューアーのメッセージ： RGS Sender shutdown.</p> <p>文字列： なし</p> <p>データ： なし</p>
RGSENDER_SET_PRIMARY イベント ID : 6	<p>関連付けられた名前を使用した接続を、プライマリ接続として設定することを示します</p> <p>イベントビューアーのメッセージ： Set %1 as primary connection.</p> <p>文字列： %1 = name associated with connection</p> <p>データ： なし</p> <p>イベントビューアーの例： Set MYDOMAIN¥myusername as primary connection.</p>
RGSENDER_SET_NONPRIMARY イベント ID : 7	<p>関連付けられた名前を使用した接続に、非プライマリ状態を割り当てます。ログアウトの結果、発生することがあります</p> <p>イベントビューアーのメッセージ： Set %1 as non-primary connection.</p> <p>文字列： %1 = name associated with connection</p> <p>データ： なし</p> <p>イベントビューアーの例： Set MYDOMAIN¥myusername as non-primary connection.</p>
RGSENDER_ASSIGN_USER イベント ID : 8	<p>Easy Login が有効の場合、ログインまで名前の割り当ては保留されます。名前の割り当て時に、このメッセージが生成されます</p> <p>イベントビューアーのメッセージ： Assign %1 connection to %2.</p> <p>文字列： %1 = 接続の元の名前 %2 = 接続の新しい名前</p> <p>データ： なし</p> <p>イベントビューアーの例：</p>

メッセージ ID	説明
	Assign Anonymous connection to MYDOMAIN¥myusername.
RGSENDER_USB_CONNECT_DEVICE イベント ID : 9	<p>リモート USB が USB デバイスを送信側コンピューターにマウントしたことを示します</p> <p>イベントビューアーのメッセージ :</p> <p>USB Device Connect:Class=%1, Vendor ID=%2, Product ID=%3, Manufacturer=%4, Product=%5</p> <p>文字列 :</p> <p>%1 = USB device class %2 = USB device vendor ID %3 = USB device product ID %4 = USB device manufacturer string %5 = USB device product string</p> <p>データ :</p> <p>なし</p>
RGSENDER_USB_DISCONNECT_DEVICE イベント ID : 10	<p>リモート USB が USB デバイスを送信側コンピューターからマウント解除したことを示します</p> <p>イベントビューアーのメッセージ :</p> <p>USB Device Connect:Class=%1, Vendor ID=%2, Product ID=%3, Manufacturer=%4, Product=%5</p> <p>文字列 :</p> <p>%1 = USB device class %2 = USB device vendor ID %3 = USB device product ID %4 = USB device manufacturer string %5 = USB device product string</p> <p>データ :</p> <p>なし</p>
RGSENDER_CONNECT_USB_DENIED イベント ID : 13	<p>USB デバイス接続が USB のアクセス制御リストによって拒否されました</p> <p>イベントビューアーのメッセージ :</p> <p>USB Device Connect:Class=%1, Vendor ID=%2, Product ID=%3,</p> <p>文字列 :</p> <p>%1 = USB device class %2 = USB device vendor ID %3 = USB device product ID</p> <p>データ :</p> <p>なし</p>

エージェント設計のガイドライン

リモートアプリケーションの停止機能を提供するエージェントを設計するには、データの損失を最小限に抑えたり、切断されたデスクトップセッションの最後の手段としてのシャットダウンが必要なときを決定したりするために、多くの問題を考慮する必要があります。ユーザー環境で使用するアプリケーション制御エージェントの設計で考慮すべき点を以下にいくつか示します。すべての点が網羅されているわけではないため、これを出発点として、ビジネス環境にあった完成度の高い設計に役立ててください。

デスクトップセッションのログアウト

- **状況**：プライマリユーザー接続が切断されると、それがきっかけになってすべてのアプリケーションが完全にシャットダウンし、デスクトップセッションのログアウトが強制実行されることがあります（おそらく、指定された再接続の制限時間が経過）。これによって、リモートセッションへの接続がすべて切断されます。
- **利点**：デスクトップセッションのシャットダウン/ログアウトを完全に実装することによって、すべての接続を直ちに停止し、アプリケーションが管理できない状態で稼働を続けることを防ぎます。リモートセッションのシャットダウンによってワークステーションが解放されますので、他のユーザーが使用可能な状態になります。この方法は、最も確実で安全なデスクトップセッション管理方法です。エージェントは Windows ログアウトルーチンに基づいて環境をシャットダウンしますので、設計および結果がわかりやすいという利点があります。
- **課題**：デスクトップセッションのシャットダウン/ログアウトを強制実行すると、デスクトップセッション上の開いているアプリケーションでデータ損失が発生する可能性があります。セッションログアウトを強制実行すると、アプリケーションがアラートプロンプトを表示した場合には、ユーザーの操作によってデータを保存する必要があります。このプロンプトが原因で、対話型でのログアウトが遅れたり、中断されたりする可能性があります。また、セッションの終了によって、デスクトップ上のウィンドウ配置に関するメモリが破損したり、再起動でユーザーによる操作が必要になることがあります。

環境を選択してシャットダウン

- **状況**：環境を一部シャットダウンすることによって、目的のアプリケーションのみを終了します。デスクトップセッションログアウトを完全に実装するものではありません。このシャットダウンでは、監視や制御が必要となる重要度が最も高いアプリケーションのみを保護します。
- **利点**：後で接続できるように、アクティブなデスクトップセッションを残します。目的のアプリケーションだけを終了します。自動シャットダウンポリシーでは管理できないデータを保護します。任意の接続時間を使用したセッション復旧機能をサポートします。段階的に実行すれば（時間をずらしてアプリケーションをシャットダウンする）、“ソフトランディング”なシャットダウンが段階的に発生した後、最終的には完全なログアウトが実行されます。一定時間アイドル状態のリソースを、リモートサーバープールに戻すことができます。
- **課題**：実装が難しくなることがあります。複数のエージェントを連携して、レイヤー式のシャットダウンを実行する必要があります。その場合も、一部のアプリケーションでデータが損失する可能性があります。また、ユーザーが再接続してシャットダウンプロセスを停止しようとする場合は、複数のエージェントを中止/停止するためにマスターセマフォが必要になることがあります。

アプリケーションのラッピング

- **状況**：所定の環境内で、特定のアプリケーションのみを管理するエージェントを起動できます。エージェントおよびアプリケーションを関連付ける方法は、すべてのユーザーにとって安全策となります。
- **利点**：アプリケーション専用のエージェントは、プラグインまたはサポートユーティリティとして実装できます。将来的にソフトウェアプロバイダーがカスタムインターフェイスを提供すれば、これを使用してエージェントまたはオペレーティングシステムから安全なシャットダウンメッセージを処理できます。カスタムエージェントは、メンテナンスやアプリケーションリリースへの関連付けを個別に行うことによって、柔軟なサポートが可能になります。エージェントを独立させる設計なので、ユニットテストが可能になり、環境に依存する要件から切り離すことができます。
- **課題**：ユーザーが再接続するときに、エージェントを解除する機能が必要になります。アプリケーションと専用エージェントとの対話に問題が発生する可能性があります（グローバルなシャットダウン要求によるシャットダウンのみ）。専用エージェントの処理に影響が発生する可能性があります。

管理者アラート

- **状況**：環境をシャットダウンするのではなく、管理者またはオペレーターにアラートを送信しますので、ユーザーステータスを確認してからアクションを実行できます。このような監視機能を使用すれば、冗長なネットワークをリモートシステムに接続することによって、ユーザーの指示に基づいたシャットダウンを実行することもできます。
- **利点**：システムエージェントでは、システムに損害を与える操作を行う必要がありません。システムエージェントはアラート送信や監視を行うだけで、操作はユーザーが行います。
- **課題**：冗長なネットワークチャンネルが必要になる場合があります。サポートを担当する管理者またはオペレーターが必要です。

ユーザーの切断および再接続の予測

- **状況**：最初に、切断によって発生する影響をユーザーに警告する必要があります。データを保護するための安全策に対応できない、何も気付いていないユーザーにとっては、切断したセッションを保護するエージェントがわずらわしいものになってしまう可能性があります。たとえば、どの程度再接続すると安全策が実行されるのかを、ユーザーに通知する必要があります。リモートエージェントにアプリケーションのシャットダウン機能を実装する場合、ログインや検出時に大きくはっきりと“オプトアウト”パネルをユーザーに表示し、エージェントの処理をいつでも中断できることを示す必要があります。データ損失が発生する可能性があるため、安全策について慎重に話し合い、徹底してください。
- **課題**：データが完全に失われてしまう可能性があるため、タイムアウトを無効または指定する機能をユーザーに与えるべきではありません。

一般的なエージェント設計のガイドライン

エージェントの開発では、以下のガイドラインに従うことをおすすめします。

- 事後分析用に、エージェントの判断内容および処理を外部のログに記録するようにします。
- 各エージェントはそれぞれのオプトアウトダイアログを表示し、カウントダウンを示してから処理を実行します。

- 予想外の事態が発生することを想定します。データや生産性が損なわれる危険を低くするために、可能な限り結果に確信が持てる部分のみでアクションを行います。
- 必ずイベントログを読んでエラーコードを調べます。Windows イベントログシステムを活用することによって、RGS 通信方法の信頼性を確保できます。この方法でも十分ではないため、入手可能なあらゆる情報を活用することをおすすめします。

RGS Sender サービスの復旧設定

ここでは、RGS Sender の再起動オプションおよびエージェントの送信側コンピューターとの可能な対話操作について説明します。

ほとんどの Windows サービスでは、インストール時の初期設定として、自動再起動または復旧の機能が設定されません。RGS Sender サービスでも同様です。

RGS Sender サービスを再起動すると、失われた RGS 接続を再接続できます (システムエラーによって RGS Sender サービスを再起動できない場合を除きます)。

エージェントを設計するときは、十分な数のプライマリユーザー接続が存在することの目安として、稼働中の RGS Sender サービスが存在するかどうかを確認してください。プログラムでサービスの再起動を行う場合には、上記のテストは不要です。

RGS Sender サービスを自動再起動するように設定するには、プロパティの[回復]パネルで回復設定を変更する必要があります (サービスを右クリックし、[プロパティ]を選択します)。

[回復]タブでは、最初のエラー、次のエラー、およびその後のエラーで実行する処理をそれぞれ指定できます。[回復]タブのオプションには以下のものがあります。

- 何もしない
- サービスを再起動する
- プログラムを実行する
- コンピューターを再起動する

サンプルエージェント

以下の Windows エージェントのサンプルは、HPRemote イベントログを監視し、そのイベントを解釈します。プライマリユーザーの数が 0 に低下したかどうかを確認するために新しくコードが追加される場所を示すエージェントコードに、コメントが含まれています。その場合は、さらにコードを追加して、送信側コンピューター上のアプリケーションを終了できます。

サンプルコードは、HPRemote イベントログを読み取り、解釈する固定ポーリングの Windows エージェントです。エージェントは、以下の 2 つの関数を使用します。

1. `processEvent(eventServer, eventSource, dwEventNum)`
 - イベントログを開き、`dwEventNum` イベントを読み取って、イベントログを閉じます。
 - 読み取りが有効の場合、認識された `EventID` を処理し、戻ります。
2. `monitorEvents(eventServer, eventSource, seconds)`
 - 有限な長さの秒数 (または秒数が 0 以下の場合は無限) だけ実行します。
 - イベントログを開き、ログの長さを読み取って、イベントログを閉じます。
 - ログが変更されている場合は、`processEvent()` を実行し、変更されていない場合 X ミリ秒だけスリープします。

関数 `monitorEvents(...)` を正しく使うには、以下の文字列を関数呼び出しの中で定義する必要があります。

- `LPCTSTR eventServer` : 文字列が「`\\\\yourservername`」と定義されている場合、ログはリモートサーバー上に格納されます。文字列が空 (NULL) の場合、ログはローカルに格納されます (4つのバックスラッシュは、コンパイルすると2つの文字列定数になります)。
- `LPCTSTR eventSource` : ターゲットとなるイベントジェネレーターの名前です。例：
`rgreceiver`

サンプルエージェントは、`OpenEventLog`、`ReadEventLog`、`CloseEventLog` などの Microsoft® イベントログ関数を使用します。

サンプルエージェントを以下に示します。注意書きがある箇所には、ユーザー固有のコードを追加する必要があります。エージェントのヘッダーファイルである `RGSenderEvents.h` は、RGS Sender のインストールディレクトリの以下のパスにインストールされます。

```
\include\RGSenderEvents.h
#include <windows.h>
#include <stdio.h>
#include "RGSenderEvents.h"
#define BUFFER_SIZE 1024 // safe EVENTLOGRECORD size for now
#define EVENT_SERVER NULL // remote server = "\\\nodename"; local = NULL
#define EVENT_SRC "rgsender" // specifies specific event name source
in // HPRemote

BOOL processEvent(LPCTSTR eventServer, LPCTSTR eventSource, DWORD
dwEventNum)
{
HANDLE h;
EVENTLOGRECORD *pevlr;
BYTE bBuffer[BUFFER_SIZE];
DWORD dwRead, dwNeeded;
BOOL result;

// Open, read, close event log =====

if ((h = OpenEventLog(eventServer, eventSource)) == NULL)
{
... report error status ...
return true;
}

// Set the pointer to our buffer. Strings and data will get appended to
the EVENTLOGRECORD structure.
pevlr = (EVENTLOGRECORD *) &bBuffer
```



```

// Read the event specified by dwEventNum

result = ReadEventLog(h, // event log handle
EVENTLOG_SEEK_READ | // start at specific event
EVENTLOG_FORWARDS_READ, // advance forward
dwEventNum, // record to read
pevlr, // pointer to buffer
BUFFER_SIZE, // size of buffer
&dwRead, // number of bytes read
&dwNeeded); // bytes in next record
if (CloseEventLog(h) == false)
{
... report error status ...
return true;
}
// Process event (example: print out event) =====
if (result)
{
// We only know how to process specific events
if (pevlr->EventID == RGSENDER_CONNECT_STATE)
{
// Retrieve the two UINT32 fields of this message
// representing primary and non-primary connections.

unsigned int *pData = (unsigned int *)
(LPBYTE) pevlr + pevlr->DataOffset);
// Examine state of primary connections here for other
// agent response if number drops to zero...
... example only prints out retrieved record to console ...
printf ("Event: %u Primary: %u Secondary: %u\n",
dwEventNum, pData[0], pData[1]);
}
... Process other events here if desired ...
}
else
{

```

```

... report unrecognized event here ...
return true;
}
return false;
}
void monitorEvents(LPCTSTR eventServer, LPCTSTR eventSource, int seconds)
{
DWORD dwCurrentIndex = 0;
DWORD dwCurrentStart;
DWORD dwCurrentCount;
DWORD dwNewIndex;
int waitedFor;
// This function will monitor the log for the specified number of
// seconds. If seconds is less than zero, we will wait forever.
for (waitedFor = 0; seconds < 0 || waitedFor < seconds; )
{
HANDLE h;
// Open, read status of log, close event log =====
if ((h = OpenEventLog(eventServer, eventSource)) == NULL)
{
... report error status here ...
return;
}
// If an event is added, either the start or count will change.
// Get the start and count. Microsoft does not specify what
// reasons these functions could fail, so we cannot ensure
// success. Check the return value.
if (GetOldestEventLogRecord(h, &dwCurrentStart) == false ||
GetNumberOfEventLogRecords(h, &dwCurrentCount) == false)
{
CloseEventLog(h);
... report error - unable to obtain event logs ...
return;
}
if (CloseEventLog(h) == false)

```

```

{
... report error status here ...
return;
}
// Determine state of log change =====
// Compute the index of the last event. If the count is zero, then
// there are no events and the index is 0.
if (dwCurrentCount == 0)
{
dwNewIndex = 0;
}
else
{
dwNewIndex = dwCurrentStart + dwCurrentCount - 1;
}
// If the new index is different than the current, update the current
// and process the current event. Otherwise, we sleep for a while.
if (dwNewIndex != dwCurrentIndex)
{
// We have at least one new event. Print out the last event.
dwCurrentIndex = dwNewIndex;
if (dwNewIndex)
{
if (processEvent(eventServer, eventSource, dwCurrentIndex))
{
... event processing error here ...
return;
}
}
}
else
{
// No new events. Sleep for 1 second.
Sleep(1000);
waitedFor += 1;
}
}


```

```
}  
}  
return;  
}  
main( ... )  
{  
    ... setup and initialize agent ...  
    monitorEvents(EVENT_SERVER, EVENT_SRC, seconds);  
    ... cleanup agent here or send alerts ...  
    ... may wish to return status from monitorEvents ...  
}
```

C RGS のアンインストール

RGS Receiver または RGS Sender のアンインストール (Windows)

- ▲ [コントロールパネル]で[プログラムと機能]項目を開き、RGS Receiver または RGS Sender に対応するエントリ ([Remote Graphics Receiver]または[Remote Graphics Sender])をアンインストールします。

 **ヒント:** または、各インストーラーに /autoremove コマンドライン オプションを指定して、それぞれのアンインストールを実行できます。

RGS Receiver のアンインストール (Linux)

Red Hat Enterprise Linux または SUSE Linux Enterprise Desktop (SLED) で RGS Receiver をアンインストールするには、以下の操作を行います。

1. root としてログインします。
2. 以下のコマンドを実行して、RGS Receiver 用の RPM パッケージの名前を確認します。

```
rpm -q -a | grep -i rgreceiver
```

パッケージ名は、rgreceiver_linux_32-5.1-0 のような名前です。

3. 以下のコマンドを実行して、RGS Receiver 用の RPM パッケージを削除します。

```
rpm -e --allmatches rgreceiver_linux_32
```


HP ThinPro で RGS Receiver をアンインストールするには、以下の操作を行います。

1. root としてログインします。
2. 以下のコマンドを実行します。

```
fsunlock
```

```
dpkg -l | grep -i rgs-
```

RGS Receiver のコアパッケージおよび依存パッケージが一覧表示されます。

 **注記:** findutils という名前のパッケージも表示される場合があります。これはパッケージの説明に文字列「rgs」が含まれるためです。このパッケージは削除しないでください。

3. 以下のコマンドを実行して、一覧表示されたパッケージを削除します。


```
dpkg -P <パッケージ名> [<パッケージ名> ...]
```

 **重要:** パッケージ名を入力するときは、角括弧および山括弧は付けしないでください。構文については、[iii ページの管理者が入力する構文の例](#)を参照してください。

4. 以下のコマンドを実行します。

```
ln -snf ../tmp/tmpfs/var/opt /var/opt
```

5. Thin Client を再起動します。

 **注記** : ThinPro 7.0 以降では、hptc-rgs-usb パッケージは初期設定でオペレーティングシステム (OS) とともにインストールされています。このパッケージは削除しないでください。

RGS Sender のアンインストール (Linux)

1. root としてログインします。
2. 初期設定のインストーラー (install.sh) を使用してインストールした場合は、以下のコマンドを実行して、削除する RGS Sender パッケージの名前を確認します。


```
rpm -q -a | grep -i rgsender
```

パッケージ名は、次のような名前です。

- rgsender_linux_64-7.3.0-1
- rgsender_config_64-7.3.0-1
- rgsender_smartcard-7.3.0-1

3. 以下のコマンドを実行して、RGS Sender パッケージを削除します。

```
rpm -e --allmatches rgsender_linux_64 rgsender_config_64  
rgsender_smartcard
```

 **重要** : rgsender_config_64-*.rpm がインストールされている場合は、rgsender_linux_64-*.rpm の削除と同時 (または削除の前) に削除する必要があります。上記のコマンドは、両方のパッケージを同時に削除します。これによって、パッケージ間の依存関係が解除され、インストール中にパッケージが自動的に行った設定ファイルの変更が元に戻されます。

RGS Receiver のアンインストール (Mac OS)

1. 管理者としてログインします (または管理者の資格情報を入力できます)。
2. Finder ウィンドウを開き、**[アプリケーション]**を選択します。
3. **[HP RGS Receiver]**アイコンをゴミ箱にドラッグします。
4. (オプション) アンインストール後に RGS Receiver のすべての痕跡を削除するには、**/Library/Application Support/HP/rgreceiver/uninstall.command** に移動し、**uninstall.command** をダブルクリックして、画面に表示される説明に沿って操作します。

索引

A

Advanced Linux Sound Architecture
(Linux のみ) → 「リモートオーディオ」を参照

Advanced Video Compression
(Windows/Linux のみ) 38

ALSA (Linux のみ) → 「リモートオーディオ」を参照

D

Directory モード 59

E

Easy Login 39

H

HPRemote ログ
形式 95

HPRemote ログ (Windows のみ)
表示 95

HP Velocity (Windows/Linux のみ) 38

N

NVIDIA の解像度の調整 45

P

PulseAudio (Linux のみ) → 「リモートオーディオ」を参照

R

RGS Advanced Features
Advanced Video Compression
(Windows/Linux のみ) 38
HP Velocity (Windows/Linux のみ) 38

RGS Receiver
Directory モードでの起動 59
GUI (Mac OS) 16
GUI (Windows/Linux) 16
RGS セッションの開始 17
Setup Mode 20
インストール (Linux) 13
インストール (Mac OS) 13
インストール (Windows) 7

ウィンドウ (Mac OS) 19

ウィンドウ (Windows/
Linux) 17

概要 15

異なる RGS バージョンとの相互
運用性 3

コマンドライン オプション
27

自動起動プロパティ 82

ツールバー (Mac OS) 19

ツールバー (Windows/
Linux) 18

開く 15

RGS Receiver の設定

オーディオ 24

ジェスチャ (Windows のみ) 23

接続 22

統計 (Windows/Linux のみ) 26

ネットワーク 24

パフォーマンス 22

ホットキー 25

ログ 26

RGS Sender

イベントログ 30

インストール (Linux) 13

インストール (Windows) 10

概要 (Linux) 28

概要 (Windows) 28

異なる RGS バージョンとの相互
運用性 3

コマンドライン オプション
(Linux) 29

コマンドライン オプション
(Windows) 28

通知アイコン (Windows のみ) 29

ネットワーク インターフェイス
のバインド 88

リモートアプリケーションの
停止 (Windows のみ) 95

S

Setup Mode、RGS Receiver 20

U

USB → 「リモート USB」を参照

W

Wacom ペン、使用 (Linux) 52

い

イベントログ、RGS Sender
(Windows のみ) 30

インストール

RGS Receiver (Linux) 13

RGS Receiver (Mac OS) 13

RGS Receiver (Windows) 7

RGS Sender (Linux) 13

RGS Sender (Windows) 10

お

オーディオ → 「リモートオーディオ」を参照

オーディオの設定 → 「RGS Receiver
の設定」を参照

か

概要 1

画面ブランキング、送信側コン
ピューター 50

仮想キーボード 50

仮想マウス 50

き

キーボードレイアウト、サポー
ト 52

機能、概要 2

機能、使用 37

け

ゲームモード (Windows のみ) 52

こ

コマンドライン オプション

RGS Receiver 27

RGS Sender (Linux) 29

RGS Sender (Windows) 28

コラボレーション 41

- し
 - ジェスチャ、一覧 50
 - ジェスチャの設定 → 「RGS Receiver の設定」を参照
 - 自動起動プロパティ 82
 - 証明書 31
 - CA によって署名、受信側コンピューター 33
 - CA によって署名、送信側コンピューター 32
 - エンドユーザーによる検証 32
 - カスタム 32
 - 検証失敗ポリシー 31
 - 削除 35
 - 送信側コンピューターの検証 31
 - トラブルシューティング 36
 - シングルサインオン 39
- す
 - スマートカードリダイレクト 使用 40
 - トラブルシューティング 93
- せ
 - 接続の設定 → 「RGS Receiver の設定」を参照
 - 設定、RGS Receiver → 「RGS Receiver の設定」を参照
- そ
 - ソフトウェア、RGS との互換性 4
- た
 - タッチ機能 50
- て
 - ディスプレイの解像度の調整 43
- と
 - 統計設定 (Windows/Linux のみ) → 「RGS Receiver の設定」を参照
 - トラブルシューティング 86
 - グラフィックスの問題 (Linux) 91
 - スマートカードリダイレクト 93
 - 接続が失敗した場合 86
 - ネットワークタイムアウト 89
 - リモート USB (Windows/ThinPro のみ) 92
 - リモートオーディオ 91
- に
 - 認証 38
- ね
 - ネットワーク インターフェイスのバインド、RGS Sender 88
 - ネットワークの設定 → 「RGS Receiver の設定」を参照
 - ネットワークパフォーマンスの最適化 85
- は
 - パフォーマンスの設定 → 「RGS Receiver の設定」を参照
- ひ
 - 標準認証 39
 - 表示レイアウトの調整 43
- ふ
 - プロパティ
 - 構文 78
 - コマンドラインでの設定 78
 - 設定ファイルでの設定 78
- ほ
 - ホットキーの設定 → 「RGS Receiver の設定」を参照
- ま
 - マイク → 「リモート USB」を参照
 - マルチ モニターの概要 43
- ら
 - ライセンス登録、RGS Sender 4
- り
 - リモート USB (Windows/ThinPro のみ)
 - HP ThinPro での有効化 59
 - アクセス制御リスト 57
 - 概要 56
 - サポート 56
 - トラブルシューティング 92
 - マイク 57
 - リモート接続動作 56
 - リモート アプリケーションの停止 (Windows のみ) 95
 - リモートオーディオ
 - ALSA (Linux のみ) 54
 - PulseAudio (Linux のみ) 53
 - 概要 52
 - 仮想オーディオ デバイス (Windows) 53
 - 使用 (Linux ベースの送信側コンピューター) 53
 - 使用 (Windows ベースの送信側コンピューター) 53
 - トラブルシューティング 91
 - リモート クリップボード 概要 55
 - リモート デスクトップ接続 94
- ろ
 - ログ
 - RGS Receiver → 「RGS Receiver の設定」を参照